

内浦の少女たちと帰郷 した青年

アルト@FA20

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕の名前は時雨 祥一（しぐれ しょういち）。元々内浦に住んでいたけど親父の仕事の都合で7年前に神奈川に引っ越した。

高校を卒業し、内浦近郊で就職が決まったため内浦に帰ってきた。そんな青年と内浦の少女達（高海千歌、渡辺曜、桜内梨子）の物語。

目次

アニメ本編前

帰郷

幼馴染との再会1

幼馴染との再会2

千歌と曜とお出かけ

幼馴染みの不安

謝罪

寝起きドツキリ？

散歩と再会

アニメ本編

ピアノ少女との出会い

海の音と作詞作曲

109

95

65

52

36

29

17

13

5

1

ライブの宣伝

初ライブ

初ライブ後

仮入部からの：

ヨハネ降臨

誕生日記念ストーリー

高海千歌誕生日記念

桜内梨子誕生日記念

黒澤ルビィ誕生日記念

黒澤ダイヤ誕生日記念

松浦果南誕生日記念

国木田花丸誕生日記念

渡辺曜誕生日記念

397

379

360

344

323

291

259

237

216

198

170

144

小原鞠莉誕生日記念	424
津島善子誕生日記念	443
誕生日記念ストーリー2	
高海千歌誕生日記念2	456
桜内梨子誕生日記念2	469
黒澤ルビィ誕生日記念2	485
黒澤ダイヤ誕生日記念2	501
松浦果南誕生日記念2	515
国木田花丸誕生日記念2	527
渡辺曜誕生日記念2	537
番外ストーリー	
千歌と曜との出会い	556
クリスマスパーティー	576

アニメ本編前

帰郷

僕の名前は時雨 祥一（しぐれ しょういち）。今年の春に高校を卒業したばかりだ。内浦で生まれ、小学校6年までは内浦で育ったが親父の仕事の都合で神奈川県に転校することになった。

神奈川の生活環境は内浦とはあまりに違いすぎてどうしてもなれることが出来なかった。

しだいに『内浦に帰りたい』という気持ちが強くなり『大人になったら絶対に内浦に帰ってやる』という思いで過ごしてきた。

そして、高校の卒業に伴う就職活動で内浦近郊の会社の試験を受け、無事に内定が取れたためこの春に内浦に帰れることになった。

とは言っても帰れるのは僕自身だけで両親は定年退職まで内浦に帰れそうにはないけど……

親父たちもやはり内浦に帰りたいらしく『定年になったら絶対に内浦に帰ってやる』って言ってた。

そんなこんなで7年ぶりに内浦に帰ってきた。

僕「いやー、久しぶりの内浦だ。懐かしいなあ〜」

神奈川から車で約2時間、やっと内浦にたどり着いた。

余談だが車は高校を卒業する時に両親に交渉しまくって借金をして購入した。両親には頭が上がらない。給料を貰ったら少しずつ返していかないとな。

僕「えっと、これから住む場所はつと…あつた！あれだ！」

これから住む場所は家賃が安いのにそこそこ広く部屋も多い、更には駐車場も付いているという素敵なお物件だ。

ついでだが『十千万』も歩いて行けるぐらい近い。

僕「そういえば、あの子は元気かなあ…」

あの子とは幼馴染みの高海千歌のことである。

今年で高校2年生になるんだっけな。

久しぶりに顔を出したいと思っただけで突然行くのも少し気が引けるなあと思っ
ていた所で電話がかかってきた。

僕「もしもし?」

母「もしもし? 無事に内浦についた?」

僕「母さん。うん、さつき付いたところだよ。」

母「ならよかった。そういえば祥一の家、十千万の近くじゃん? ちゃんと顔でした?」

僕「いや、まだだけど?」

母「だめだよ! 行かないと! さつき千歌ちゃんと曜ちゃんと果南ちゃんの所にあんた
が内浦に引越すからそのうち顔出させるって電話したから早めに行つてよ!」

僕「マジか! わかった、早めに行くわ!」

母「ていうかすぐ行けよ(笑)」

母さん、なぜ笑う...?

僕「う、うん、分かったよ。」

母「絶対いけよ。じゃあね。」

内心顔を出す口実（？）を作ってくれた母さんに実は感謝していたりしている。だって僕へタレなんでもん。

僕「じゃあ、まずは十千万からいくかな。」

さっきまで突然行くのも少し気が引けると思ってたくせに散歩感覚で十千万に向かう僕なのであった。

幼馴染との再会1

引越し先から十千万までは徒歩1〜2分程度。あつという間に着いてしまった。十千万の正面玄関にいる犬が僕を見ては駆け寄ろうとしてくる。

?? 「ワン!ワン!」

僕 「お?しいたけ!久しぶりだなあ〜!僕のこと覚えててくれるか?」
しいたけ 「ワン!」

しいたけを撫でなから声をかける。すると玄関から1人の女性が現れた。

?? 「いらつしやいま…あれ?もしかして祥くん!？」

僕 「お久しぶりです、志満さん。」

志満 「久しぶり〜。いつの間にかこんなにおおきくなっちゃって。」

僕 「まあ7年も経ちますとね…」

志満 「とりあえず上がって!さつき千歌ちゃんが帰ってきて、曜ちゃんも一緒に居る

から！」

僕「はい、おじやまします。」

そんなこんなで十千万（高海家）にお邪魔することに。正直気まずい：なぜなら7年前、千歌と曜には黙って内浦を出てしまったからだ。でもここまできたら上がらないわけにはいかない。しょうがない、腹を括るか。

居間に通されてお茶を出してくれるということでしたら座つてると2階からドタと足音が聞こえてくる。

足音が止んだと思つたら今度は聞き覚えがある声で——

?? 「ねえ志満姉、みかん——えっ？」

僕「あっ？」

?? 「祥：くん：？？」

僕「千歌：？」

千歌「ねえ！祥くんだよね!?!久しぶり！いつ帰ってきたの!?!」

僕「千歌、久しぶり！今日、とうかついさつきだよ。」

千歌「そっか。なーんか、祥くん大人になったねえ。」

僕「千歌こそ、かわいくなつたな。」

千歌「はうつ：／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

僕「あ、そういえばさつき志満さんから曜も来てるって聞いたけど？」

千歌「あ、うん。今私の部屋にいるよ！いいいこ！」

そう言つて千歌は僕の腕を引つ張る。気まずい。気まずいけど今は普通に接してくれてるみたいだからこつちも普通に接しよう。

僕「お、おう。わかつたから引つぱるなつて！」

千歌のそういうところ、昔から変わつてなくてちよつと懐かしい。

千歌「曜ちゃん！曜ちゃん！」

千歌が曜を呼びながら部屋のドアを開ける。

もちろん僕の腕を掴んだままである。

曜「千歌ちゃんどうしたの？あっ——？」

僕「曜、久しぶり。」

曜「祥くん？祥くんなの！？久しぶり〜！いつ帰ってきたの!？」

僕「今日、というかついさつきだよ。」

曜「そうなんだ！旅行？千歌ちゃん家にとまるの？」

あ、まだ千歌と曜には言っていなかったな。

僕「実をいうと、高校を卒業してこの近くの会社で働くから内浦に引っ越してきたんだ。」

曜「てことはまた祥くんと遊べるってことだね！」

千歌「やったあ！また一緒だ！」

僕「おう！これからまたよろしくな！」

ようちか「よろしく！」

そう話していたとき、千歌の部屋のドアが開いた。

志満「あらあら、やつぱりここにいたのね。」

僕「ええ、千歌にここまで引つ張られました。」

志満「あらあら。あと祥くんのお茶とみかん、遠慮なく召し上がってね。」

僕「ありがとうございます。」

千歌「ねーねー、志満姉。私のみかんは？」

志満「もちろんあるわよ。あと曜ちゃんの分もね。」

千歌「わーい！やったあ！」

曜「ありがとうございます！」

志満「ふふ、ごゆっくりね。」

久しぶりの千歌と曜との話で盛り上がり、話の区切りがいい所で

僕「じゃあそろそろ行くわ。果南と曜の家にも顔だせて母さんに言われてるし……」

曜「あ、今日お父さんもお母さんもないよ？」

僕「マジか！」

曜「だから私、千歌ちゃん家に泊まるんだ〜♪」

千歌「曜ちゃんが泊まりに来るの久しぶりだね！今夜はいっぱい遊ぼうね♪」

曜「うん♪」

僕「そうか、じゃあ楽しんでな！」

千歌「祥くんは泊まらないの？」

僕「うーん、これから果南の所に顔だしに行くし、それが終わったら荷解きもしたいからなあ……」

それに年頃の女の子の家に泊まるのも気が引けるしね。

千歌「えー、また3人で夜まで遊びたかったのに……」

曜「千歌ちゃん、しょうがないよ。また今度誘おう？」

ちよつと落ち込んだ千歌と曜の顔を見て少し心が痛んだ。でも俺、男ですよ!?!女子高生の家でお泊まりなんてねえ……あ、でもここは旅館か？自分の脳内でそう思いながら

僕「ごめん、また今度な！」

そう言って十千万を後にしようとして玄関まで下りたところで――。

?? 「お？祥くんじゃん！こつちに着いたんだね！」

僕 「美渡さん、お久し振りです。」

美渡 「久しぶり！なーんか男前になつちやつてえ！」

めつちやニヤニヤしながら脇腹をつついて来るんですけど…

僕 「ちよつ！美渡さん！そこはダメっす！」

そう、僕は脇腹をつつかれるのが苦手なのである。美渡さん、それを知ってから会う度にやつて来たけど今もやつて来るとは…

美渡 「ははは！そこは変わらないね！」

僕 「…もう。美渡さんもそういうところ変わらないですね…」

美渡 「ごめんごめん！そういうえげまたこつちで暮らすんだつてね。」

僕 「ええ、これからまたよろしくお願いします。」

美渡 「よろしく！」（バシーン！）

そう言つて美渡さんは僕の背中を叩く。地味に痛い…

美渡さんとも顔を合わせた後、淡島のダイビングショップ（果南の家）に向かうのであつた。

幼馴染との再会2

千歌の家を出てから1度自宅に戻り、車で淡島との連絡船乗り場まで向かう。本当は歩いていこうと思っていたけれど時間の都合上、車を使う事にした。

連絡船乗り場の駐車場に車を止め、連絡船に乗り込む。

僕「久しぶりに乗ったけど、やっぱり風が気持ちいいなあ。」

連絡船に乗るのも7年ぶり、あの頃も船に乗るのが好きだったっけな。

そう思っていたところで淡島に到着。

船着場からダイビングショップまで少し歩いたところで到着。

僕「ここもあの頃のままだなあ。さあて、中に入りますか。ごめんくださいーい！」

〇〇「はい、いらっしやいませ！あつ？祥？」

僕「久しぶり、果南。」

果南「久しぶり！さつきお母さんから聞いたよ。内浦に帰ってきたんだって？」

僕「うん、これからまたよろしくな！」

果南「うん、よろしくね！そしておかえり！」

僕「ただいま！」

その後、しばらく果南と今までの話をしているとおじさんとおばさんも入ってきたので挨拶を交わした。

あと余談だが果南は7年前、僕が内浦を出ていくことを知っていたらしい。どうやらおじさんとおばさんから話を聞いていたようだ。それもあつてか果南には黙って内浦を出ていくことはなかった。

僕「んで、さつき千歌の家に行ってきたけど千歌に腕を引っ張られるわ、美渡さんに脇腹をつつかれるわ、背中を叩かれるわで大変だったよ。」

果南「あはは…ホント、あの時と変わらないね。」

僕「うん、なんか懐かしかったなあ。僕、兄弟いないからあの頃、千歌の家に行くと姉と妹が出来た感覚でなんか嬉しかったんだ。その感覚が今日は甦った気がしたよ。」

果南「兄弟か…：そういうえば小さい頃千歌と曜と私、祥のこと『祥にい』なんて呼んで

たね。」

僕「そうだったね！僕も志満さんや美渡さんのこと『志満ねえ』『美渡ねえ』なんて呼んでたなあ。」

果南「なんだか懐かしいね！あの頃はずっと一緒にいたもんね！また一緒にいられるね。」

僕「ああ！また遊ぼうな！」

果南との昔話に花を咲かせているとあつという間に時間が過ぎていった。

僕「じゃ、そろそろ帰るわ！荷解きもしたいし。」

果南「うん、じゃあまた遊びに来てね！」

僕「おう！」

果南と別れ、家に向かつて車を走らせる。

荷解きをしようと思ったけどお腹がすいたので帰りに夕飯を調達してからの帰宅し、夕飯を食べる。

僕「一人暮らしの飯って味気ないな…」

そうボヤキながらご飯を食べ、その後荷解きを黙々と開始した。

千歌と曜とお出かけ

さて、今日は一人暮らし2日目。仕事が始まるまではあと数日ある。荷解きもほとんど終わっているのもあつてか目覚めはわりと爽快。時刻は午前7時。とりあえず朝ごはんを食べたら散歩かドライブでもしようかなあ。と思っていたらインターホンがなった。

ピンポン！

僕「朝早くから誰だ？」

扉越しに誰がいるか確認したら千歌と曜だったのでドアを開けた。

千歌「祥くんおはよー！」

曜「おはヨーソロー！」

僕「千歌、曜、おはよう。何で家の場所知ってんだ？」

千歌「志満ねえから聞いたんだー！」

僕「なるほどね。」

志満さんに家の場所を教えた覚えはない。

親父か母さんが教えたのか？まあどっちにしろ教えるつもりだったからいいや。

千歌「ねーねー！朝ごはんまだ食べてない？食べてないなら家で食べようよー！」
曜「どうせ昨日の夜も『味気ねえ〜』っていいながらご飯食べてたんでしょ〜？」
僕「そ、そんなこと…ねーよ…？」

よく分かったな？もしや曜はエスパー!?

曜「やっぱりな（ニヤニヤ）」

千歌「祥くん、バレバレだよ？」

僕「うっ…」

千歌「で、朝ごはんまだ食べてないの？」

僕「うん、食べてない…。」

千歌「じゃあ家で食べよ！ほら、行くよ！」

曜「全速前進、ヨーソロー！」

そう言いながら右手を曜、左手を千歌に引つ張られる。

僕「わかつたから引つ張らないでくれ〜!!」

朝から元気全開な千歌と曜に引つぱられて腕がいたい…家から腕を引つ張られた状態
態で十千万に到着。

千歌「ただいまー！祥くん連れてきたよー！」

僕「お、おじやます。」

なお、今も腕を引つ張られている…

志満「祥くんいらつしやーい。ご飯出来てるわよ〜。」

僕「すいません、突然おじやました挙句ご飯までご馳走になることになってしまつて

…」

志満「そんなみずくさいこと言わないの！ 祥くんは弟みたいなものなんだから。」
僕「はあ。」

はあなんて言ってしまったけど7年も離れていたのに未だに弟のように思っていては実は内心かなり嬉しかったりする。

千歌「お腹すいたよ。早く食べようよー！」
僕「おう！」

そんな流れで高海家の食卓で朝食をいただくことに。やっぱり誰かのご飯を食べるのがいいな。

3人「ごちそうさまでした！」

志満「はい、お粗末さまでした。」

僕「おいしかったです。ありがとうございます。」

志満「いいのよ。また寂しくなったら来てね。」

僕「ありがとうございます。」

千歌「祥くん、今日は何か予定あるの？」

僕「いや、特にないからこの辺を散歩するかドライブしようかと思ってたけど。」

千歌「じゃあさ！私と曜ちゃんと沼津に行かない？久しぶりに買い物に行きたいんだ
〜！」

僕「うん、いいよ。」

千歌「わーい！やったあ！」

曜「祥くんありがとね！」

それから個人の準備のため一時解散し、その後僕の家集合してから車で沼津に向かう事に。なんかバス代が浮いたとか言ってるんだか、僕は俗に言うアツシーくんってやつですかね？そう思ってるうちに沼津のショッピングモールに到着。

千歌「祥くんこっちこっちー！」

曜「はやくはやくー！」

僕「わかったから腕引つ張るなつて！」

今朝同様、千歌と曜に腕を引つ張られる。たどり着いたのは女性用ファッション売り

場。どうやらここに来たかったらしい。色々な服を持ってきては試着し、僕の反応を確認してくる。言ってしまうと千歌も曜も元々かわいいからかなにを着ても似合ってる。ただ、1着だけかなり好みの服をチョイスをしたため別の感想を言った。

僕「その服めっちゃ好みだわ。」

『好み』ってワードがミソだったのか千歌と曜はその服を持ってレジに向かっていた。千歌と曜が服を買ったあと、時間もお昼頃になったためフードコートで食事をする事にした。

僕「やつぱりお昼時だから混んでるな。とりあえず先に席を取るか。」

曜「そうだね。」

とりあえずフードコート内をブラついていたらちょうど食べ終わって席を立とうとする組がいたのでそこに座ることにした。

僕「千歌と曜、先に買ってきていいよ？俺は座ってるから。」

千歌「うん、ありがとう。」

曜「じゃあ買ってくるね！」

とりあえず2人が帰ってくるまでしばらくスマホをいじっていたら案外早く帰ってきた。

千歌「祥くんお待ちせ！」

曜「ただいま！」

僕「おかえり！俺もかってくるね！」

さーて、何を食べよっかなー？

お？インドカレーがあるじゃん。店員さん、インド人じゃん。なんか無性に食べたくなって来たからこれにしよっかなー？

カレー屋「イラッシャイマセ！」

僕「えっと、このナンとご飯のセットのやつ下さい。カレーはバターチキンカレーとキーマカレーで。」

カレー屋「ワカッタヨ！」

しばらくお店の前で待たされる。このお店、呼び出しのブザーがないのね。

カレー屋「オマタセシマシタ！」

僕「ありがとうございます。」

さてと、席に戻るか。

席に戻ったら千歌と曜もそれぞれのご飯を持っていた。千歌はうどん、曜はハンバーグを注文したようだ。

僕「お待たせ。」

千歌「もう、祥くんおそいよー！迷子になったかと思つたじゃん！」

僕「ごめんごめん、ブザーがないからお店の前で待つてたんだよ。」

千歌「そつか。それにしても祥くんのカレー、おいしそうだねえ。」

僕「うん、うまそうで気になったからこれにした。」

曜「じゃあみんな揃つたところだし食べよ！」

3人「いただきます！」

このカレー、うまい！ご飯もナンも進むね！

千歌「ねえ、祥くんのカレーちよつとちよつうだい？」

僕「ああ、いいよ？」

千歌「あーん」

あの…千歌さん？あーんって…

ご自分でお召し上がりにならないのでしょうか？

千歌「早く。」

僕「わかったよ。ほら、あーん。」

千歌「ぱくつ、おいしいねー！」

そんな千歌の隣で曜が半口を開けながら千歌と僕を見ている。とりあえず何も考えずに再びカレーを食べる僕。曜の顔と僕がカレーを食べるのを見て気づいたのか顔が赤くなり俯く千歌。

はっ…！これは間接キス…！

それに気づいた僕もなんだか顔が熱くなつて来た。

曜「ねえ、祥くん。私にもちようだい…／＼／＼」

そう言つて口を開ける曜。

僕「よ、曜…?」

曜「早く〜。」

あの、気付いたので言わせていただきますがめちやくちや恥ずかしいんですけど…
曜へあーんするのを躊躇っていると

曜「わたしには、あーんしてくれないの…? (ウルウル)」

今にも泣きそうな顔をする曜。

曜、その顔はずるいよ…

そんな顔をされたら断れるわけが無いじゃん。

僕「曜。ほら、あーん。」

曜「えへへっ♪あーん、ぱくっ。おいしいね…／＼／＼」

顔は赤いけど嬉しそうな顔をする曜。

この後曜とも間接キスすることになるやん。曜の視点からだともうやってるか。とりあえず平常心を装いながらカレーを再び頬ばろうとするが無理やなこれ。どうしても顔が熱い。この後3人とも顔を赤くしながら食事を済ませ、それぞれのお店に食器を返しに行った。

僕「ごちそうさまでした！」

カレー屋「アリガトウ！オニイサン、ワカイネー（ニヤニヤ）」

僕「なっ!？」

カレー屋さん、一部始終を見てたな!?!とりあえずめちやくちや恥ずかしかった。

僕「この後はどこに行くの？」

千歌「えっとね…適当にこの辺ブラブラしない…？／＼／＼」

「千歌はさつきのお昼のことをまだ気にしてるのか未だに恥ずかしがってるように見える。」

僕「うん、曜はそれでいいのか？」

曜「うん、私もそれでいい／＼／」

曜も千歌同じような状態じゃないか…

僕「うん、じゃあ行こっか。」

この後3人でその辺を適当に廻ったけど普通に楽しめた…と思う。

幼馴染みの不安

3人で散策を楽しみ時間的にそろそろ帰ろうかという流れになった時、曜からあることをたずねられた。

曜「ねえ祥くん。今日ならお父さんとお母さん、うちにいるけど寄ってく？寄ってくなら聞いてみるけど。」

僕「ごめん、お願いしていい？」

曜「わかった。まっつて。」

曜がスマホを取り出して親と連絡を取り始める。曜のところのおじさんとおばさんに顔出さなきゃいけないこと覚えててくれてたんだな。

曜「OKだつて。」

僕「サンキュ、曜。」

ということと沼津から曜の家まで車を走らせることに。

僕「ここでいいんだっけ？」

曜「うん、よく覚えてたね。」

僕「まあね、ガキの頃はよく遊びに来てたしね。」

曜が先に家に入り準備をしている間に僕は車を駐車する。

曜「千歌ちゃん、祥くん、入っていいよ。」

僕&千歌「おじやましまーす！」

曜母「あらいらっしやい！祥くん、大きくなつたねえ。」

僕「おばさん、お久しぶりです。」

曜父「おう祥一！お父さんとお母さんは元気か？」

僕「おじさん、お久しぶりです。はい、親父も母さんも元気ですよ。」

久しぶりの曜の両親との会話では、神奈川での生活はどうだったとか神奈川では彼女はいたのかとか色々聞かれた。彼女の話をされたときには千歌と曜がやたら反応して

たな。言ってしまうとこれまで彼女なんていたことがない。もつと言ってしまうと告白したこともされたこともない。べ、別に寂しくなんてないからなっ！そのことを話したらなんか2人ともホツとしてたけどおじさん、おばさんとの話に気を回してたのであまり気にしなかった。

色々話していたら外はもう暗くなっていた。

曜母「千歌ちゃん、祥くん、今日は晩御飯食べていかない？」

千歌「いいんですか？やったあ！」

僕「いいんですか？ありがとうございます。」

こうして曜の家で晩御飯をいただくことに。今日はご馳走になっただけだなあ。

晩御飯をいただいてから千歌と曜はおばさんの手伝い、僕はおじさんと話をしていた。

曜父「なあ祥一？」

僕「はい？」

曜父「7年振りに見た幼馴染2人のことどう思ってる？」

僕「どうって、やっぱり7年も離れていたから2人とも大きくなって…なんというか、2人ともかわいくなつたと思います。」

曜父「そうか。まあ祥一が2人のことを悪く思っていないようで安心したわ。」

僕「？」

曜父「実はな、曜のやつ自分が祥一に顔も見たくないほど嫌われたんじゃないかと不安だつたんだよ。多分千歌ちゃんもそうだろう。」

僕「！」

曜父「7年前、曜と千歌ちゃんには黙って内浦を出ていったら？何も言わずに出て行ったからあいづらはお前に嫌われたって思ってたんだ。俺や母さん、千歌ちゃんの親御さんがお前が内浦を出て行った理由を話してからは少なくとも嫌われたわけじゃ無いって思うようになったけど。」

それをおじさんから聞いた瞬間、僕は何も言えなかつた。自分が黙って内浦を出て行ってしまったせいで幼馴染みをこんなにも傷つけ、不安にさせてしまったのか。あの頃の自分を殴りたくなつた。

曜父「と言いつつもやっぱり今まで不安だっただろう。その不安は本人から直接答えを聞かないと取り除けないだろう。なあ祥一、曜と千歌ちゃんのこと嫌いか？」

そんなわけが無い！そんなこと、あるわけない！

僕「そんなことない！俺が曜と千歌を嫌いなわけがない！」

曜父「だったらそれを、曜と千歌ちゃんに伝えてやってくれ。」

曜「2人ともなんの話をしてるの？」

曜父「わ！い、いや、なんでもないぞ？」

僕「お、おう！何でもないよ！」

千歌「怪しい…(ジト)」

曜「もしかして、エッチな話してたの？」

曜父「む、娘が近くにいるのにそんな話するわけないだろ。なあ祥一！」

僕「そ、そうっすよねー。」

曜「ふーん。そうそう、千歌ちゃんが今晚家に泊まってくことになったけど祥くんはどうする？」

僕「うーん、僕は帰ろうと思うけど…？」

千歌「えー！いいじゃん！久しぶりに泊まろうよー！」

曜「そうだよ！荷解きもほとんど終わったし、仕事もまだはじまらないでしょ？」

僕「いや、でも…」

千歌「ねえ、祥くん…」

曜「もしかして、お泊まりするのいや…？」

千歌と曜が上目遣いでめっちゃ見てくる。しかも泣きそう…こんな顔されたら断れねーじゃん。

僕「わかった。じゃあご一緒しようかな。」

ようちか「わーい！やったー！」

千歌と曜が無邪気な笑顔で喜ぶ。そんな顔を見て内心ほっこりしているとおじさんが耳元でこう囁いた。

曜父「今夜は頑張れ。」

おじさん、何を考えてるんですか？ W

謝罪

7年前――。

僕「転勤……？」

父「ああ、神奈川に行く事になった。」

僕「な、なんだよ父ちゃん。そんな冗談は面白くないよ。」

母「残念ながら冗談じゃないのよ。」

僕「は？母ちゃん、どういう事だよ？」

母「お父さんの会社、戦略的都合で沼津の事業所を畳んで横浜の事業所と統合するこ
とになったの。」

僕「そんな……てことは向こうに行ったらもうこっちに帰って来れないって事なのかよ
！」

父「ああ、そういうことだ……」

この時、僕は目の前が見えなくなるぐらい泣いた。

嘘だろ？ 神奈川に行っちゃったらもう千歌と曜に会えないってことじゃねーか！ こんなの酷すぎるぜ！ どうしようも出来ないのかよ！

ガキの頃の僕はそれしか考えられなかった。

その後、千歌と曜に会うことはあつたがそのことを言い出せず、結局何も言わずに内浦を出てしまった。理由は千歌と曜の泣く顔を見たくなかった、ただそれだけだった。親父と母さんは千歌のご両親と志満さんと美渡さん、曜のご両親と松浦一家には神奈川に引越すことを話したらしいが千歌と曜にはおまえから話せと言われた。よつて2人には話していかなかったようだ。僕が千歌と曜に引越すことを話せなかったと知った時はめちやくちや怒られた。

それはそうだろう。だって幼なじみに黙って消えるようなことをしたんだから。

今現在——。

急遽お泊まりが決まったのでおじさんにパジャマを借りようとする。そしたらおじさんはすぐにパジャマを用意してくれた。服は洗濯して乾燥機にかけるから明日には着れる状態にしてくれるとのことだった。ありがたい。

先に千歌がお風呂に入るのその間、曜と僕は曜の部屋で待機する。しばらくすると

曜が話しかけてくる。

曜「ねー、祥くん？」

僕「んー？」

曜「なんで7年前、何も言わずにいなくなっちゃったの…？」

僕「！」

曜「なんで、わたしと千歌ちゃんには話してくれなかったの？」

僕「そ…それは…」

曜「ねえ！なんで！」

曜が目には涙をためながら叫ぶ。

7年前、僕が何もいわずに内浦を出て行ったせいで幼なじみを傷つけた。だからあの頃の気持ちを隠さずに話すと決めた。

僕「曜！ごめん！俺はあの時、曜と千歌が泣く顔を見るのが嫌だったから言い出せなかったんだ。その結果、黙っていなくなっちゃった！本当にごめん！」

曜「…！」パチン！

曜にビンタされた。

曜「わたしと千歌ちゃん、黙っていなくなられてどれだけ寂しかったとおもってるの!?」

千歌「そうだよ！」

このタイミングで千歌がお風呂から上がってきた。千歌も目に涙をためている。

千歌「あの時、祥くんが黙っていなくなっちゃったからわたし達嫌われたと思ったんだよ！」

曜「後で祥くんのお父さんが転勤する関係で引越したって聞いたから祥くんがわたしたちのこと嫌いになった訳じゃないって思えるようになった。でもやっぱり不安だった！悲しかった！寂しかった！」

千歌「だって祥くんがいなくなるのを知らなかったのわたしと曜ちゃんだけだったんだよ！こんなのあんまりだよ！やっぱりわたし達のこと嫌いなもの!?!」

千歌と曜のことが嫌い？

そんなわけが無い。

そんなことあるわけない！

僕「千歌！曜！」

2人を抱きしめる。

僕「千歌と曜のことが嫌い？そんなことあるか！むしろ好きだ！大好きだ！！」

ようちか「…えっ…？？」

僕「俺が千歌と曜のことを嫌うわけがない！そんなこと絶対に無い！」

千歌「ほ、本当？」

僕「ああ、本当だ。」

曜「本当に本当？」

僕「ああ、だからごめんな。黙って出て行って。寂しい思いをさせて。本当にごめんな。」

ようちか「う、うう……うわああああああん!!」

2人はダムが決壊したかのように僕の胸の中で泣いた。自分たちが嫌われてない本人から伝えられて安心したのだろう。僕も2人を抱きながら泣いた。2人のこの泣き様は本当に不安で寂しかったのだと思う。僕がやったことで千歌と曜を長年苦しめてきたのだろう。

2人が落ち着くまで結構時間かった。もう2人を悲しませることはしない。そう誓った。

僕「落ち着いた？」

ようちか「うん。」

2人が僕から離れると胸のあたりが2人の涙で濡れていた。涙だけじゃなく鼻水も付いてたけど……

曜「ごめんね祥くん。服、汚しちゃった……」

千歌「わたしもごめんね。」

僕「いいよ。洗濯すれば落ちるだろうし。それより曜、風呂入らなくていいのか？」

曜「入る、でもいいの？服汚れてるのに先に入っちゃって。」

僕「俺が泣かせたんだしな。」

曜「ありがと！じゃあ、先に入ってくるね！」

曜が風呂に行ったあと、部屋に千歌と2人きりになった所で千歌に声をかけられる。

千歌「…ねえ？祥くん。」

僕「んー？」

千歌「離れていてもわたしと曜ちゃんのこと好きでいてくれたんだね。」

僕「あ、あったりめーだろ…／／／」

千歌「えへへ、ありがとう。」ギユッ

そう言つて千歌は背中に抱き付いてきた。あの、胸が当たってるんですけど…？

僕「千歌…その…柔らかい物が当たってるんですけど…？／＼／＼」

千歌「はっ…！／＼／＼バカあああああ！／＼／＼」

千歌にポカポカと頭を叩かれる。

僕「痛い！千歌！痛いって！」

その後、なんだか気まづくなつて、と言うより恥ずかしくなつて一言も話さなかつた。

しばらくすると、曜がお風呂から上がってきた。

曜「祥くん、お風呂いいよー。」

僕「おう、サンキューな。」

曜にそう告げ、僕はお風呂に向かう。するとおじさんと遭遇する。

僕「お風呂いただきまーす！」

曜父「おう！お？その様子だともう大丈夫みたいだな？」

僕「ええ、お陰さまで。」

曜父「まあ、その服を見たらわかるわ（笑）」

あ、服に千歌と曜の涙と鼻水が付いてるんだった：

僕「曜と千歌にはそれだけ辛い思いをさせてしまったんだと思います。」

曜父「そうか。まあ風呂でも入ってこい。その間に洗濯しといてやるから。」

僕「ありがとうございます。」

そう言つて僕は風呂に向かった。

。

風呂から上がったととりあえずリビングに向かう。

僕「お風呂いただきました。」

曜母「はい。」

僕「ところで、僕は今日どこで寝ればいいんですか？」

曜母「どこつて？曜の部屋じゃない？」

僕「…はい？」

いやいや、ちょっと待つてください！年頃の男女が同じ部屋で寝ちゃアカンでしょ！

曜父「曜が自分の部屋に千歌ちゃんと祥一の分の布団敷いてたぞ。」

マジっすか…。

曜父「言ったら？『頑張れ』って。」

おじさん、マジ何考えてるんっすか…

曜母「分かったら早く行きなさい。2人とも待つてるわよ♡」

おばさん、さり気なく語尾に♡を付けないでください…

まあ、しゃーないと思いつながら曜の部屋に向かう。

そういえばガキの頃はお泊まりとなると同じ部屋で寝てたっけ。最初は別々の布団で寝たけど結局はどっちかが僕の布団に入ってきて…ひどい時は2人とも入ってきたな。さすがにこの年齢になればそれはないと思うけど…というかあつたらヤバイから！（僕の理性的な意味で）

僕「千歌、曜、上がったよ？」

曜「あ、祥くんおかえり。」

なんか部屋に布団が2枚敷いてあるんですけど…

僕「なあ、とりあえず質問させてくれ。曜、千歌、2人はどこで寝るんだ？」

曜「わたしはベッドだけど？」

千歌「わたしはここだよー。」

やっぱり、1人分の布団が余ってるじゃないすか。

僕「あの…つかぬことをお聞きしますが僕はどこで寝ればよろしいのでしょうか？」

曜「ここだよー。」

曜が余った布団に指をさす。

僕「なあ、これだけ言わせてくれ。さすがにこの年になって同じ部屋に男女が寝るのはマズイって。」

もちろん僕の理性的な意味でね。

千歌「えー！いいじゃん！あの頃は一緒の部屋に寝てたんだし！」

僕「ダメー！おじさんとおばさんに頼んで別の部屋で寝かせてもらいます！」

だって理性的にヤバいんだもん。

そう言つて曜の部屋を出ようとするのと千歌と曜に腕をつかまれた。

千歌「そんなにわたし達と寝るの…いや…？（ウルウル）」

曜「やっぱりわたし達のこと嫌いなのか？（ウルウル）」

やつべえ、そんな顔されたら断れねえ…

僕「わ、わかったよ…／＼／＼今日はここで寝るよ…／＼／＼」

ようちか「えへへ：／／／」

僕「ということだからもう寝ようぜ。なんか今日は眠くなってきた。」

千歌「そうだね。わたしも眠いの。」

曜「じゃあ、電気消すね。」

パチツ

曜「ねえ、祥くん？」

僕「んー？」

曜「祥くんが帰ってきてからまだ言っていないことがあるから言うね。」

千歌「あ、わたしも。」

僕「お、おう？」

なんだろ？俺、他にもなんかしたかな？

ようちか「…おかえり。」

僕「…ただいま。」

千歌と曜からおかえりって言われて内浦に帰ってきたという実感が強くなった。僕が内浦に帰ってたかった一番の理由、もしかしたら大好きな幼馴染がいるからだったのかもしれないな。そう考えているうちにいつの間にか眠りについていた。

寝起きドッキリ？

く祥一 Sideく

僕「う、ううーん…」

割とぐっすり眠ってた気がするけど目が覚めてしまったようだ。外はまだ暗い。

僕「今何時だ…？」

スマホの時計を見たらまだ午前4時だった。こんな時間に起きるとか俺はどことうふ屋の息子だ。パンドト○ノでとうふの配達とか行かないからな（笑）

それはさておき、なんか体になんか 柔らかい感触がするのだが…とりあえずそつちの方に目を向けると…

僕「ち、千歌！」

なんと千歌が僕の腕にしがみつくような姿勢で眠っていた。

千歌「…すー…すー」

とりあえず腕を千歌から引き離そうかと思ったけど千歌の寝顔を見ていると不思議とそんな気がなくなってしまうた。

千歌「…すー…すー」

僕「…よしよし。」

気持ちよさそうに眠っている千歌の頭を撫でてやると、つい昔のことを思い出し出してしまう。まだ小さかった頃、千歌は甘えん坊で僕のことを兄のように慕ってくれていた。僕の家泊まる時なんてほぼ毎回僕の布団に潜り込んできていた。

僕「いいや、このまま寝よ…」

そう言つて僕は再び眠りについた。

く曜 Sideく

なんか目が覚めちやつたなあ。あんなに眠かつたのに。外はまだ暗いな。とりあえず今何時だろ？

曜「5時か。」

スマホを置いて再び眠りにつく前にちよつと当たりを見回してみる。そこには眠つてる祥くと千歌ちゃんがいた。そういえば昨夜、祥くんが抱いてくれた時に久しぶりに嗅いだ祥くんの匂い、あの頃と変わらなくて安心したなあ。それによかつた。祥くんに嫌われてなくて。

それはさておき、目の前に見える光景に驚きを隠せないんだけど！

曜「…千歌ちゃんずるい！」

千歌ちゃん何してるの！自分だけ祥くんの布団に入っててずるい！わたしも入るんだから！

そう思いながらわたしは祥くんの布団に入るのであった。

曜「えっへへ、祥く〜ん♡」

く祥一 Sideく

目が覚めると太陽の光が僕の目に入ってきた。眩しい、でも心地いい光だ。そして体の両サイドに柔らかな感触が…

僕「……………」

今起こってることをありのままに話すぜ。4時ぐらいに目が覚めたときは千歌が僕の片腕にしがみつくように寝ていた。その状態が今も続いている。そこまではまあいい…いや、僕の理性的な意味ではあまり良くないけど…問題はそこじゃない。何も無

かったはずのもう片方の腕になんと曜がしがみついているではありませんか！僕の理性が着々と崩壊へと進んでいく。ヤバい…ヤバすぎる…とりあえず落ちつこう、深呼吸だ。

すうー…

はあー…

よし…

…

…

…

落ち着けんわ！とりあえず、片腕だけでも解放しよう！よつと…

むにゅん

曜「ん…／＼／＼」

あ、あの…そんな声出さないでもらえませんか？理性的な意味で結構ヤバいので…諦めずにもう少し腕を動かして見る。

むにゅつむにゅ

曜「ん、んんん／＼／」

なんかさつきよりもつかむ強さが強くなつてませんかね、曜さん？

しようがない、曜の方は後回しにして先に千歌の方の腕をほどくでしょう。

むにゅ

千歌「んっ…／＼／」

千歌までそんな声上げないでもらえない？俺の理性、そろそろ限界近いんよ…

これは早くほどかないとマズいな。

むにゅにゅっ

千歌「んんんっ／＼／」

俺の理性、ヤバイから！マジでヤバイから！それにさつきよりもつかむ力が強くなつ

てませんかね、千歌さん？

こうなったら何も考えずに一気に腕を引っこ抜く作戦だ。もう何も見えない、聞こえない、感じない。よし！

グツ！

ようちか「~~~~~！(ギユウウウウウウウ！)」

一気に腕を引き抜こうとしたら何故かものすごい力で腕を掴まれたのですが…

というか2人とも、実は起きてるだろ？なんかそんな気がしたので僕は聞いてみることにした。

僕「千歌、曜。起きてるか？起きてるなら返事してくれ。」

千歌「あはは、おはよ。」

曜「おはヨソロー。」

やっぱり起きてるじゃねーか…w

僕「おはよう。じゃなくて！とりあえずこの状況を説明してくれ。」

千歌「なんと言うか：横で眠っている祥くんを見ていたら昔を思い出して、それで久しぶりに祥くんの布団に入りたくなくて：あはは：」

僕「…」

曜「わたしはなんと言うか：千歌ちゃんが昔みたいに祥くんの布団に入ってるのをみてうらやましくなっつてつい…」

僕「…そうか…：とりあえず、手を離してくれない？」

曜「やだ！」

千歌「もう少しだけ。」

僕「……………」

この後、30分ぐらいこの状態が続いた。

その後、曜の家で朝食を頂き解散となった。というのもこの後、千歌は旅館の手伝いがあるとのことだそう。千歌を家まで送ると、志満さんと美渡さんが旅館の前に立っていた。

志満「おかえり、千歌。」

千歌「ただいま。」

美渡「千歌、ちょっと売店の整理やっといて。」

千歌「わかった。」

千歌が旅館に入っていたところで志満さんが僕に話しかけた。

志満「ちゃんと、7年前のこと謝れたみたいね。」

僕「ええ。ってなんでわかったんですか!？」

美渡「だって千歌のやつ、あんなにいい顔してたんだもん。なんとなくわかったよ。」

僕「そ、そうでしたか。何はともあれ、もう千歌と曜を悲しませたくないですね…」

志満「うん。ああ、それとね帰ってきた時から言おうと思ってたけど私たちには敬語使わなくてもいいのよ。」

美渡「むしろ使うなよ。こっちとしては結構寂しいんだからさ。」

僕「うん、わかったよ。」

志満「もつと言うなら昔みたいに『志満ねえ』『美渡ねえ』って呼んでくれてもいいのよ。」

僕「それは恥ずかしいからやだ（笑）」

美渡「ちえ。」

千歌「志満ねえ、お土産の在庫があと少しで無くなりそうだよ。」

千歌が旅館の入り口から志満さんにそう伝える。

志満「わかったわ、ありがとう。」

志満さんがそう言うのと千歌は再び旅館に戻る。

志満「それと、まだ言ってなかったわね。」

僕「？」

なんだろう？何かあったかな？

志満「おかえり、祥くん。」

美渡「おかえり！」

2人とも優しい笑顔でそう言ってくれた。

僕「ただいま、志満ねえ、美渡ねえ。」

あ、ついガキの頃の癖で『志満ねえ』『美渡ねえ』言っちゃったw志満さんはあらあらって顔してるし美渡さんはめっちゃイタズラ小僧っぽい顔してるし…

美渡「今『志満ねえ』『美渡ねえ』って言ったよな？な？」

僕「い、言ってるーし！／＼／＼」

美渡「言った言った！ほら、もう一回言ってごらん！」（ニヤニヤ）

僕「言わねえ！ぜってー言わねえ！」

このやり取りはしばらく続いた。なおその間、志満さんはずっとあらあらって顔して
た。

散歩と再会

千歌を家まで送ってから帰宅したもののやる事が無い…おいコラそこ、ニートとか言うなw一応まだ春休み中の学生だぞ（笑）

仕事関係の書類や銀行の口座の用意は引越す前には済ましてあるから大丈夫だ、問題ない。今日は散歩でもするか。

とりあえず適当にブラブラしてるとお寺に到着した。ここのお寺、ガキの頃親父と散歩するとはぼ毎回来てたんだ。あの頃とほとんど変わっていない懐かしい光景だ。そう思っていると1人の女の子に声をかけられた。

?? 「こんにちは。」

僕 「こんにちは。」

?? 「見かけない顔だけどこの辺は初めてずら？」

僕「いや、7年振りかな。小さい頃はこっちに住んでたけど父親の仕事の関係で神奈川に引っ越したんです。高校を卒業してこっちで仕事するようになったので帰ってきたのですよ。」

花丸「わわっ、年上だっだんだ。すみません。マルは国木田 花丸、今年で高校1年生になります。」

僕「花丸さんだから『マル』なのです。気にしないで、敬語じゃなくても大丈夫です。僕は時雨 祥一。今年高校を卒業して社会人になります。」

花丸「そういう時雨さんこそ敬語になってるすら。」

僕「うっ…」

確かに…

花丸「時雨さんも敬語を使わないでくれるとうれしいすら。」

僕「うん、わかった。じゃあついでと言ったらなんだけど呼び方も『時雨さん』じゃなくて『祥一』か『祥』って呼んでほしいな。」

花丸「わかったすら♪祥一くん」

僕「僕も国木田さんのこと『マルちゃん』と呼んでもいいかな？」

花丸「いいすら♪」

僕「ありがとう。」

それからしばらく、お寺の敷地内でマルちゃんとの話に盛り上がっていた。神奈川のことを聞かれて色々答えていたら「都会すら。」って反応してたのがちよつとかわかった。なんかそんな反応されると神奈川の生活環境が嫌で内浦に帰ってきたなんてちよつと言いつらいな…

そんなマルちゃんと会話をしていたら赤髪のツインテールの女の子がこちらにやって来た。

?? 「花丸ちゃ…ピギイ！」

その子は僕を見た瞬間逃げ隠れてしまった。僕ってそんなに怖い顔してるかなあ…悲しくなってきたよ（泣）

それもだけど…今、その子『ピギイ』っていったよな…？

花丸「あの子はマルのお友達のルビイちゃん。極度の人見知りずら…」

ん？ルビイ…？どつかで聞いたことがあるような…？

…

…

…

もしかして……！

僕 「マルちゃん！」

花丸 「は、はい！」

僕 「間違ってたらごめんね。今のルビイって子、もしかして『黒澤ルビイ』って子かい？」

花丸 「そ、そうだけど…何で知ってるずら？」

僕 「うん、ルビイちゃんは母さんの友達の娘さんなんだ。」

花丸 「そうなの!？」

その会話を隠れて聞いていたルビイちゃんはひよつこりと顔を出す。それを見た僕は遠くからだけドルビイちゃんに話しかけて見る。だって近づくとまた逃げちゃうかもしれないからね（泣）

僕「ルビイちゃん、久しぶり！時雨 祥一、ルビイちゃんのお母さんの友達『時雨 優海』の息子だけど忘れちゃったかな？」

ルビイ「時雨…？あ…？もしかして祥兄ちゃん…？」

僕「うん、覚えててくれてたか。」

ルビイ「うん！ちよつとあの時と雰囲気違ったから気づかなかったけどお兄ちゃんのことはおぼえてるよ！」

僕「そうか。覚えててくれて嬉しよ！」

ルビイ「すぐに気づけなくてごめんね。」

僕「ううん、いいよ。もう7年以上も会ってないから仕方ないよ。」

ルビイちゃんが僕が誰かと分かった途端こっちに來てくれたので昔みたいに頭を撫でた。

ルビイ「えへへ、お兄ちゃん：／／／」

改めて話すとルビイちゃんは母さんの友達のお嬢さんである。ただ、千歌や曜、果南と違いあまり会う機会がなかった。それ故に僕のことには忘れてしまったと思っていたがちゃんと覚えていてくれたようだ。

可愛いゾ！チクシヨー！

僕「そうだルビイちゃん、ダイヤちゃんは元気？」

ルビイ「うん、元気だよ…」

気のせいかもしれないけどルビイちゃんの表情がちよつと曇ったように見えた。何かあるのかとちよつと気になったけどなぜか聞く気にはなれなかった。

僕「そうか。ダイヤちゃんにもよろしく言つといてね。」

ルビイ「うん！」

僕とルビイちゃんが普通に話してる光景を見てマルちゃんは随分驚いた顔をしてた。後でマルちゃんから聞いたけどルビイちゃんは男性恐怖症らしい。そういえばそうだったっけ。でも僕とはわりとすぐに仲良くなれたような…なんでだろ？

まあそんなことは気にしない、しないでそろそろお暇しようかな。

僕「じゃあルビイちゃん、マルちゃん。そろそろ帰るね。」

ルビイ「お兄ちゃんもう帰っちゃうの？」

僕「うん、今度またゆつくり話そうな？」

花丸「また遊びに来てね。」

僕「うん、またね！」

ルビイ「お兄ちゃんまたね。」

花丸「またね。」

こうして、マルちゃんの所のお寺をあとにした。それにしても、散歩してたらルビイちゃんと再会できるとは思わなかったわ。今度、黒澤家にも顔出しに行かないとね。

その日の夜――。

今日は1人寂しく過ごすかと思つてたけど意外な所で意外な出会いをしたなあ。それに、ルビイちゃんとも偶然再会したし。あ、そうだ。母さんに連絡して黒澤さんの連絡先聞かないと…

ピツポツパツ
プルルルル：

母「もしもし？」

僕「もしもし、母さん？」

母「あら、祥一？どうした？ホームシック？（笑）」

僕「そんな訳あるか（笑）むしろ内浦での生活を満喫してるわ！」

母「あら、それはそれで寂しいなwんで、どうした？」

僕「黒澤さん家の連絡先を教えてくださいんだけど？」

母「いいけど、なんで？」

僕「今日、散歩してたら偶然ルビイちゃんに会ってさ、そういえば黒澤さんの所にはまだ挨拶してないなーって思ったんだ。」

母「そういうことね。わかった、ちよつと待ってて。」

この後、母さんから黒澤さんの連絡先を聞き出す。

僕「ありがとう、母さん。」

母「いいえ。ところで、千歌ちゃんと曜ちゃんには黙って内浦を出て行ったこと謝れたの?」

僕「うん、昨日ね。」

母「で、どうなった?」

僕「めちやくちや泣かれた…」

母「やっぱりね。あの子たちのこと、あんまり悲しませるなよ。」

僕「うん。」

母「じゃあ、また何かあったら電話しなさい。」

僕「うん、ありがとう。」

ピッ

さて、黒澤さんの連絡先をゲットしたことだし電話してみるか。

ピッポッパッ

プルルルル…

??「もしもし?」

僕「もしもし? 黒澤さんの番号でお間違いないでしょうか?」

?? 「はい、そうですけど?どちら様でしょうか?」

僕 「申し遅れました。時雨 祥一です。」

黒澤母 「あら、祥一さん。久しぶりね。内浦に帰ってきたんですって?ルビィから聞きましたよ。」

僕 「お久しぶりです。ええ、つい先日内浦に戻ってまいりました。」

黒澤母 「あらあら、そうだったのですね。」

僕 「ええ、それで内浦に戻ってからまだ黒澤さんの所にご挨拶に行けてないので都合がよろしい時にでもお伺いしたいなと思ひまして。」

黒澤母 「あら、そんな気を使わなくてもいいのに。うちはいつでも大丈夫ですよ。」

僕「では明日の11時頃でもよろしいでしょうか？」

黒澤母「ええ、お待ちしておりますわ。」

僕「ありがとうございます。ではその時間にお伺い致します。」

黒澤母「気をつけていらしてね。」

僕「はい、では失礼します。」

ピッ

なんだろう、昔は母さんの友達だからってあまり気を使つてなかつたけどいざ久しぶりに電話するのとめっちゃ気を使つてもうたわ。たつた数分の会話なのになんか疲れた。今日は早めに寝よう。

次の日――。

さて、身だしなみはこんな感じでもいいかな？寝癖は直したし、服装は別に普通でもいいだろ。単に母さんの友達に会いに行くだけだしスーツなんて着ていったら逆にドン引かれそうだな。時間は今出れば歩いて行っても十分間に合う。さて、行くか。

黒澤家に到着。あの頃と変わらず立派な屋敷だな。さて、呼び鈴鳴らすか。
ピンポン

黒澤母「はい？」

僕「時雨です。」

黒澤母「いらっしやい。ちよつと待っててね。」

言われたとおり門の前で待っているとルビイちゃんが出迎えてくれた。

ルビイ「お兄ちゃんいらっしやい！あがつて！」

僕「おつす！ルビイちゃん！おじやまします。」

ルビイちゃんが屋敷の中に入れてくれ、黒澤母がいる部屋へと案内してくれた。

黒澤母「あら、祥一さん。久しぶりね。」

僕「黒澤さん。お久しぶりです。」

黒澤母「随分見ない間に大きくなったわね。7年ぶりかしら？」

僕「そうですね、僕が内浦を出て以来ですので7年ぶりですね。」

黒澤母「あらあ…それだけ経てば立派になつてゐる訳ね。」

僕「いや、それでも無いですよ？」

黒澤母「まあ、謙遜しちゃつて。」

「?? 「お母様? お客様ですか?」

そう言つて部屋に入つてきたのは黒髪ロングの美人さんだった。

黒澤母「あらダイヤ? 祥一さんが内浦に戻つてきたつてことでわざわざいらしてくれ
たのよ?」

僕「おつす! ダイヤちゃん、久しぶり!」

ダイヤ「祥一さん! お、お久しぶりです! いつお戻りになりましたの?」

僕「ついこの前だよ。今でもピギってるのかな? (笑)」

ダイヤ「そんなことはありません! そういう所、あの頃と変わつてませんわね!」

僕「はっはっは、ごめんごめん。」

黒澤母「うふふ。あ、祥一さん？もうすぐお昼ですがご一緒にどうですか？」

僕「いいんですか？ありがとうございます！」

黒澤母「じゃあ準備するからゆつくりしててね。」

黒澤さんはダイヤちゃんを残してお昼の支度をするために部屋を出て行った。すると、ダイヤちゃんが話しかけてきた。

ダイヤ「そう言えば今日は優海さんはいらしてませんか？」

僕「あ、うん。実は帰ってきたのは僕だけで親父と母さんは今も神奈川にいるんだ。」

ダイヤ「そうだったのですね。てつきり祥一さんも神奈川でずっと暮らすのかと思つてましたわ。」

僕「うーん、言ってしまうと神奈川は遊びに行くのはいいけど住みたいとは思わないな。実際住んでみて向こうでの生活がどうしても合わなかったからこっちで仕事を探して帰ってきたようなもんだし。」

ダイヤ「あら、そんなに内浦がよろしくて？」

僕「うん、内浦を出てから割とすぐに恋しくなったね。」

ダイヤ「あら。」

僕「それにしてもダイヤちゃん、なんと言うか大人っぽくなったね。昔はすぐ泣きついてきたのに（笑）」

ダイヤ「もう！いつまでも子どもじゃありませんわ！」

僕「ゴメンゴメン。」

ダイヤちゃんは正直言つてビックリするぐらい大人っぽくなっていて、あの頃の面影がほとんどなくなっていた。なんだかそれはそれでちよつと寂しい。かといつて千歌と曜、ルビイちゃんも確かに大人っぽくなってない訳では無い。ただ、どこかあの頃の面影も残つてゐる感じはした。

僕「そういえばダイヤちゃん。1つ聞いていい？」

ダイヤ「はい？何でしょうか？」

僕「…ルビイちゃんと何かあった？」

ダイヤ「…突然どうしましたの？」

僕「いや、あのね？昨日ルビイちゃんと話した時に『ダイヤちゃんは元気？』って聞

いた時になんとなくルビイちゃんの元気がなくなった気がしたんだ。ちよつとそれが気になったけどその場で聞けなかったから聞こうと思ったんだ。ちよつと、今この部屋にはダイヤちゃんと僕しかいないしね。ただ、話したくなければ無理にはきかないけど。」

ダイヤ「そうでしたか。誰にも口外しないと約束して頂けるのでしたらお話します。」

僕「わかった、約束する。」

その後ダイヤちゃんが話してくれた内容はこんな感じである。

ダイヤちゃん、ルビイちゃん共にスクールアイドルが好きでよくその話をしたりしていた

← ダイヤちゃんが浦の星に入学、スクールアイドルを始める

← 活動自体は上々で、東京の大会に出場することになる

←

東京の大会に出場したが、歌えなかった

←

その後、色々ありスクールアイドルをやめ、嫌いにならざるを得なくなる

←

そこからルビィちゃんとの関係がギクシヤクし始める（イマココ）

僕「そんなことがあったのか…ただ、1つ引つかかる点があるな。」

ダイヤ「引つかかる点とは？」

僕「スクールアイドルを『嫌いにならざるを得なくなる』と言うところだ。なんとい
うか、自分の意思を殺して義務感で嫌いになろうとしているように感じたよ。」

ダイヤ「…！」

僕「ダイヤちゃん？スクールアイドル、本当は嫌いじゃないんじゃないかな？」

ダイヤ「…うん。」

僕「だったら、その気持ちを無理に殺さなくていいんじゃない？」

ダイヤ「……………」

あれ？ダイヤちゃん、怒っちゃった？何も知らない奴があーだこーだ言ったからか怒らせちゃったか？

僕「あ、えらそうな事言ってゴメン！ただ、好きなことを無理して嫌いになろうとしてるように見えてつい…。」

ダイヤ「別に、怒ってませんわ。ただ、祥一さんは本当に昔から変わらないなあと思いでまして…。」

僕「ホッ」

よかった。本気で怒らせたかと思っただわ…

ダイヤ「ありがとう、おかげで少し気が楽になりましたわ。でもこれに関してはすぐになんとか出来そうにありませんわ。」

僕「そつか、でも気が楽になってくれただけよかったの…かな？」

ルビィ「お姉ちゃん、お兄ちゃん。ご飯できたよ！」

会話のキリがいいところで、ルビィちゃんが部屋まで来てご飯が出来たことを教えてくれた。

ダイヤ「わかりましたわ。さあ祥一さん？行きますわよ。」

僕「おう！」

その後、黒澤家でお昼をいただいた際に神奈川はどうだった？とか親父と母さんの近

況について黒澤さんから色々聞かれた。

食事を終え、時間を確認すると割と長居していたことに気づいた。そろそろお暇するか。

僕「今日はありがとうございます。すいません、ご挨拶に伺ったはずなのに食事まで頂いてしまつて。」

黒澤母「いいのよ。優海さんの息子さんですし、それに普段は男の子とご飯を食べる機会なんてないから楽しかったわ。」

僕「そう言ってもらえてうれしいです。ではそろそろ失礼します。」

黒澤母「気をつけて帰つてね。あ、ルビイ？祥一さんを門まで見送つてきてくれる？」

ルビイ「うん！」

僕「では、おじやましました。」

黒澤家をでて門のところまで歩いたところでルビイちゃんがちよつと不機嫌そうに話しかけてくる。

ルビイ「むー。お兄ちゃん。」

僕「ル、ルビイちゃん？」

ルビイ「ルビイ、お兄ちゃんと全然お話出来てない。」

あ、そういうえば昨日も大して話せてなかったし今日も黒澤さんとダイヤちゃんとしかほとんど話せてなかったわ…

僕「ごめんよ、ルビイちゃん。お詫びと言っちゃなんだけど今度、どこかお出かけしようか？」

ルビイ「…うん！」

お出かけを提案したらどうやら機嫌を直してくれたみたいだ。よかった…

僕「ルビイちゃん、スマホ持ってる？」

ルビイ「うん。」

僕「じゃあ僕のLINE教えるから適当に都合のいい休みの日でも教えてくれる？その時にでも行こうか。」

ルビイ「うん！えへへ♪」

かわいいなあ…正直こんな妹が欲しかったw

僕「じゃ、また今度ね！」

ルビイ「お兄ちゃんバイバイ！」

お出かけするのをこんなに楽しみにしてくれるなんて……ルビィちゃんマジ天使!!
そう思い、一人でニヤニヤしながら歩いて帰る僕なのであった。

アニメ本編

ピアノ少女との出会い

僕「今日まで研修だけだったのにめっちゃ疲れた…」

とうとう新年度がスタートした。そう、僕は学生から社会人へ変わったのだ。これから頑張っていけないと。それにしても今まで研修しかやってないのになぜこんなに疲れたんだ？特別ハードな研修では無かったはず。環境の変化って怖いわ。

それはさておき、そういえば今日から高校生ぐらいが登校するのを見かけるようになった。千歌と曜も学校が始まったのかな？

そう考えているうちに家に帰り着いた。車を止めたら普段ならすぐに家に入るのだけど今日は少し海でも眺めるとしようかな。

海を眺めようとするとうちの2人の女の子が目に入った。1人は千歌だった。そしてもう1人は………

………

………

：

ん？水着着てる…のか…？

は!?!なんか飛び込もうとしてるんだけど！

千歌が水着の女の子を必死で止めようとしてる。俺も止めに行かないと!!

あと少して千歌とその女の子のもとにたどり着きそうな所で2人とも海に落ちてしまった。

僕「くそっ！間に合わなかったか！」

とつさに近くにあったタイヤを投げ、2人を引き上げる。2人とも軽くてよかった。

千歌「祥くん、ありがとう…」

??「ありがとうごさいます…」

僕「うん、それよりも体拭かないと風邪ひくぞ？」

千歌「ありがとう、家からタオルとってくるね。」

とりあえず千歌と女の子の暖をとるために火を焚くとするか。タバコは吸わない（と
うか吸ったらマズイ年齢）けどライター持っててよかった。

ちようど火が焚けたところで千歌がタオルを持って戻ってきた。

僕「とりあえず火は焚けたので体拭いたら暖まってください。千歌もね。」

??「はい、すみません。」

千歌「ありがとう。」

千歌「大丈夫？沖縄じゃないんだから。海に入りたければダイビングショップもある
のに。」

??「海の音を聞きたいの。」

僕&千歌「海の音？」

飛び込もうとしてたぐらだから地上で聞こえる音とは違う音を聞きたいってことかな？

千歌「どうして？」

飛び込もうとした女の子は応えようとしなない。

千歌「分かった、じゃあもう聞かない〜！…海中の音ってこと？」

??「ふふっ…私…ピアノで曲を作ってるの。でも、どうしても海の曲のイメージが浮かばなくて…」

千歌「ああ、曲を…作曲なんてすごいね！…ここらへんの高校？」

??「東京…」

千歌「東京!?!わざわざ?」

僕「東京の海は汚いからじゃない?」

千歌「祥くん?」(ジト)

はい、的はずれなこと言いました。ごめんなさい。そんな目で見ないでください(泣)

??「わざわざって言うか…」

千歌「そうだ!じゃ誰かスクールアイドル知ってる?」

ん?千歌?何故ここでスクールアイドルが出て来るんだ?

僕&??「スクールアイドル?」

千歌「うん！ほら！東京だと有名なグループたくさんいるでしょ？」

僕「ああ、μ s や A—RISE とか？」

千歌「うん！祥くんは知ってるんだね！」

僕「まあ、神奈川の友達がスクールアイドルが好きだからちよつと聞いてたぐらいだけだね。」

??「何の話？」

飛び込んだ女の子はスクールアイドルを知らないようだ。

千歌「へ…？」

一瞬、空気が凍った。

千歌「まさか知らないの？ スクールアイドルだよ！ 学校でアイドル活動をして、大会が開かれたりする！」

?? 「有名なの？」

千歌「有名ななんてもんじゃないよ！ ドーム大会も開かれたこともあるくらいだよー人気なんだよ！ って私も詳しくなったの最近なんだけど…」

千歌と俺の友達、なんか話しが合いそうだな。今度紹介してみようかな？

?? 「そうなんだ。私ずっとピアノばかりやってきたから、そういうの疎くて…」

興味が無かったら知らないのかもしれない。

千歌「じゃあ見てみる？ なんじゃこりやあ！ ってなるから！」

?? 「なんじゃこりや？」

千歌「なんじゃこりゃ！」

千歌がスマホを出して、画面を見せた。そこに映し出されたのは『μ s』だった。

??「これが…」

千歌「どう？」

??「どうって…なんというか？うん…普通？」

??「ああ！いいえ！悪い意味じゃなくて…アイドルって言うから、もっと芸能人みたいな感じかと思ったって言うか…」

千歌「だよね…」

??「えっ？」

千歌「だから、衝撃だったんだよ…」

??「えつと…」

海を眺めながら静かに口を開く千歌。

千歌「あなたみたいにずっとピアノを頑張ってきたとか、大好きなことに夢中でのめり込んできたとか…将来こんな風になりたいって夢があるとか…」

そう言いながら千歌は地面に落ちていた石を海に向かって投げる。

千歌「そんなもの一つもなくて…。私ね、普通なの。私は、普通星に生まれた普通星人なんだって…どんなに変身しても、普通なんだって。そんな風に思ってた、それでも何かあるんじゃないって…思ってたんだけど…。気がついたら、高二になってた。」

千歌、そんなこと思ってたんだ…

言われてみれば曜は水泳をやってたし僕は親父に連れられて多少だけどカートに乗ってた。1度、アマチュアの大会で選手に欠員が出たということで飛び入り参加した。なぜか優勝してしまったこともあったっけ。

千歌「まずっ！このままじゃ、本当にこのままだぞっ！普通星人を通り越して、普通怪獣ちかちーになっっちゃうー！って！」

千歌「ガオーツ！」

千歌はふり向いて飛び込んだ女の子の至近距離で怪獣の真似をする。ぶっちゃけそんなかわいい怪獣は倒す気になれない。

千歌「ピー！ドカーン！うおー！ジュジュジュユーー！ドーン！」

??「ふ、ふふっ……」

それを見て静かに笑う女の子。千歌なりに元気づけようとしたのかな。

千歌「えへへ……。そんな時、出会ったの。あの人たちに……」

千歌「みんな私と同じような、どこにでもいる普通の高校生なのに……キラキラしてた！」

千歌「それで思ったの！一生懸命練習して、みんなで心を一つにしてステージに立つと、こんなにも格好良くて！感動できて！素敵になれるんだって！スクールアイドルって……こんなにも……こんなにも……こんなにもっ！キラキラ輝けるんだって！」

スクールアイドルについて熱く語る千歌。ガキの頃に見たことないぐらい千歌の目は輝いていた。

千歌「気づいたら全部の曲を聞いてた！毎日動画見て、歌を覚えて、そして思ったの！私も仲間と一緒に頑張ってみたい……この人たちが目指したところを、私も目指したい！私も、輝きたいって！」

「そうか、千歌がそこを目指すなら応援しよう。俺としても協力出来るところは協力したい。」

?? 「ありがとう。何か頑張られて言われた気がする、今の話。」

千歌 「ほんとに?」

?? 「ええ! スクールアイドル、なれるといいわね。」

女の子は笑って千歌を見上げていた。

千歌 「うん! あ。私、高海 千歌! あその丘にある浦の星女学院って高校の二年生!」

僕 「僕は時雨 祥一。今年、高校を卒業しました。千歌とは幼馴染みなんです。」

梨子 「高海さんとは同じ年で時雨さんとは2歳差ですね! 私は桜内 梨子、高校は…」

音ノ木坂学院高校。」

音ノ木坂学院…？どこかで聞いたような…？

その時、その名前の学院について思い出すことは出来なかった。

—。

僕「千歌、浦の星でスクールアイドル始めるんだな？」

千歌「うん！」

僕「メンバーは他にいるのか？」

千歌「まだ私だけ…」

僕「曜とか誘ったの？」

千歌「だって曜ちゃんは水泳部があるから…」

僕「うーん、そっか…」

千歌が本気なら曜は一緒にやってくれそうだけど…まあ7年前から曜が心変わりしてなければ、ただどな…

。

その翌日、曜と一緒にスクールアイドルを始めること、桜内さんが転校してきたこと、桜内さんをスクールアイドルに誘ったけど断られたことを千歌からのL・O・N・Eで知った。

曜もスクールアイドルをやるなら尚更応援しないと。それと、協力出来ることが何かあれば協力させてくれて言っておこう。

海の音と作詞作曲

く祥一 Side く

僕「今日も仕事疲れた。帰ったらゆっくりしよつと。」

そう思いながら車を走らせ、家に到着する。車から降りてさっさと家に入ろうとしたが、ふと砂浜の方を見ると人影が見えた。

ん？ 見覚えのある人影だな？

よく見たら桜内さんだった。

僕「桜内さん？」

梨子「あ、時雨さん。」

僕「まさか、また海に飛び込もうとかしてませんかよね？」

梨子「してません！」

僕「ホツ、よかった。」

梨子「ふふつ、さつき高海さんともここで会ったけど、同じこと聞いてくるのね。」

僕「えっ、マジっすか…」

千歌と同じことを聞いているのか…

僕「ところで、海之音は聞けましたか？」

梨子「いえ、まだ…また高海さんと同じこと聞いている。」

僕「O, Oh…」

マジかよ、まさかこんなに聞くことが被るとは…w

梨子「それでね、今度の日曜日に海の音を聞きに行こうって言われたんだけど何をする気なのかしら？」

僕「海の音を聞きに行く…うーん…もしかしてダイビングじゃないかな？」

梨子「ダイビング？」

僕「ええ、あそこに見える島『淡島』っていうのですがそこにダイビングショップがあるんですよ。」

梨子「へえー。」

僕「こつちに帰ってきてからまだダイビングやってないからやりたいなあ…」

梨子「こつちに帰ってきて…？」

僕「あ、実を言いますと生まれと育ちは内浦なのですが親父の仕事の都合で7年前に神奈川へ引っ越したのです。今年の3月に高校を卒業してこっちで仕事を見つけて帰ってきたのですよ。」

梨子「そうだったのですね…」

僕「ええ、帰ってきて『やっぱり内浦は最高だ!』って思いましたよ。海の音、聞けるといいですね。」

梨子「ええ!」

—。

桜内さんと砂浜で話した日の夜、千歌からL O N Eが届いた。

千歌「ねえ祥くん?今度の日曜日空いてる?」

僕「空いてるけど？その日は桜内さんと海の音を聞きに行くんじゃない？」

千歌「なんで知ってるの!?もしかしてこっそり話聞いてた?？」

僕「そんなわけあるかw今日、砂浜で桜内さんに会ったからそんな時間いたんだよ(ω・、)」

千歌「そっか!なら祥くんも一緒に行かない？」

僕「いいの?女の子だけで行った方が気が楽なんじゃない?」

千歌「いいの!暇なら来てよ!」

僕「お、おう。」

そんな流れで僕も海の音を聞きに行くことになった。ぶっちゃけあまり気が進まな

いけど…

日曜日——。

千歌との待ち合わせ場所は、この前桜内さんと会った砂浜。時間には少し余裕があるけど準備もできたしもう行くとするか。

砂浜にはもう千歌と曜がいた。

僕「おはよー。」

千歌「おはよー!」

曜「おはよーソロー! 祥くんも一緒に行くんだね!」

僕「まあな、千歌に誘われた。ところで、桜内さんは?」

千歌「まだ来てないよ。もうすぐ来ると思うけど…あつ、梨子ちゃん！」
噂をすればなんとやら、か。

梨子「おはよー。あれ？時雨さんも一緒なんですか？」

僕「おはようございます。ええ、千歌に誘われまして…」

梨子「そうでしたか。」

桜内さんのなんとも言えない返答…だから気が進まなかったんだよ…

まあ少なくとも桜内さんが嫌そうな顔をしてないだけ救われたと思っておこう。

僕「ところで千歌、今日は何をするつもりなんだ？」

千歌「ダイビングだよ。」

僕「やっぱりな。」

曜「やっぱりなつて…気づいてたの？」

僕「なんとなく想像してた。」

はじめて桜内さんとあつた日のことを考えたら想像できたわw
そんな会話をしながらダイビングショップに向かう。

—。

ダイビングショップに到着するともう既に果南がある程度の準備をしてくれていた。

千歌「果南ちゃん！」

果南「いらつしやい！ある程度の準備は出来てるから千歌たちも着替えたり準備してきてね！」

果南にそう言われ、それぞれ着替えとかの準備をする。準備が終わったら千歌と曜、僕は準備運動をする。その間、果南と桜内さんは何か会話をしていた。

準備を済ませると、果南が船でポイントまで連れていってくれた。ポイントに到着し、ダイビングを開始する。やっぱり内浦の海は最高だな。おっと、海の音に神経を研ぎ澄ませねば。

……

……

……

ダメだ、1度上がるか。

曜「ダメ？」

梨子「残念だけど……」

千歌「イメージか…確かにむずかしいよね。」

梨子「簡単じゃないわ。景色は真っ暗だし…」

曜「真っ暗？」

千歌「そっか、わかった。もう一回いい？」

そう言うと、千歌と曜はもう一度海に潜った。僕と桜内さんも遅れないように潜る。千歌と曜が桜内さんを案内するかのように先を泳ぐ。というか千歌と曜、泳ぐのちよつと速いって。僕は何とかついていけるけど桜内さんはちよつと遅れてしまっていた。それに気づいた僕は桜内さんの方を向き『慌てなくても大丈夫。』とアイコンタクトを送る。伝わっているといいんだけど…それを見た桜内さんは少し安心した表情をしていたので多分伝わったのだろう。

千歌と曜が泳ぐのを止める。どうやらポイントに到着したようだ。

見た所、さっきの所よりかは明るい。ここなら聞こえるかな…神経を研ぎ澄ませてみ

る。

……

……

…

ん？何か聞こえる…気がする…

これが…海の音…？

—。

梨子「…ふはあ！」

千歌「聞こえた!？」

梨子「うん！」

千歌「わたしも聞こえた気がする！」

曜「ホント！わたしも！」

僕「俺も！」

4人でその場で笑いあつた。ホント、海の音が聞こえてよかった。

後日――。

仕事のお昼休みにスマホを見ると、千歌からLINEが届いていた。どうやら桜内さんが作曲をしてくれるとのことだそうだ。ただ、まだ詞が出来ていないらしくこれから作るらしい…

――。

時と場所が変わり

その日の帰宅直後、僕の家にて…

僕「んで、なんでここで作詞することになったんだ…」

千歌「だって梨子ちゃんがしいたけが飛び付いて来るからって逃げちゃうんだもん。」

梨子「ちゃんと繋いでおいてくれればいいのに！」

千歌「だってこの辺だと放し飼いの人の方が多いし。」

梨子「そんなあ〜…」

要するに犬が苦手なのか。そういえば僕も最初は犬が苦手でしいたけを避けてたもんなあ。でもなんだかんだ、しいたけと接していたお陰で犬が苦手なの治ったんだっけ。

僕「なるほど、そういうことか。やるならそつちの部屋を使ってね。」

ようちか「ありがとー！」

梨子「あ、ありがとうございます！」

そんな流れで3人は部屋に入る。あ、僕の住まいは部屋が2つあって1つはリビング兼寝室でもう1つは特に何かの部屋とは決めておらずテーブルやマンガとかが置いてある程度である。そのうち物置に変わりそうだけどW千歌たちには後者の方の部屋を貸した。

さてと、ジュースぐらいいは出そうかな。冷蔵庫からみかんジュースを出して3人分コップに注ぐ。すると桜内さんが部屋から出てきた。

梨子「あの、本当にすみません！わたしのせいで家に突然お邪魔することになってしまつて…」

僕「いや、気にしないで。実は僕も幼い頃は犬が苦手だったのです。」

梨子「えっ、そうだったんですか？」

僕「うん、しいたけのお陰でいつの間にか治ってたけどね。あと、これよかったらどうぞ。」

そう言ってみかんジュースを渡す。

梨子「すみません！飲み物まで頂いちやって…」

僕「いいんですよ。みんな頑張ってるんですし。ところで、作詞ってどのぐらい掛かりそうです？」

梨子「人によりますが…大体3、4時間ぐらいかしら…」

僕「そつか…わかりました…」

うーん…こりや、書けるまでやってそうだな…

クイ

ん…？

梨子「あの…もしかしてマズイですか…」

あ…俺、ひよつとしてそんなに微妙な顔してた？うっ…そんな上目遣いで見ないで欲しい…あと服をちよこつと引つ張らないで…断る気は無いけど断れないから。

僕「ううん、大丈夫。がんばってね。」

梨子「ありがとうございます♪」

桜内さんはお礼を言うと言いつつ飲み物を持って笑顔で部屋に戻っていった。

さてと、晩ご飯でも作ろうか。一応千歌たちも食べられるように多目に作っとくか。カレーとかがいいかな？激辛…いや、中辛にしておこう。カレーならもし3人が食べなくてもしばらくは保存できるしね。

く千歌 Sideく

祥くんは部屋を借りて作詞を開始したもののなかなか進まない…

梨子「やっぱり恋の歌は無理なんじゃない？」

千歌「いやだ！μ sのスノハレみたいなのを作るの！」

梨子「そうは言っても恋愛経験ないんでしょ？」

千歌「なんで決めつけるの!？」

梨子「…あるの？」

千歌「うう…／／／」

恋愛経験はないけど好きな人はいるんだよね…／／／

千歌「…祥くん…／／／」

梨子「やっぱり。」

千歌「なんでわかったの!？」

梨子「なんとなくね。」

千歌「うう／＼／／」

小さい頃、初めて会ったときも優しくしてくれたし、勉強もあまり得意じゃないのに真剣に見てくれたし。突然いなくなっちゃったけど帰ってきてちゃんと謝ってくれて、内浦にいない間もちゃんと私たちの事を気にしてくれて…ん、私たち…？

梨子「もしかして、渡辺さんもの…？」

曜「えーっと…：そうでありまして…あはは…／／／」

やっぱり曜ちゃんもそうだったんだあ……まあ、祥くんだもん。仕方ないね……

曜「そういう梨子ちゃんはどのなの？」

梨子「えっ……！あっ……！その……／／／」

千歌「私たちが言ったんだから教えてよ。」

梨子「……時雨……さん……／／／」

ようちか「えっ……？」

嘘……！梨子ちゃんも祥くんのが好きなの!?

梨子「い、いや、あのね！な、なんとというかね！わたし、あまり男の人と関わることなくてね！その！あの人優しいし一緒にいると安心出来るというか！ああ〜！／／／」

コンコン!

突然ドアがノックされた。こんなタイミングで〜!

祥一「千歌、曜、桜内さん、ご飯食べてくか?カレーで良ければ出せるけど?」

3人「食べる(ます)！」

祥一「OK!もう少しで出来上がるから待っててね〜!」

祥一「くんの手料理、初めて食べるけどきつとおいしいんだろなあ…」

祥一 Side

さて、ご飯も炊けたしカレーもあと少しで出来上がるぞ。そういえば自分で作った料理を自分以外の人間が食べるのって初めてだわ。おいしいって言ってくれればいいけど…まあカレーなら水の量を間違えたり下手にアレンジしなきゃ大丈夫だろう。そう

こうしてるうちにカレーが出来上がった。盛り付けて完成だ。

僕「へい、おまたせ。うまく出来てるかな？」

ようちか「ありがとー！」

梨子「ありがとございます！」

僕「じゃあ、食べようか。」

全員「いただきます！」

うん、いつも通りに出来てるね。うまい。問題は、千歌たちがどんな反応をしてるかだ。

千歌「おいしい！」

曜「祥くん、おいしいよ！」

梨子「おいしいです！」

僕「そっか、よかった。」

失敗してなくてよかった。市販のルーを使ってるからだろうけど。

僕「ところで、詞は出来た？」

千歌「それが、まだ……」

僕「どんな詞を書こうとしてるんだ？」

千歌「恋の歌……」

僕「なるほど。」

千歌「やっぱりそういう経験ないと書けないのかなあ…」

僕「うーん、どうだろ？」

千歌「祥くんって本当にそういう経験ないの？」

僕「うん、ないよ。この前、曜の家でも話したじゃん。」

千歌「そつかあ…向こうで好きな人すらいなかったの？」

僕「うん、残念ながらね。」

曜「じゃあさ、向こうに引越す前は好きな人いたの？」

僕「ん？いたと言っちゃいたよ。」

千歌「経験あるんじゃない！同じクラスの子？」

僕「いや、違うよ。そもそも多分あれは恋とは違うと思う。」

曜「ふーん。じゃあ誰だったの？」

えつ、聞く？それ聞いちゃう？

僕「言わなきゃダメ…？」

3人「ダメ！」

マジかよ…しかも桜内さんまで…もう腹くくるか。

僕「…千歌と曜。2人だよ…」

3人「えつ…」

ほら、空気が凍った。だからあまり言いたくなかったんだよ！

僕「だって周りの女子に全然魅力感じなかつたんだもん。それに比べて千歌と曜はい子だし懐いてくれてたし。本当、かわいい妹みたいなものだったよ。」

曜「あー、そういう…」

千歌「はあ…」

梨子「なーんだ…」

僕「期待外れの回答で悪うござんしたね！そういう3人はどうなんだよ。」

千歌「経験は…ないけど…好きな人ぐらいいはいるよ…／／／」

曜「わたしも…／／／」

梨子「わたしもいます…／／／」

僕「お？だったらその男のこと書けば？」

千歌「無理だよ。その人、暴走族みたいな人だからアイドルっぽい曲にはならないよ〜！」

僕「暴走族なのかよ！w」

曜「わたしは夜な夜なその辺で暴走してそんな人であります！」

僕「曜もかよ！w」

梨子「わたしは…年上で優しい人です…／／／」

僕「桜内さんはマトモそうな人だけど…千歌と曜は随分やんちゃな人だね…（苦笑）」

ん？なんか3人からすごい目で見られてるんですけど……気のせいだよ？ねえ？
視線が痛いから話題を変えないと（・ω・、；）

僕「そ、そういうばば、sのスノハレが出たときってメンバーの誰かが恋してたのか
な……？」

千歌「うーん、ちょっと調べてみる！あ、カレーおかわり！」

曜「わたしも！」

梨子「もう〜！調べるのは食べ終わってから！」

僕「あいよ。」

ご飯とカレー、多めに作つてよかった。

4人で食事をすませ、千歌と曜は作詞、桜内さんと僕は後片付けをしていた。

僕「ありがとう、手伝ってくれるのは嬉しいんですが作詞の方にまわらなくていいんですか？」

梨子「ええ、部屋を借りた上にご飯までご馳走になっちゃったし……」

僕「そんな、気にしなくてもいいのに。」

梨子「あの……どうしてここまでしてくれるんですか？」

僕「？」

梨子「海の音を聞きに行くのにも付き合ってくれたし、今日だって部屋を貸してくれ
た上にご飯まで御馳走してくれたし……」

僕「うーん、なんていったかいいか難しいな…簡単に言っちゃうとなぜか放っておけなくて、なにかしてあげたくなくなるって所かな？」

梨子「ふふっ、高海さんもただあなたも変な人ね。でもそう思っていてくれてありがとう。」

僕「ええっ!？」

確かに時々自分に変なやつだと思ったことがあるけどこうもハッキリ言われると地味に傷付くわ…

その後しばらく作詞を続けた結果、完成はしたらしい。どうやらスクールアイドルへの想いを綴った詞を書いたようだ。詞が出来たところで解散することになった。千歌と桜内さんは歩いてすぐの所が家なので歩いて帰るって言ってたけど、曜はバスが終わった時間だったので僕が送っていくことにした。

千歌「祥くん、曜ちゃんのことお願いね。」

僕「おう。曜、行こうか。じゃあ千歌と桜内さん、おやすみなさい。」

曜「おやすみ〜。」

千歌「おやすみ〜！」

梨子「おやすみなさい。」

曜と僕は車に乗り込む。シートベルトを掛けて、車を出発させる。しばらく車を走らせると、曜が話しかけてきた。

曜「ねえ祥くん。聞いていい？」

僕「ん？うん？」

曜「あの…祥くんって……………」

僕「う、うん？」

なんか随分言いにくそうだけどどうしたんだ？

曜「……暴走族なの？」

僕「えっ？ええっ!？」

なんでやねん！

曜「あ、いや、だって？祥くんの車、見た目厳ついし音もうるさいし…」

僕「曜。あのな、それだけで暴走族扱いするのはやめてくれ…確かにこういう系の車は暴走族にも好まれるけどそうでない人にも好まれるんだよ。」

曜「ふーん、そっか。よかった。祥くんつてもしかしてグレちゃったのかと思った。」

僕「グレてたら今頃一緒にいないでその辺で暴走してるよ。」

曜「あはは、だよね。」

僕つて暴走族つて思われてたの？何だかちよつと悲しくなってきたよ…それよりも千歌と曜、暴走族に惚れるのはいいけど2人まで暴走族にならないでくれよ。と内心そう思いながら曜と会話してた。そういう会話をしているうちに曜の家に着いた。

僕「曜、着いたよ。」

曜「ありがとう。」

僕「じゃ、おやすみ。ライブの日とか決まったら教えてな！」

曜「おやすみヨーソロー！（*）> ? ・*（）ゞ」

さて、曜を送ったことだし帰りますかね。

く千歌 Sideく（解散直後）

祥一「おう。曜、行こうか。じゃあ千歌と桜内さん、おやすみなさい。」

曜「おやすみく。」

千歌「おやすみく！」

梨子「おやすみなさい。」

祥くと曜ちゃんが車に乗り込むと車のエンジンがかかる。

キューキューッキュッキュツ！

ブオオオオン！！

ボボボボボボボ！！

ブオン！ブオン！

ブオオオオオオオオオ！！

かなりの重低音を奏でながら祥くんの車は走り去っていく。

千歌「ね、ちよつと暴走族みたいでしょ？」

梨子「あ、あはは…（苦笑）」

祥一は千歌と梨子がそんな会話をしているとは知る由もなかった。

。

く祥一 Side く

曜の送迎から帰宅し、そろそろ寝ようかと思っていたところで千歌からL O N E が届く。どうやら桜内さんがスクールアイドルに加入するようだ。

僕「よかったな、千歌。」

そのメッセージを見た瞬間、思わずそう呟いた。

ライブの宣伝

夕方、仕事から帰ると千歌たちが砂浜で練習しているのが見えた。輝こうと必死に頑張っている。飲み物でも差し入れようか。

飲み物を買って千歌たちのもとに向かうと千歌たちが僕に気づいてくれたようだ。

3人「おーい！」

手を降ってくれたのでこっちも手を振って向かう。

僕「よっ！がんばってるね！」

千歌「うん！」

曜「ヨーソーロー！」

梨子「こんにちは！」

僕「ほら、ちゃんと水分取れよ？」

そう言つて僕は飲み物を渡す。

3人「ありがとうございます（ございます）！」

3人は飲み物を受け取ると早速蓋を開け、飲み始める。

僕「どう？ 順調？」

曜「まあ順調だけど確認してくれる人がいないから今この時にここがどうかすぐにわからないから大変かな。」

僕「そうか。僕でよければ見てようか？」

曜 「いいの？ありがとう！」

僕 「うん、とりあえずさっきまでの動画も見てみたいかな。」

曜 「わかった。ちよつと待って。」

曜はスマホを操作して動画を再生してくれた。

千歌 「どう？」

梨子 「だいぶよくなってきている気がするけど？」

曜 「でも、ここの蹴りあげがみんな弱いのと、ここの動きも。」

千歌 「うわあ、ホントだ〜！」

梨子 「流石ね〜、すぐ気づくなんて。」

曜 「高飛び込みやってたからフォームの確認は得意なんだ！リズムは？」

梨子 「大体いいけど、千歌ちゃんが少し遅れてるわ。」

千歌 「わたしかく！あつ？」

僕 「ん？」

ふと空を見上げるとヘリコプターが近くを飛んでいた。

梨子 「何？あれ？」

曜 「小原家のヘリだね。」

梨子 「小原家？」

曜「淡島にあるホテル経営してて、新しい理事長もその人らしいよ。」

梨子「へえ〜。」

へりを眺めているとこちらに向かってきてるように見える。
いや、近づいてきてね!?

千歌「なんか、近づいてない…?」

梨子「気のせいよ〜。」

曜「でも…!」

僕「…!近づいてる…!」

近づいてきてると思ったへりが僕たちの頭上を通過して行った。

4人「うわあ！」

千歌「なになに!?!」

へりがホバリングすると、ドアが開いた。

○○「チャオ♡」

僕「な、なんだあ！」

鞠莉「わたしは浦の星の新理事長の小原鞠莉、気軽にマリーって呼んでほしいの♡」

僕「し、しんりじちよお!?!」

鞠莉「イエース！新理事長よ！3人のスクールアイドルと、あなたは誰かしら？」

僕「僕は時雨 祥一。千歌と曜の幼馴染みです。で、新理事長さん」

鞠莉「ノンノン、『マリー』よ！祥一！」

僕「…で、そのマリーがどんな用事なんだ？（ジトー）」

鞠莉「ちかちかたちに話がありマース！今度、理事長室に来てね〜！」

そう言つてマリーはヘリでその場を去つてしまった。

僕「……………な、なんだつたんだ…」

なんつーか、インパクトが強すぎてどうコメントすればいいのかわからん…というかあのマリーつて人、千歌たちの知り合いなのかな…？

僕「千歌、曜、桜内さん？さつきマリーが理事長室に来て言つてたけどなにか心当たりある？」

千歌「いや、ないけど？」

曜「わたしも。」

梨子「……………（ツーン）」

桜内さんだけ反応がない。というかそっぽ向かれたんだけど…僕、なにか悪いことしたのかな…？

僕「あの…桜内さん…？」

梨子「……………（プーイ）」

ガン無視されてる。いや、本当に僕なにしたんだろ？

僕「曜？俺、なにか桜内さんに悪いことしてた…？（ヒソヒソ）」

曜「さあ？知らなーい。(プーイ)」

曜にまでそっぽを向かれてしまった。ひどくね…？

それよりもおれ、何した!?!桜内さんに何した!?!考える……

……

……

……

うーん、思いつかない…ガチで桜内さんになにかんにかんにかんにさわることにしたかな…ずっと

そっぽ向いたままだし(・|・)

ダレ、ガダズゲデエ、く!

僕「千歌あゝ(ヒソヒソ)」(半泣き)

千歌「なんかすごい情けない顔してるよ…(ヒソヒソ)」

おっしゃる通りでございます、はい。

千歌「はあく、しょうがないなあ。じゃあヒントをあげる。祥くんは梨子ちゃんのことなんて呼んでる？（ヒソヒソ）」

僕「えっと…桜内さん（ヒソヒソ）」

千歌「じゃあ、わたしと曜ちゃんはいいとして、さつき鞠莉さんのことはなんて呼んだ？（ヒソヒソ）」

僕「マリー…あっ？（ヒソヒソ）」

千歌「ようやくわかった？（ヒソヒソ）」

僕「うん、ありがとう（ヒソヒソ）」

やっとわかった。そういう事だったのか。気付かなくてゴメンね！

僕「…梨子ちゃん？」

梨子「…聴こえなかったからもう一回…。」

いやいや、反応してたじゃん…

僕「梨子ちゃん。」

梨子「うふふ♪なーに？祥くん。」

(…；；；口。)…グハツ!!

幼馴染み以外の女の子にその呼ばれ方をされるのは破壊力がヤバい。しかも梨子ちゃんみたいなかわいい子に呼ばれたのでドキツとしてしまった。俺は乙女かつ!!

(。ヾ。)ハツ!

ヤバい。千歌と曜がすごいジト目でこっちを見ている。いかんいかん。平常心平常心…! 本題を聞かなくては!

僕「梨子ちゃんは理事長に関しては何か心当たりある?」

梨子「うーん…わたしもないわ…」

僕「そつか…なんだったんだろ…？」

結局、新理事長マリーの目的はわからずじまいか…

。。

仕事の休憩時間にスマホを確認すると、千歌からLINEが届いていた。どうやら新理事長のマリーはライブで体育館を満員にしたら人数に関係なく部として認めてくれるとのことだった。ただし、満員にできなかつたら解散してもらおうと言われたようだ。そこでお願いしたいことがあると言われ、仕事がおわつたら千歌の家に行くことになった。

僕「こんにちはー！」

志満 「あら祥くん、いらっしやい。」

僕 「志満さん、千歌は？」

志満 「部屋にいるわよ？どうぞ上がって。」

僕 「ありがとうございます。」

志満さんが家へ上げてくれたので僕は千歌の部屋に向かい、部屋のドアをノックする。

コンコン

僕 「千歌？いるかー？」

ガラガラ

部屋のドアを開けた千歌なんかすごい顔をしていた。それよりも額に書かれた『バカチカ』という文字が目がいってしまった。

僕「ブツ！千歌wその顔どうしたw」

千歌「あー！祥くん笑った！ひどい！」

僕「ははは！ごめんごめん！で、その『バカチカ』は美渡さんにやられたのか？」

千歌「むー！おかしい…！完璧な作戦のはずだったのに！」

話を聞くと、どうやら美渡さんに会社の人全員をライブに呼んでほしいと頼んだらしい。体育館を満員にしたいのは分かんなくてもないがさすがに全員つてのは…

曜「お姉さんの気持ちも、わかるけどねー。」

千歌「ええ!?曜ちゃんお姉ちゃん派!?!:あれ?梨子ちゃんは?」

曜「お手洗いくって言ってたけど?」

千歌がふすまを開けると何とそこにはブリッジ状態の梨子ちゃんとその下にはしいたけが寝ていた。

千歌「あれ？何やってるの？」

僕「ふっ…あははははは！」

曜「それより、どうやって人を集めるかだよ。」

千歌は曜との会話を進め、僕はブリッジ状態の梨子ちゃんを見て爆笑してる状態になる。いくらガキの頃は犬が苦手だった僕でもそのブリッジはやらなかったぞwww

梨子「祥くん！笑ってないで助けて！」

僕「はははははははは！おい、しいたけえく起きろお。上に梨子ちゃんがいるぞお〜？」

おもしろいのでブリッジ状態の梨子の下で眠っているしいたけをゆすつて起こそう
としてみる。

梨子「やめてええええええええええ！」

梨子ちゃんは必死に叫んでる。こりやしいたけが起きたらどんな反応をするか見た
くなつてくるネ☆

僕「ああ、起きないかあ。残念！」

梨子「『残念！』じゃない！」

さて、そろそろ梨子ちゃんの腕も震えだしてきてかわいそうだから助けようかな！
そう思っていた矢先に梨子ちゃんが体制を崩して落下した。やばい！このまま梨子
ちゃんが落下したら怪我するかもだし、しいたけも下敷きになっちゃまう！

僕「うおっと！あぶね！」

なんとか間に合つて、梨子ちゃんが落下するのは免れた。さて、ここからどうしようか。僕はいま、落下しそうになつた梨子ちゃんをとつきに抱えている状態である。その光景は僕が梨子ちゃんをお姫様抱っこしているように見えなくはない。ただ、本来のお姫様抱っこなら梨子ちゃんは上を向いているはずだがあの状況だったので下を向いている。とりあえずまずはしいたけから離れよう。

：

よし、しいたけからは離れたぞ。ホツとしていたら：

梨子「あの…祥…くん…？助けてくれてありがとう…／／／そろそろ下ろしてほしいんだけど…／／／」

ふと自分の手を見ると、なんと右手が梨子ちゃんの胸に触れていた。

僕「あつ！ゴメン！」

梨子ちゃんを下ろそうとしたところで不幸にもこの光景を千歌と曜に見られてしまった。

千歌「あー！祥くんなにしてるの！」

僕「い、いや、これはな？梨子ちゃんがあブリッジ状態から落下しそうになってたからとつさに救助したんだよ！」

曜「ふーん。で？祥くんの手は梨子ちゃんのどこを触ってるのかなあ？」

ヤバイ…曜の目が怖い…これはマジで怒ってる時の目だ…

僕「こ、これは事故だ！とつさに救助した故の事故だ！」

千歌「とりあえず、いつまでそうしてるつもりなの？早く下ろしなよ。」

僕「は、はい。」

千歌に梨子ちゃんを下ろすように言われ、梨子ちゃんを僕の腕から下ろす。というか千歌も相当目が怖い…マジなやつだこれ…梨子ちゃんは梨子ちゃんですごい恥ずかしそうに俯いてるし。

ようちか「何か言うことは？」

千歌と曜に迫られる。というか、2人ともめつちや怖いんですけど！

僕「あ、えつと…ゴメン…梨子ちゃん…」

…：反応がない。というか梨子ちゃん、ずっと俯いたままなんですけど——

！

バシーン！！

はい、千歌と曜から制裁のビンタを喰らいました。今なら蝶○さんから毎年ビンタを

喰らっている方〇さんの気持ちがちよつとだけ分かる気がします。

ジコトハイエリコチャンノオツパイヲサワツチャツタ事件からしばらく経ち、本来の用事を聞くことを忘れていたので聞いてみた。

僕「千歌？　そういえばお願いしたいことってなに？」

千歌「あ、そうそう。祥くんの会社って何人ぐらい居る？」

僕「うーん……うちの会社はそんなに大きくないから人数は少ないよ？　たしか50人前後だったかな？」

千歌「そつか！　でねでね？　その50人なんだけど、ライブに呼べないかな……？」

僕「50人全員は厳しいんじゃない？　それぞれ個人の都合もあるし。」

千歌「そんなあ。せめて何人かでもいいから呼べない？」

僕「うーん……」

呼んでも来てくれるかなあ……実をいうと知らない顔の方が多いし……

千歌「ねえ、祥くん？おねがぁ……」

千歌が上目遣いで僕を見てお願いしてくる。

はい、堕ちました。千歌、その頼み方はずるいよ……

僕「わ……わかったよ……／＼／＼とりあえず会社で宣伝ぐらいはしてみる。」

千歌「ホント？ありがとー！」

千歌が飛び付いてきたので受け止める。その頼み方をされて引き受けると飛び付い

てくるのは昔と変わらなくてちよつと懐かしいなあ。

僕「ははは。そういう所、昔から変わってないなあ。とりあえずやれるだけやってみるよ。」

千歌「うん！」

次の日――。

千歌たちのライブの宣伝を会社でしようと思ったものかどうか？チラシを勝手に掲示板に貼るわけにはいかないし：総務にいる同期のあいつに聞いてみるか。

僕「ローイ、ちよつと相談なんだけどいい？」

〇〇「おう、しぐにやんどした？」

僕「実はな…」

彼は同期で総務課に配属になった室井 直人。あだ名は室井からとって「ローイ」である。歳は同じ年だけど何かと頼りになる存在だ。

ちなみに僕のあだ名は「しぐにゃん」、正直恥ずかしいからやめて欲しいw

それはさておき僕はローイに千歌たちのライブの宣伝について事情を説明した。すると前向きに協力してくれる意思をみせてくれた。

ローイ「なるほど。そういう事なら俺も協力する。チラシのことも上司に相談してみるよ。しぐにゃんも1度上司に部署の掲示板使って宣伝していいか聞いてみたら？」

僕「ありがとう！助かるよ！こっちも上司に相談してみる！」

ローイ「おう！」

ローイのアドバイス通り僕も上司に相談してみた結果、あっさりとOKが出たので部署内の掲示板にチラシを貼って宣伝にすることが出来た。それどころか上司が掲示板

付近に小さい机を置いてくれ、ここに余ったチラシを置いてtake freeにして
おいたらと言ってくれた。

それに関しては本当にうれしかったけどあのバカチカ：チラシを大量によこしすぎ
だ：しようがない、ダメ元で帰りにあそこにも行ってみるか：

—。

仕事帰りに寄ったのはとある自動車整備工場。この工場は親父のマブダチが経営し
ている。自動車整備の他にも改造も請け負っており、デモカーも数台所有している。

ここに来るのは数年ぶり。そう、まだ家族で内浦に住んでいた頃に親父が車の点検に
行く時について行った以来である。あの時から店のオーナーが変わってなければい
んどだけど：

僕「ごめんくださいー！」

〇〇「はい。いらっしやいま…あれ？ハルのところの坊主か？」

僕「コウさん、久しぶり！」

この人は親父のマブダチ兼この店のオーナーの萩谷 宏一さん。親父が「コウ」って呼んでいたから僕は「コウさん」と呼んでいる。

コウさんが言っている「ハル」というのは僕の親父「時雨 春樹」のことである。

コウ「しぐ坊、大きくなったな！ハルと優海ちゃんは元気か？」

僕「うん、相変わらずだよ。」

コウ「そうかそうか。お、そのBRZはしぐ坊のか？」

僕「うん、親父と母さんから借金して買ったんだ。」

コウ「そうか！スバル好きなしぐ坊らしい選択だな！ところで、車になにかあったのか？」

僕「いや、車じゃなくて今日は…」

千歌たちのライブの宣伝をここで出来ないか相談してみる。

コウ「浦の星女学院でスクールアイドルのライブやるのか。わかった、うちでも宣伝しておく！チラシを入口に貼っておくのと…あとは何枚か置いていけよ。お客さんにも配つとくから。」

僕「ありがとう！」

コウ「いいって。そのかわり、クルマになんかあつた時は鼻屑にしてくれよ♪」

僕「うん！」

さて、あとは会社の人とお店のお客さんがどれぐらい来てくれるかな…1人でも多くのお客さんが来てくれることを祈ろう。

初ライブ

コウさんの店にチラシを置いて帰宅中に今日も浜辺で練習をしていると曜から連絡があつたので向かつてみる。

僕「…グループ名が決まって無かつたのか…」

梨子「まさか決めてないなんて！」

千歌「梨子ちゃんだつて忘れてたくせに！」

曜「とにかく、早く決めなきゃ！」

千歌「そうだよね…どうせなら学校の名前が入ってるほうがいいよね？」
『浦の星ス
クールガールズ』とか？」

梨子「まんまじゃない！」

千歌「じゃあ、梨子ちゃん決めてよ。」

梨子「えっ！」

曜「そうだね！ほら、東京で最先端の言葉とか！」

千歌「うん！そーだよ！そーだよ！」

僕「あんまりプレッシャーかけるのやめてあげて…？」

梨子「え、ええつと…じゃあ、3人海で知り合ったから『スリーマーメイド』とか…」

ようちか「1、2、3、4、5、6、7、8」

梨子「まって！今のなし！」

千歌と曜…せめてなにか言っ
てあげてくれ…

千歌「曜ちゃんはなにかない？」

曜「うーん、『制服少女隊！』
どう？」

千歌「ないかな。」

梨子「そうね。」

曜「ええー!？」

曜の趣味丸出しじゃねーか…

千歌「祥くんはなにかいい名前
思いついた？」

僕「僕？うーん…『Preiades』…？」

千歌「ふれあです…？」

僕「プレアデス星団、和名だと『六連星』や『昴』って言うんだ。」

曜「それ、祥くんの車のメーカーじゃん…（ジトー）」

ちかりこ「…（ジトー）」

そんな目で見ないで…豆腐メンタルだから俺泣いちゃうよw

それから色々考えたけどいい名前が思いつかない…それと千歌よ「みかん」って…
自分の好きな食べ物じゃんかよ。

梨子「はあ…こういうのはやっぱり言い出しつぺが付けるべきよね。」

曜「さんせーい！」

僕「がんばれ、千歌…」

千歌「戻ってきた〜！」

梨子「じゃあ『制服少女隊』や『プレアデス星団』でいいって言うの？」

千歌「『スリーマーメイド』よりはいいかな？」

梨子「それはなしって言ったでしょ！」

千歌「だつてえ、ん？」

ふと砂浜を見ると明らかにここにいるメンバーが書いてない文字が書かれていた。

千歌「これ、なんて読むの？A、q、ours…？」

梨子「『アキュア』？」

曜「もしかして『アクア』？」

梨子「水つてこと？」

僕「スペルを見ると造語みたいだね。」

4人「おお……」

千歌「『水』かあ。なんか良くない？グループ名に！」

梨子「これを？誰が書いたのかを分からないのには？」

千歌「だからいいんだよ！名前決めようとしている時にこの名前に出会った。それですごく大切なんじゃないかな？」

曜「そうかもね！」

梨子「このままじゃいつまでも決まりそうにないし！」

千歌「じゃあ決定ね！この出会いに感謝して、今から私たちは！」

こうしてグループ名が『A q o u r s』に決まった。それにしても『A q o u r s』ってどっかで聞いたことがあるような…

後日——。

町内放送で千歌たち、A q o u r sのライブ告知が流れてきた。

3人「浦の星女学院スクールアイドル、A q o u r sです！」

梨子「待って！でもまだ学校から正式な承認もらってないんじゃない!?」

千歌「あく！じゃあ、えっと…浦の星女学院非公認アイドル、Aqoursです！今度の土曜14:00から浦の星女学院体育館にてライブを…」

梨子「非公認っていうのはちよつと…」

千歌「じゃあなんて言えばいいのー!!」

おいおい、大丈夫かよ…？3人で事前に話す内容考えなかったのか…？

ライブ前日——。

志満さんから代わりに曜を家まで送ってほしいとの連絡が入った。でもまだまだ打ち合わせが続きそうとのことだったので差し入れに寿太郎みかんのジュース(1L)1本持っていくか。

……

……

……

志満 「ゴメンね祥くん。私も美渡もちよっと忙しくて手が離せないの。」

僕 「気にしないで！大事な幼馴染みの為だし、これぐらいはね！」

志満 「あらあら、よろしくね。」

僕 「それと3人への差し入れ持ってきたんだけど、どうすればいい？」

志満 「あら、ありがとう。千歌ちゃんの部屋に持って行ってあげて。喜ぶと思うわ。」

僕 「わかった。」

千歌の部屋の前に行くと美渡さんが千歌の部屋を覗いていた。

僕 「あれ？美渡s（ry）」

美渡「シート！見てごらん？」

僕「？」

流石に女の子の部屋を覗くのはどうかと思ったけど美渡さんに促されて覗いてみた。

梨子「いいとおもうんだけど……？」

曜「じゃあここで私がこっちに回り込んでサビに入る？」

梨子「間に合う？千歌ちゃん？どう思う？」

千歌「すう……すう……」

疲れたのか千歌は机に伏せて眠っていた。

梨子「今日はそろそろおしまいね？」

曜「うん。」

美渡さんはこのタイミングでそつとドアを閉め、僕と美渡さんはリビングまで歩き始める。

僕「がんばってるな…」

美渡「でしょ？」

僕「人、集まってくれるかな…」

美渡「大丈夫でしょ！だって祥くんも会社や車屋で宣伝したんだろ？」

僕「うん…ってなんで知ってるんだ!？」

美渡「会社の方は千歌から聞いてたけど、車屋の方は私の会社の人がいっつもお世話に

なってるから聞いたんだよ。車屋だから多分祥くんだと思った。そのオーナーさん、ライブ当日は店閉めて従業員みんなでライブに行くって言ったらしいよ！」

僕「そつか…コウさん、そこまでしてくれるんだ…」

美渡「それと、千歌たちの前であまり不安そうな顔するなよ？」

僕「う、うん…」

本人達でも無いのに何故か不安になってしまっ自分があるそこにはいた。

美渡「ほらしつかりしろ！祥兄ちゃん！」（バシーン！）

そう言つて美渡さんは僕の背中を叩く。

僕「つつ！美渡ねえ、なにすんだよ。」

美渡「はっはっは！反応が昔と一緒だなく！」

美渡さん、笑い事じゃないよ…マジで痛いんだからよ…

そんなやり取りをしていたら曜と梨子ちゃんがリビングにやってきた。

曜「あれ？祥くん？どうしたの？」

僕「もうバス終わってるし志満さんも美渡さんも忙しいみたいだから代わりに曜を家まで送ってほしいって頼まれたんだ。」

曜「えっ…？あっー！終バス終わってる！」

僕「というか美渡さん、僕とここで話してて大丈夫なのか？」

美渡「あーっ！しまった！アレやらなきやいけないの忘れてた！」

美渡さんはあわてて奥に入って行った。

……

……

……

車で曜を送ってる道中、曜は親に電話をしていた。

曜「うん、うん。」（ピツ）

僕「大丈夫だったか？」

曜「うん、いい加減にしなさいっておこられちゃったけど。」

僕「ホント、夢中だよな。千歌がここまでのめり込むなんて思わなかったわ。」

曜「そう？」

僕「昔の記憶だけど、千歌って飽きっぽいところあったじゃん？」

曜「飽きつぽいんじゃないやなくて中途半端が嫌いなんだよ。やる時はちゃんとやらないと気が済まないというか。」

僕「そっか、さすが曜だな。」

曜「えへへっ。」

僕「それで、ライブはうまくいきそう？」

曜「うん、いくといいけど…。」

僕は不安そうに俯いてしまった。

僕「満員か…。」

曜「人、少ないからね、ここら辺。」

僕「大丈夫だと思うよ？みんな暖かいから。」

ライブ当日——。

僕はローイと合流するために沼津駅にいる。

ローイ「おっす！しぐにゃん！」

僕「おっす！ローイ！今日は来てくれてありがとうな！」

ローイ「いいっていいって！なんだってしぐにゃんの幼馴染みを見てみたいわけだし！」

僕「見て驚けよ！めっちゃかわいいからな！」

ローイ「言ったな!?期待してるぞ！w」

……

……

……

開場時間の10分前に浦の星女学院の体育館に到着した。

僕「一応入れたけど、まだ人はそれほど入ってないな……」

ローイ「ま、これからだろ？もう少ししたら集まるんじゃないか？」

僕「そうだな……」

ダイヤ「？あれっ？祥一さん!？」

僕「ダイヤちゃん!?!?そういえばダイヤちゃんこの生徒だっけ?」

ダイヤ「そうですね。それに、私は浦の星女学院の生徒会長ですわ。」

僕「生徒会長だったのか。」

ダイヤ「それより祥一さん、なんでここにいらつしやいますの？」

僕「なんでって、ライブを見に来たんだよ。」

ダイヤ「そうでしたか。」

ローイ「あのー、お二人さんはお知りあいなんですか…？」

僕「あ、ああ。この子は黒澤ダイヤちゃん。母さんの友達の娘で小さい頃に何度か会ってたんだ。」

ダイヤ「はじめまして。浦の星女学院3年、黒澤ダイヤと申します。」

ローイ「はじめまして、室井直人です。時雨くんの会社の同期です。」

ダイヤ「それで、祥一さんはどこでライブがあるって知りましたの？」

僕「どこでっていうか、A q o u r sのメンバーの千歌と曜は幼馴染みだからな。」

ダイヤ「そうでしたか。」

そうこう話しているうちにライブがスタートした。

お客さんは：数え切れるぐらいしかない。世の中そんなに甘くはないといえどあんなに頑張っていたのにこれだけの人数しか集まらなかったのか。神様ってのは残酷なやつだ。

それでもA q o u r sは現実を受け入れ、ライブをスタートさせた。

千歌「私たちは！スクールアイドル、セーの！」

ようちかりこ「A q o u r sです！」

梨子「私たちはその輝きと」

曜「諦めない気持ちと」

千歌「信じる力に憧れ、スクールアイドルを始めました！」

千歌「目標はスクールアイドル、μ'sです！聞いてください！」

A q o u r s の最初で最後のライブがスタートした。曲も歌詞も聞いてて元気が出てくる気がした。ダンスも短期間でここまで踊れるのは正直すごいと思った。ちゃんと笑顔も出せている。ただ、3人の笑顔は何となく違和感を感じた。やっぱり満員に出来なかったのが悔しいからだろうか。

曲がサビに入ろうとしたところで突然――。

バチンっ！

辺りが真っ暗になった。どうやら停電のようだ。原因は恐らく近くで落ちた雷だろう。まったく！神様ってやつはどこまで残酷なんだ！

ダイヤ「祥一さん！」

僕「ダイヤちゃん!?!」

ダイヤ「発電機を運び出すのを手伝ってください！」

僕「おう！分かった！」

ローイ「俺も手伝うぜ！」

僕「サンキュー！ローイ！」

ダイヤ「助かりますわ！」

僕とローイはダイヤちゃんに続いて倉庫に向かった。そこにある発電機2機を持ち出しダイヤちゃんが指定した場所まで運んだ。

ダイヤ「助かりましたわ！あとは私だけで大丈夫ですので早く3人のところに戻ってあげてください！」

僕「おう！」

ローイ「はい！」

僕とローイが会場に戻ったと同時に電気が復旧した。会場を見渡すとそこは満員になっていた。

美渡「バカチカー！あんた開始時間間違えたでしょ！」

美渡さんが体育館の入口からステージに向かって叫んでいた。

ローイ「な？もう少ししたら集まるって言った通りだろ？（へ——）」

僕「だな…よかった…」（ホロリ）

ローイ「…お前、なに泣いてるんだよ？」（ニヤニヤ）

僕「だって心配だったから…」

ローイ「ったく。ほら、しっかりしろ！あの子達に見られるぞ！」

僕「おう！」

千歌「ホントだ私、バカチカだ…」

お客さんが満員になり、電気が復旧したところでライブが再開される。さつきとはうってかわって観客の歓声も混ざっている。そして3人の笑顔もさつきと比べて格段にいい笑顔になっている。鼻屑かもしれないが魅力的だ。思わず見入ってしまった。こうして曲は無事に終わった。会場は拍手と歓声につつまれた。

曜「彼女たちは言いました。」

梨子「スクールアイドルはこれからも広がっていく！どこまでだつて行ける！どんな夢だつて叶えられると！」

ん？ダイヤちゃんがステージに向かって歩いてる？

ダイヤ「これは今までのスクールアイドルの努力と街の人たちの善意があつての成功

ですわ！勘違いしないように！」

確かにダイヤちゃんの言ってることは否定出来ない。でも人が見てるところでいうセリフじゃないだろ？

千歌「わかってます！」

ダイヤ「!？」

千歌「でも…でもただ見てるだけじゃ始まらないって！うまく言えないけど…今しかない瞬間だから…だから！」

ようちかりこ「輝きたい！」

会場は再び拍手につつまれた。

。

僕はLONEで千歌と曜、梨子ちゃんにライブの感想を送った。その後、ローイを沼津まで送って行った。その道中で：

ローイ「ライブ、よかったよ。なんと言うか：アイドルとかあんまり興味なかったけど聞くのに夢中になれたよ。」

僕「そっか、ありがとう。3人に伝えておくよ。多分喜ぶと思う。」

ローイ「ああ。それにしても、3人ともしぐにゃんの言った通りめっちゃかわいいな。」

僕「ホント、同じ人間なのかなって思っちゃうよw」

ローイ「それで、誰が一番好きなんだ？」（ニヤニヤ）

僕「えっ？」

ローイ「オレンジの娘か？それとも青の娘か？ピンクの娘か？」（ニヤニヤ）

僕「うーん…全員かな！」

ローイ「ズコー！」

僕「だってみんなかわいいじゃん。」

ローイ「はあく…こりやもうアレだな…」

僕「アレってなんだよ…」

ローイ「自分で考えろ。」

僕「ちえー…」

うーん…アレってホントになんなんだ…ただ、今は体育館が満員になったこととロー
イが楽しんでくれたことを素直に喜ぶとしよう。

初ライブ後

ローイ「んじゃ！3人によろしく伝えておいてくれ！」

僕「おう！今日はありがとな！」

沼津駅までローイを送り、さて帰ろうかなと思つたら電話が来た。今は一人で車に乗ってるし、ナビのハンズフリー機能を使って走りながら話してもいいか。

僕「もしもし？」

コウ「しぐ坊か？オレだ！」

僕「コウさん、話を聞いたけどライブに来てくれてたんだね！」

コウ「まあな！店閉めて従業員みんなで見に行つたぜ！w」

僕「そっか、ありがとう。」

コウ「ライブ、よかったぞ！楽しかった！」

僕「よかった…3人にも伝えておくよ。」

コウ「あー、それとここからが本題だけど…しぐ坊今何処にいる？」

僕「え？沼津駅の方だけ…？」

コウ「マジかよ！3人とも誰かのこと探してたぞ？多分しぐ坊の事なんじゃね？」

僕「えっ？」

コウ「なんか『祥くんそっちにいた？』的なこと話してるのを聴こえたから多分そう
だと思っぜ？」

僕「マジかよ!？」

コウ「分かったらさっさと電話してやれ!じゃな!」

返事をする暇もなく電話を切られた。それよりも千歌たちが探してるのか。やっべえ、早く電話しないと!

そう思っているうちに再び電話がかかって来た。

僕「もしもし?」

千歌「祥くん!もう!どこに行ったの!?!ずっと探してたのに!」

僕「マジか!ゴメンよ!沼津まで友達を送ってたんだ。」

千歌「それって祥くんとなりでライブを見てた人?」

僕「ああ、あのイケメンな。」

千歌「そっか…」

僕「…？どした？紹介しろって言ってもダメだぞ。アイツ彼女いるから。」

千歌「……………祥くんのバカ。」

僕「えっ？」

千歌「なんでもないよーだ！それよりも内浦に戻ったらうちに来てよ！」

僕「お、おう。わかった。」

千歌たち、ライブの後ずっと僕のことを探してたのか。悪いことしちゃったな。さて、十千万まで飛ばすか。

……………

…
…

僕 「飛ばしすぎた…w」

沼津から内浦までクルマを飛ばしたのはいいけど早く着きすぎたみたいだ。千歌たちはまだ十十万にはいないらしい。志満さんに事情を話したら上げてくれたので、現在は居間でお茶を飲んでる状態だ。

しばらくお茶を飲んでいると3人が帰ってきたようだ。

千歌 「ただいまー。」

ようりこ 「おじゃまします。」

僕 「あ、じゃましてるわー。」

千歌 「あー！祥くん！友達を送るなら一言言ってくれたっていいのに！」

曜「そうだよ！ずっと探してたんだから！」

梨子「いきなりいなくなっちゃうんだから、もう！」

3人にもものすごい勢いで迫まれて思わず反り返ってしまった。

僕「あはは…ゴメ…ン。」

3人の勢いに押され、苦笑い気味に謝ると千歌の表情が怒った顔から少し悲しそうな顔に変わった。

千歌「もう…勝手にいなくなっちゃ嫌なんだからね…」

千歌が目にも潤ませながらそう言った。

多分、7年前に僕が黙っていなくなつたせいかそれがトラウマになつてしまったのか
もしれない。

僕「ゴメンな…」

千歌の頭を撫でると落ち着いたらしく、いつもの表情に戻った。なおこの時、曜と梨子ちゃんが少し羨ましそうな顔をしていたような気がしたけど恐らく気のせいだと思う。

僕「あ、そうだ千歌？ここに僕を呼んだのってどうしたんだ？」

千歌「あのねあのね、もし良かったらただけだね…」

僕「う、うん…」

この流れ…7年前と同じだったら確か旅館の手伝いを頼まれる流れだったような…

千歌「この後うちでライブの打ち上げをやるんだけど祥くんも来てくれないかなって思っただけどどうかな…？」

・・・え？旅館の手伝いじゃない：w

この流れだと旅館の手伝いだと思つてたら予想外にもライブの打ち上げのお誘いだったので目がテンになりかけたのはここだけの話であるw

僕「マジか！よろこんで！」

千歌「やったー！」

千歌に参加の意思を伝えるとはしゃいで喜びだした。こういうところが昔と変わらなくてちよつと微笑ましい。

曜「なーにニヤニヤしてるの？祥くん？」

僕「ああ、昔と変わらなくて微笑ましかつただけだよ。」

曜「千歌ちゃん、昔から祥くんのこと好きだもんね。」

僕「そっか。うれしいよ。」

小さい頃、千歌も曜も懐いてくれてたしな。僕も妹が出来たみたいで本当に嬉しかった。

その後、打ち上げを思う存分楽しんだ。久しぶりに誰かが作ってくれる料理はとてもおいしかった。それに一人で食べるよりも誰かと食べるほうが楽しいね。

それとその場のノリで十千万でお泊まりすることが確定した。

部屋はどうしたかって？さすがに千歌の部屋に泊まるのは気が引けたので志満さんに頼んで部屋を借りましたよ。

僕「…まさか客室を貸してくれるとは思わなかったw」

志満さんは客室が空いているからと言って客室を貸してくれた。それにしても一人

じゃ広い。まあそんなことは気にしないっしないのでとりあえずお風呂に入ろうか。久しぶりの温泉、露天風呂！ガキの頃は十千万のお風呂が好きだった。

……

……

……

あー、やっぱり温泉は最高やなあ〜！日々の疲れが癒されるわ〜♪コラそこ、オッサンとか言うなwオレはまだ18歳だぞwといいつつも温泉に浸かりながらオッサンみたいに『あ〜』って声を出してたのは秘密だw

—————。

僕「長湯してしまった…」

はい、のぼせましたw時間を忘れてずっと露天風呂に浸かってた結果がこちらですw部屋にはすでに布団が敷いてあったので横になっています。浴衣がはだけてパンツ一丁に近い姿になっております。冷水も枕もとに置いてあります。まるで病人みたいでございますw

そんな状況の中、部屋のドアが開いた。

千歌「祥く………んんんん!?! / / /」

曜「ちよ!?! どうしたのそのカツコウ!?! / / /」

僕「あー…長湯してのぼせた…」

千歌「あー。祥くん、昔からうちでお風呂入ると長湯だったもんね…」

梨子「それより! 浴衣、はだけ過ぎでしょ! / / /」

僕「………あ………きゃあく、えっちく(棒)」

ふざけてそう言ったら3人から凍てつくような目で見られたので耐えかねて簡単に浴衣をなおした。

梨子「祥くん、浴衣直す時起き上がらなかつたけどそんなにのぼせてるの？」

僕「うん、しばらく起き上がれる気がしない……」

曜「じゃあ祥くんは今日は無理そうだね。」

千歌「えー！せっかくみんなでお泊まりするのに……」

梨子「しょうがないよ。また今度にしよ？」

僕「ん？なんの話しだ？」

曜「これから千歌ちゃんのお部屋でトランプでもやろうかと思ってたんだ。」

僕「ゴメン……今日は勘弁してくれ……」

千歌「そっかあ……残念……」

梨子「まあまあ、今日はやめよう？」

僕「みんなごめんよ…」

曜「ううん、祥くんこそおだいじに。」

3人が明らかに落ち込んだ様子で部屋を後にした。ホント悪いことしちゃったなあ…
…今度から長湯は気をつけよう。

僕「ん…んん…」

どうやらあのまま寝落ちしてしまったようだ。体調はよくなったように感じる。寝たからか回復したようだ。

僕「今何時だ…？」

現在の時刻はA M 5 : 4 0。起きるにはまだ早いけど2度寝に突入出来る気がしないので起きるとするか。

起きようとしたところで両サイドに何かを感じたので見てみるとなんと千歌と曜が添い寝をしていた。

僕「布団もかけずに寝てる…」

きつと心配して様子を見に来てくれたんだろう。こういうとき、普段なら布団に潜り込んでくる千歌と曜だけど今日は潜り込んで来てないところからおそらく看病してる最中に寝落ちしたのかもしれない。

なんて健気な娘たちなんだ！おじさん涙が出てきたよ！

あ、いや、単に布団に潜り込むのが恥ずかしくなっただけか？そうだ、きつとそうだ。それはさておき、このままだと千歌と曜が風邪を引いてしまうので2人を僕が寝てた布団に寝かせ、掛け布団をかけてあげた。

僕「千歌、曜。心配してくれてありがとな。」

2人の頭を撫でてから、僕は十千万のロビーに向かった。

志満「あら、祥くんおはよう。随分早起きね。」

僕「志満さん、おはよう。なんか目が覚めちゃったんだ。」

志満「あらあら。そういえば千歌ちゃんから長湯してのぼせたって聞いたけどもう大丈夫なの？」

僕「うん、もう平気だよ。」

志満「よかった。祥くん、昔っからここでお風呂に入ると長湯だったもんね。」

僕「うん、ここのお風呂好きだから。」

志満「でも長湯は程々にね。」

僕「はい。」

その後、僕は久しぶりに旅館の……というか志満さんのお手伝いをした。主に朝ごはんの準備を手伝いながらちやつかりと志満さんから料理を教わっていた。こうして過ごしていると梨子ちゃんが起きてきたようだ。

梨子「あれ？祥くんおはよう。具合はもう大丈夫なの？」

僕「梨子ちゃん、おはよう。おかげさまで、もう大丈夫だよ！」

梨子「よかった。そういえば祥くんの部屋に千歌ちゃんと曜ちゃんと行かなかった？」

僕「うん、起きたら2人とも雑魚寝しててびっくりした。」

梨子「やつぱり……寝るまえに千歌ちゃんと曜ちゃんが祥くんの看病しに行こうって

言ってたから『あんまり大人数で行くとかえって落ち着かないと思うからやめよう？』って行つたんだけど聞かなくなつて…」

僕「そっか。心配かけちゃつたな…」

梨子「それで、2人は今どこにいるの？」

僕「風邪引いたら大変だからとりあえず僕が寝てた布団に寝かせた。」

梨子「ふーん…手は出してないわよね？」（ジトー）

僕「出してません!!」

梨子ちゃん、なんか今日は辛口だなあ…そんな会話をしているとところで千歌と曜が起きてきた。

千歌「おはよー」

曜「おはヨーソー！」

梨子&僕「おはよう。」

千歌「祥くん、もう具合は平気なの？」

僕「ああ、おかげさまでもう平気だよ！」

曜「そっか、よかった！」

その後、千歌と曜、梨子ちゃんと志満さんと僕の5人でキッチンに立ち、朝ごはんの準備をした。5人で料理をするのはたのしかった。やっぱり誰かがいるっていいよな。

その後、5人＋美渡さんを加えて6人で朝ごはんを食べて解散となった。帰る前に『今度泊まる時は一緒にトランプをしよう』と千歌と曜、梨子ちゃんと約束をした。今回は調子に乗って長湯をしたせいで3人とトランプが出来なかったし、今度からは調子に乗った長湯はやめようと思ったのであった。

仮入部からの…

仕事が終わってから野暮用で十千万に行き、丁度帰ろうとしたところで千歌が帰ってきたため少し浜辺を散歩することにした。

僕「スクールアイドル部が承認されたんだね！おめでどう！」

千歌「ありがとう！祥くん♪」

僕「でも人数少ないのに本当に承認されたんだね（汗）」

千歌「理事長、なんというかすごいノリノリだったよ…（苦笑）」

僕「あー、何となく想像出来たわ：『シヨーン☆』とか言ってる（笑）」

千歌「まさにそんな感じだよ…あはは…」

まあ何はともあれ承認されてよかった。また千歌たちのライブが見れるのが楽しみだ。

後日――。

仕事の休み時間中に千歌から電話がかかってきた。

僕「体験入部？」

千歌「うん！今日、1年生の子が2人体験入部で来てくれたの！」

僕「マジで！やったじゃん！」

千歌「それでねそれでね、夕方ごろに淡島神社でトレーニングするんだけどよかったら見に来ない？」

僕「うん、仕事が終わったらすぐ行くよ！」

A q o u r s の練習を見に行くために、仕事をこれでもかかってぐらいの速度で進めた。多分いつもの倍ぐらいの速度だろう。自分でもビックリした。A q o u r s 様のお力かも知れませんか w

………

……

…

さて、淡島神社の階段前に到着したけどまだA q o u r s 一行様はご到着されていないようだ。それにしてもスクールアイドル部に体験入部する子ってどんな子なんだろう？じきに現れると思うていたらA q o u r s が到着したようだ。

千歌「祥くーん！」

曜「ヨーソー！」

梨子「こんにちは！」

僕「よっ！つてあれ!!」

ルビイ&花丸「あれ？祥兄ちゃん!?（祥一くん!?!）」

僕「ルビイちゃんとマルちゃん！スクールアイドル部に体験入部したのつてルビイちゃんとマルちゃんだったんだね！」

ルビイ「うん、そうなんだ！」

花丸「マルもルビイちゃんと一緒に体験入部したずら。」

僕「へえ〜♪」

千歌「あの〜、ルビイちゃんと花丸ちゃんと祥くんつて知り合いだったの？」

僕「うん、ルビイちゃんは母さんの友達の娘さんでマルちゃんは散歩してた時に出

会ったんだ。」

千歌「へえ、ルビイちゃんはともかく『マルちゃん』ねえ…」（ジト）

ようりこ「（ジト）」

僕「な、なんだよお…」

なんか最近3人にジト目で見られる率が高いんだけど…僕、ジト目で見られたいとかそんな趣味ないからな？

僕「ところで、トレーニングするんじゃないのか？」

曜「おおっとそうだった！」

僕「オイオイ…」

ルビィ「ところで…これ、一気に上ってるんですか!？」

千歌「もちろん!」

曜「いつも途中で休憩しちゃうんだけどねー。」

千歌「…えへへ…(汗)」

梨子「でも、ライブで何曲も踊るには頂上まで駆け上がるスタミナが必要だし。」

千歌「じゃあ! μ s 目指して、よーい! ドン!」

僕「気をつけてねー!」

さて、僕は水を5本買ってから久しぶりに階段を登ってみるとするかな。

……

……

…

うわ…ここの階段ってこんなにキツかったっけ？神奈川に行く前はこんなにキツく
なかったように感じてたけどやっぱり中高の部活どっちも文化部で運動量が減ったの
がここでキタのかな…

途中の展望台まで登ったところで人影を見かけた。よく見たらダイヤちゃんだった。

僕「あれっ？ダイヤちゃん。」

ダイヤ「祥一さん？」

僕「こんな所でどうしたの？」

ダイヤ「さあ？何のことだか分かりませんが呼ばれたので来たってだけです。」

僕「呼ばれたってルビイちゃんに？」

ダイヤ「いえ、ルビイのお友達です。」

僕「つてことは…あつ、その呼び出したと思われる人物が現れたから僕は消えらるよ。」

ダイヤちゃんと話しているところでマルちゃんが降りてきたので僕は退散したと見せかけて隠れてこっそり2人の会話を聞くことにした。

ダイヤ「なんですの？こんな所に呼び出して？」

花丸「…あの、ルビイちゃんの話、ルビイちゃんの気持ちを聞いてあげてください！」

ダイヤ「ルビイの？」

そうやってマルちゃんはダイヤちゃんにお辞儀をして走り去った。

ダイヤ「あつ！」

マルちゃんの真剣な表情からダイヤちゃんに何を伝えたいかは何となく想像出来た。

僕「つてやべ！マルちゃんに気づかれる前にさっさと降りねーと！」

マルちゃんに見つからないように急いで入口まで降りたつもりだったが…

………

………

………

僕「あ、マルちゃんおつかれ！」

花丸「おつかれさまずらく。」

マルちゃんは僕より先に入口まで降りてきていた。

僕「はい、水。あれっ？みんなは？」

花丸「ありがとうずら。 (ゴクツゴクツ) ぷはあく。 マルだけ先に降りてきたずら。」

僕「そつか。 やつぱりキツかった？」

花丸「うん、 それにこれでよかつたずら。」

僕「これでよかつた？」

花丸「ルビイちゃん、 ずっと人に気を使って自分の気持ちを抑えてたずら。 本当はス
クールアイドルやりたいのにマルに気を使って… ダイヤさんに気を使って…」

僕「ルビイちゃん…」

花丸「だからマルはルビイちゃんに気持ちに正直になるように言ったずら。 無理に人に合わせても辛いだけだつて。」

僕「そっか。」

花丸「これでマルの話はおしまい。もう夢は叶ったから。マルは本の世界に戻るの。」

僕「本の世界？」

花丸「大丈夫、一人でも…」

その時、マルちゃんは少しさみしそうな顔をしてたので思わずこんなことを聞いてしまった。

僕「マルちゃんはスクールアイドルに興味無いの？」

花丸「マル？興味はあるけど…マルには無理ずら…」

僕「どうして？」

花丸「マルは体力ないし、それにオラ…「オラ」とか言っちゃうし、向いてないよ…」

僕「うーん、じゃあこんな質問を試してみよう。マルちゃんはスクールアイドルは好きか嫌いかって言ったらどっち？」

花丸「えっと…その…（好きずら…）」

最後、マルちゃんの口調が弱くなつてよく聞き取れなかったけど肯定的な答えをしているのは顔を見て察せた。

僕「だったら、それでいいんじゃない？」

花丸「？」

僕「好きならそれだけでやる理由になるんじゃないってことさ。」

花丸「あの…どういふことずら？」

僕「僕が言えるのはここまで。あとはマルちゃんの気持ちしただよ。」

ちよつと哲学的過ぎたか？マルちゃんの頭には？マークがついた状態だけどこれ以上はもう言わない。あとはA q o u r s やルビイちゃんに任せるとしよう。

。

マルちゃんと別れてからしばらく経つとA q o u r s とルビイちゃんが降りてきた。

僕「あ、おかえりー。」

千歌「ただいまー、疲れたよお。」

僕「おつかれさま。はい、水。」

4人「ありがとう。」

4人は水を手にした瞬間、ゴクゴクと勢いよく飲み始めた。

千歌「祥くん、なんで登らなかったのー？」

僕「いや、ちょっと仕事で疲れてて登る気になれなくて。あはは…」

曜「じゃあ祥くんもこれから朝練やる？」

僕「勘弁してくれ、仕事に行く体力使い切っちゃうよ。」

曜「あははー」

その後、しばらく休憩した後解散することになったのでルビィちゃんを送って帰ることにした。話したいことあるしネ。

ルビィ「お兄ちゃん、送ってくれてありがとう。」

僕「いいいいいよー、ちよつと話したいことあるし。」

ルビィ「えっ？」

僕「ルビィちゃんはスクールアイドル部に入る事にしたの？」

ルビィ「うん！明日、入部届け出すんだ！」

僕「そっか。スクールアイドル、楽しかったかい？」

ルビィ「うん！」

ルビィちゃんは楽しそうにうんと答えてくれた。

僕「マルちゃんはとうするとか言ってた？」

ルビイ「花丸ちゃんは……」

ルビイちゃんは黙りこんでしまった。

僕「マルちゃんは今日、楽しそうにしてた？」

ルビイ「うん。大変そうだったけど、楽しそうだった。」

僕「そっか。」

ルビイ「お、お兄ちゃん……？」

僕「ん？」

ルビイ「花丸ちゃん、どうかしたの？」

僕「ん？ああ、いや。さつき実はちよつと会ってさ、なんか寂しそうな顔してたから

…
」

ルビィ「…」

僕「マルちゃん、『自分には無理、向いてない』って言ってるか…」

ルビィ「そんなことない！」

ルビィちゃんは普段からは考えられないような大声で叫んだ。

ルビィ「そんなこと言ったらルビィだって人見知りするし、向いてないもん！それに…」

ルビィちゃんの自虐スイッチが入ったためちよっとタチの悪い疑問をぶつけてみることにした。

僕「そっか…だったならなんでルビィちゃんはスクールアイドルを始めようとしたんだ

い?」

ルビィ「えっ?」

僕「向いてないって思うんなら始めないんじゃないかな?」

ルビィ「そ、それは…」

ルビィちゃんが黙りこんでしまった。普段はルビィちゃんにこんなこと言ったりしないから驚いてしまったのかもしれない。

僕「…ごめん。言い方がキツかったね。単に疑問に思っただけなんだ。別にルビィちゃんがスクールアイドルを始めようとしてることは悪いと思ってるわけじゃないよ。」

ルビィ「ううん、別に気にしてないよ…」

口ではそう言ってるけど表情はちよつと暗いままだ。ちよつと酷なことを言っ
てしまったから無理はないか…

ルビィ「ルビィね、ずっとスクールアイドルに憧れてたんだ。それに今日、スク
ールアイドルをやってみて楽しかったんだ。たしかに人見知りをするし、練習もキツ
かった。でもそれ以上に楽しかった。だからルビィはスクールアイドルを始めること
にしたんだ。」

僕「そっか。なら僕も応援するよ！ルビィちゃんの楽しそうな所見たいし！」

ルビィ「お兄ちゃん…ありがとう！」

ルビィちゃんに笑顔がもどった。

僕「うん。あと、話を戻すとマルちゃんは話してる限りやりたそうな気がしたよ。」

ルビィ「ホントに？」

僕「うん、あとはマルちゃんが一步踏み出さずか踏み出さないか次第って所かな。」

ルビィ「そっか。」

ルビィちゃんは何かを決心したような顔をした。

ルビィ「ルビィ、スクールアイドルやりたい！花丸ちゃんと一緒に！」

僕「がんばってね！ルビィちゃん！」

ルビィ「うん！」

次の日

仕事上がりにルビィちゃんからLONEが届いた。どうやらマルちゃんもAqou

r sに入ったようだ。写真も一緒に送られてきて、千歌、曜、梨子ちゃん、ルビィちゃん、マルちゃんが好きそうに写ってる写真だった。

僕「よかった、みんな楽しそうだ…」

思わずそう呟き、家に向かって愛車を走らせるのであった。

ヨハネ降臨

僕「ひ、暇だ…」

今日は平日にも関わらず会社が休みだ。なんでも、環境負荷の軽減活動のためらしい。

僕「うーん、ネット動画でも見てみるか…」

PCを立ち上げ、とある動画サイトにアクセスした。エッチな動画サイトじゃないかな！勘違いすんなよw

って誰に言ってるのか分からないツツコミはやめて動画でも見るか。

ん？墮天使ヨハネ…？ちよつと見てみるか。

………

………

…

あー、コレは厨二病ってやつだな。でも出てる女の子はかわいいし、かなり凝った作りだし、なんとか本当に堕天使が好きなんだなと思った。次の生放送はいつだろ？生じやなくてもタイムシフトでまた見てみようかな。

数日後

仕事が終わったら家に来てほしいと千歌からLONEが入っていたため会社から直行了した。

僕「ごめんくださいーい！」

志満「あら、祥くん。いらっしやい！」

僕「志満さん、千歌はいる？」

志満「さつき帰ってきて、部屋にいるわよ。スクールアイドルのみんなも一緒にね。」

志満さんの中に上げてもらい、千歌の部屋に向かった。

僕「千歌ー？来たよー？」

千歌の部屋の外から声をかけるとドアを開けてくれた。

すると…なんということでしょう。(ピフ〇ー〇フター風にw)

A q o u r s の5人＋1人が普段からは想像出来ないような格好をしている光景が広がっているではありませんか。

思わずビックリしてしばらく半口を開けて硬直してしまった。

千歌「ねえー、祥くーん？聞ってるのー？」

僕「…お、おお？ごめん、聞いてなかった(汗)」

千歌「もう！この衣装どうかなって聞いたの！」

今着てる衣装？うーん……これって所謂ゴスロリってやつか？梨子ちゃんやルビィちゃん、マルちゃんはなんかモジモジしたかんじでなんというか……

僕「見てはいけないものを見てる気がしてきた……」

千歌「それどーゆーこと!？」

千歌は僕の感想が不満だったのか騒ぎ出したし3人は恥ずかしそうにしてるし、なんかオレ、ここにいない方がいいんじゃないかね？さり気なくバックで千歌の部屋を出ようとしたところで……

??「待ちなさい！リトルデーモン！」

僕「えっ!?!えつと……その……リトルデーモンって僕のこと……?」

??「そう!この結界の中に入った者は簡単には逃れられないわ!」

うーん、なんというか…ついていけない…これどんな状況…？

ふとその謎な発言をした子の顔を見ると…あれっ？どつかで見たことあるよう
な…

………

………

…

あつ！思い出したぞ！

僕「もしかして、堕天使ヨハネか？」

その発言にここにいる全員が目を丸くして僕を見たw

ヨハネ「ク、ククク…さよう。我こそが堕天使ヨハネ！我がジャツジメントルームへ
ようこそ！」

僕「いや、ここ。千歌の部屋だから…」（ジト）

僕がその墮天使ヨハネをジト目で見ていたら2年生一同にジト目で見られた。

千歌「祥さんと善子ちゃんって知り合いだったの？」

僕「善子ちゃん？」

善子? 「善子じゃなくてヨハネ！」

もうマジでついていけない…ダレ、ガダズゲデエ、く!

僕「いや、初対面だけど? 前にたまたまこの子に似た子の動画を見てみたから知ってただけだよ。」

千歌「ふーん…」

千歌、曜、ルビィちゃん、マルちゃんがジト目でこちらを見てきた。とうとうルビィちゃん、マルちゃんにまでジト目で見られる日が来るとか…もう泣いていいですか?

(泣)

ん？そう言えば梨子ちゃんの姿が見えないけど……まあ、すぐに戻ってくるべ？そう思っていたら……

しいたけ「ワンっ！ワンワン！」

美渡「コラっ！しいたけっ！」

障子の向こう側からしいたけに追いかけられる梨子ちゃんの影が見えた。

千歌「梨子ちゃん、しいたけはおとなし（ryゴフツ！」

美渡さんの部屋から障子を突き破って梨子ちゃん登場wそして千歌の部屋の窓から自分の部屋のベランダまで大ジャンプ！

みんな「おお、飛んだ。」

梨子ちゃん、ベランダに見事に着地wそしてしかめっ面でこちらを向いた。

みんな「おおく（*、ω、ノノ、☆パチパチ」

梨子「!!」

梨子母「おかえり…（苦笑）」

梨子「た、ただいま…」

偶然、梨子ちゃんが大ジャンプ帰宅をした所を掃除をしていた梨子ちゃんのお母さんが目撃していた…w

夕方

終バスの時間になったのでその日は解散になった。曜とヨハネ（本人がヨハネと呼べ

と言うのでそう呼んでる）は沼津の方向に、ルビイちゃんとマルちゃんは歩いてそれぞれの家に帰って行った。

千歌「じゃーねー！」

僕「おつかれー！」

千歌と梨子ちゃんと僕は帰っていくA q o u r sメンバーをバス停で見送った。

梨子「あいたたた…」

僕「梨子ちゃん大丈夫？」

梨子「な、何とかね…」

千歌「あはは。」

梨子「笑い事じゃないわよ！今度から絶対繋いでおいてよ！」

千歌「はいはい。」

梨子「むー。もう、人が困ってるのそんなに楽しい？」

千歌「違う違う、みんな色々個性があるんだなーって。」

梨子「えっ？」

千歌「ほら、私たち始めたはいいけどやっぱり地味で普通なんだなーって思ってた。」

梨子「そんなこと思ってたの？」

千歌「そりゃあ思うよ。一応言い出しつぺだから責任はあるし。かと言って、今の私にみんなを引っばっていく力はないし。」

梨子「千歌ちゃん…」

僕「千歌…」

千歌「でも、みんなと話して少しずつみんなのこと知って全然地味じゃないって思ったの！それぞれ特徴があつて、魅力的で…だから、大丈夫じゃないかなって！」

梨子「…やっぱり変な人ね。」

千歌「ええっ！」

梨子「初めてあつた時から思ってたけど。」

千歌「なにー！褒めてるの!?! 貶してるの!?!」

梨子「どっちも?」

千歌「なに！わかんないよー！」

僕「あ、あはは（苦笑）」

梨子「とにかく、頑張っていこうってこと。地味で普通のみんなが集まって何が出来るか、ねっ。」

千歌「…？よく分からないけど…まっ、いつか。」

梨子「っ！うちまで競走く！」

千歌「え？あ！ずるくい！ちよつと！あっしいたけ！」

梨子「ええっ！」

千歌「うっそく♪あはは！」

僕 「いや、ホントにいるよ？」

梨子 「ええっ！」

僕 「うっそー！」

梨子 「もう！」

根拠はないけど、僕もA q o u r sなら大丈夫な気がしてきた。

そう思うと、梨子ちゃんから見たら僕も変な人なんだろうなあ…w

後日

仕事上がりから約5分後に千歌からL O N Eが入った。どうやら新しい映像ができたようで見てほしいとの連絡だった。さて、ちよつと見てみるか…

僕「うわっ…」

コレは…なんというか…ちよっとスケベエ…／＼／＼特にルビイちゃん…コレはアカンって…これ、ダイヤちゃんが見たら絶対キレルパターンだよ…

そんな心境になりながらも家まで車を走らせた。

あ、そろそろみかん切らしそうだから重須のJ〇にでも寄って帰ろつと。

………

………

…

さて、買い物も済ませたし帰るとするか。

あれ？あのシニヨンのロングヘアの娘…ヨハネじゃん。なんで一人で歩いてるんだろ…

僕「あれっ？ヨハネ？」

ヨハネ「あ、祥一？」

僕「…？ヨハネ、どうかしたのか？バスで帰らないのか？」

ヨハネ「……………」

ヨハネは黙って俯いた。ひよつとして…お金もつてないのか？

いや、そんな感じじゃなさそうだ。何かあつて落ち込んでるのか？慰めるにも何があつたかわからないし…うーん…

僕「…送つてこうか？」

オイオイ、それじゃただのナンパじゃねーかよ俺…

ヨハネ「…うん」

マジかw人生初のナンパ成功！やったぜ！

あ、すいません。調子に乗りました。だからそんな目で見ないでください、ヨハネ様（泣）

……

……

…

ヨハネを家まで車で送ることになった。人（とくに女の子）を乗せる時は普段よりもマイルドな運転を心がけてるけどやっぱりコイツ（車）うるさいなくWこういう時だけノーマルマフラーがいいわ。

僕「家どこ？」

ヨハネ「沼津……」

僕「駅の方に向かえばいいかな？」

ヨハネ「……」（コクツ）

ヨハネは黙って頷いたので沼津駅の方に向かって車を走らせた。数分間、車内で沈黙が続いた後ヨハネが口を開いた。

ヨハネ「ねえ様一？」

僕「なに？」

ヨハネ「高校生にもなって墮天使とか言ってる女の子ってどう思う？」

墮天使とか言ってる女の子ってどう思う、か。本当に何があったんだろ？ 気になるけど今はヨハネの質問に答えよう。

僕「ん、別にいいんじゃない？」

ヨハネ「なんでそう思うわけ？」

僕「何でって、単純にそう思ったから。個人の趣味、好きなことは誰にだって楽しむ権利はあるわけだし。」

ヨハネ「でもそれで他人に迷惑をかけた…」

そっか、自分が墮天使を名乗ってるせいで人に迷惑をかけてしまったのか…

僕「たしかに他人に迷惑をかけるのはよくないと思うけど、だからと言って深く考えなくてもいいと思うぜ？100%の人に迷惑をかけないっていうのは無理な話なんだし。」

ヨハネ「なんでそう思うわけ？」

僕「自分の趣味も少なからず迷惑に思う人もいると思ってるから。」

ヨハネ「どういうこと？」

僕「僕さ、クルマが好きなんだ。運転することも好きだし改造も好きなんだ。この車、買った時から少し改造されてたけど正直まだいじれる所いっぱいあると思うんだ。」

ヨハネ「…」

あつ、やべっ！話がちよつとズレちった。何が言いたいかと言うと…

僕「正直この車のことどう思う？」

ヨハネ「ちよつとうるさい。」

僕「やっぱりな。」

ヨハネ「ああ、ごめん！なんとというか、その！」

僕「いや、たしかにそうなんだ。この車、今の状態でも僕の趣味にあつた仕様なんだけど、マイナスなイメージを持つ人だっているんだ。自分は好きでも他人は嫌、要は誰かしらは自分の趣味に悪いイメージを持つてることだよ。」

僕「でもこの車、一応合法改造車要するに犯罪をしている訳では無いんだ。だから他

人にとやかく言われる筋合いはないって思ってる。」

ヨハネ「…?」

僕「何が言いたいかって言うと、ヨハネの墮天使だって悪いことしてるわけじゃないんだから墮天使が好きだってとやかく言われる筋合いはないと思うぜ。」

ヨハネ「…祥一も趣味で色々言われるの…?」

僕「言われるよー。会社の女子には『うるさい』とか『こんなの乗りたくない』って言われるし、曜には暴走族と間違えられたんだから。」

ヨハネ「そう…祥一も大変なのね。」

僕「大変じゃないって言ったら嘘になるけど、それでも僕は好きだからやめる気はないよ。」

ヨハネと話をしていたらあつという間に沼津に到着した。

僕「ヨハネ、着いたよ。」

ヨハネ「送ってくれてありがとう。じゃあね。」

僕「うん、じゃあね。」

ヨハネを降ろして車を走らせようとしたところでヨハネに尋ねられた。

ヨハネ「ねえ祥一！」

僕「うん？」

ヨハネ「……………わたし、墮天使…ヨハネのままでいてもいいのかな…!？」

ヨハネのままでいてもいいのか、か。そんなのもちろん…

僕「いいと思うぜ。ヨハネが墮天使を好きでいる限りな。」

そうやって僕は家に向かって車を走らせた。

次の日

朝早くからスマホが鳴ったと思ったら千歌からのL O N Eだった。どうやらヨハネがA q o u r sに加入したらしい。もちろん墮天使として。加入した経緯もざっくりと書いてくれていたので読んでみたら…

僕「あの格好してみんなで追いかけ回したのか…」

マジかよwていうかよく梨子ちゃんとルビィちゃん、マルちゃんもやる気になったな。

でもA q o u r sが墮天使を救ったと思うと…う、うん…w何も言えませんが

誕生日記念ストーリー
高海千歌誕生日記念

数日前の22時頃――。

プルルルル！プルルルル！

僕「電話？誰だろ…？」

ピッ

僕「もしもし？」

曜「もしもし？祥くん？」

僕「曜か？」

曜「うん、ごめんね。こんな時間に電話しちゃって。」

僕「いいよ、どうした？」

曜「8月1日って1日空いてる？」

僕「うん、空いてるよ。その日って千歌の誕生日じゃなかったっけ？」

曜「さっすが祥くん！わかってるねえ！今梨子ちゃんや果南ちゃん、志満さんや美渡さん達と十千万で千歌ちゃんのサプライズ誕生日会をやろうと思ってるんだ。そこでお願いなんだけどさ、その日は千歌ちゃんを夜まで連れ出して欲しいのと、その後に誕生日会に参加して欲しいんだけどいいかな…？」

僕「うん、いいよ。てか僕も誕生日会参加していいの？」

曜「ありがとう！祥くんならそう言ってくれると思ってたよ♪もちろん来ていいに決

まってるじゃん！多分祥くんが来なかったら千歌ちゃん泣いちやうよ（笑）

僕「そっか、ありがとう。」

曜「当日の行き先は任せるよ！千歌ちゃんを楽しませてあげてね！」

僕「うん、わかってる。」

曜「じゃあ祥くん、よろしくね♪」

僕「おう！任せとけ！」

ピッ

さて、どこに連れていこうかな…水族館とか海関係は近いからたまには山の方とかも
いいかなあ…あ、峠（やま）だと千歌じゃなくて俺が楽しんじゃうからダメだわーん
…
…
…

……

…

この季節だしプールとかが無難かな。よし、千歌に電話だ。

ピツポツパ

プルルルル…

千歌「もしもし?」

僕「もしもし、千歌?」

千歌「あ、祥くん? どうしたの?」

僕「8月1日って空いてる? もしよかったらココ最近暑いし、一緒にプールにでも行かないかなって思ったんだけどどう?」

千歌「行く!」

僕「おう、じゃあその日の朝8：00頃に迎えにいくわ。」

千歌「うん！楽しみにしてるね♪」

8月1日――。

海パン持った、防水ケースもった、忘れ物は無さそうだ。時間的にもそろそろ千歌を迎えに行ってもいい頃だ。

車のエンジンを掛け、暖気を済ませいざ出発。

僕「油圧OK、水温OK、アイドルOK、OK、BRZ！」

どこぞの悪魔のマンガみたいなこと言っていないでさっさと行こう。それで遅刻したらアホすぎるわ。

――。

千歌の家の前に着いたけど千歌はさすがに外には出てきてないか。十千万の玄関は開いてるし、志満さんに聞いてみるか。

僕「ごめんくださいーい！」

志満「あら祥くん、おはよう！」

僕「志満さん、おはよう！千歌はもしかしてまだ寝てるのかな？」

志満「いや、起きてるけど。でもいつもより準備に時間がかかってるわねえ。」

僕「おつ、ならよかった。」

美渡「おつ？祥くんおはよう！」

僕「美渡さん、おはよう！」

美渡「千歌のやつ、今日はやたらと気合い入れて準備してるからもうちよい待っててな。」

僕「う、うん。わかった。」

志満「祥くん、今日は千歌のことお願いね。」

僕「任せとけ！」

千歌「ああ〜！8：00過ぎちゃったよお〜！あ！祥くん！遅くなってゴメンね！」

ドタバタと慌ただしく出てきた千歌。夏らしく涼し気な服を纏っていた。

僕「ううん、さつき来たところだから大丈夫だよ。さ、行こっか？」

千歌「うん！じゃあ志満姉、美渡姉、行つてきます！」

姉2人「行ってらっしゃい」

さて、十千万から目的地まで車で約1時間。今日は横に千歌を乗せてるしいつもとより安全運転でいこう。

僕「千歌、今日はいつもとちよつと雰囲気違うね？」

千歌「だって、祥くんがこつちに帰ってきてから初めてのデートだもん！だから気合を入れちゃった。」

僕「で、デート…ありがとな。めちやくちやかわいいよ。」

千歌「え、えへへ…／／／」

行きの車内では千歌が色々な話をしてくれた。学校のこと、Aqoursのこと、曜や梨子ちゃんのこと。話したら止まらずどこまでも話してくれた。そのおかげかプールに着くまでがあつという間に感じた。

僕「へい、到着♪」

千歌「運転おつかれさま〜。」

僕「ありがとう。」

受付を済ませ、更衣室に入る前に待ち合わせの約束をする。

僕「じゃあ、着替えたらここで待ち合わせな。」

千歌「うん。」

とりあえず着替えるか。荷物はロッカーにしまってお金と車のキーは防水ケースに
しまっておこう。

……

……

…
よし、着替え終わった。僕の身体、なんかちよつとだらしねえな…もう少し鍛えておけばよかったwそれよりも千歌が待つてたら悪いからはよ待ち合わせ場所に行かないと。

僕「僕の方が早かったか…」

それはいいや。千歌の方が先に出てきてなくてよかった。あいつかわいいからナンパとか心配だし。

千歌「祥くんお待ちせ〜。」

千歌が更衣室から出てきた。ヤバイ…めちやくちやかわいい…さすがスクールアイドルをやってるだけあるわ。こりやますますナンパとか心配になるな。意地でも守り抜かないと。

千歌「ねえ祥くん。聞ってる?」

僕「あ、わりい！なんだっけ？」

千歌「もう！わたしの水着姿、変じやないかなって聞いたの！」

僕「全然変じやない！むしろめちやくちやかわいいよ！」

千歌「はう…／＼／＼」

おお？千歌さんが赤くなってらっしやる。かわいいとかあまり言われ慣れてないのかな？w

………

………

…

Oh…千歌がフリーズしちやつてる…なんというかこのままだといつまで経つてもプールに入れそうにないのでそろそろ行かないと。千歌の腕を優しく掴んでプールまでエスコートしてみますか。

カシッ

僕「千歌、そろそろプール行こうぜ♪」

千歌「えっ？／＼／＼あ、うん！」

この後めちゃくちゃ楽しんだ。千歌の楽しそうな顔をみれてなによりです。僕がずっと一緒にいたからか幸いナンパとかもなかった。

僕「もう15時か。結構遊んだね。」

千歌「うん、ちよつと疲れたかなあ〜。」

僕「そうだね、プールとかって結構体力使うもんね。」

千歌「でも楽しかった！連れてきてくれてありがとう！」

僕「おう！」

その後、もう充分遊べたということで近くのアウトレットモールに移動した。車を降りて歩こうとしたところで千歌が僕の手をとった。

僕「千歌？」

千歌「えへへー♪」

満面の笑みで僕の手をとってる千歌を見て僕も千歌の手を優しく握る。ガキの頃は手を握るなんてよくやってたけどこの年になるとちよつと恥ずかしいかな…／／

千歌「さ、行こっ？♪」

僕「うん。」

アウトレットを2人でゆっくりと眺めていると千歌が何かを見つけたのか僕の手を

強く握り、その場に走り出す。

千歌「わあ！これかわいい！」

それはネックレスだった。それもみかんデザインのやつ。確かにこれは千歌が反応しそうだわ。でも値段はちよつとお高い。高校生の財布じゃちよつと厳しいかな。でも僕なら買える。ちよつと今日は千歌の誕生日だし、実をいうと千歌への誕生日プレゼントをまだ用意してないのでこれはプレゼントにいいかなって思っていたら…

千歌「祥くん、他行こ？」

僕「千歌？」

千歌「だつてあんまり見てたら欲しくなっちゃうもん。だから行こ？」

千歌は僕の腕を強く引つ張つてその場を立ち去ろうとする。

僕「ちよつ、千歌！痛いって！」

結局、あのネックレスは購入せず他のお店を回ることになった。他のお店にみかんの髪飾りがあったので千歌はそれを購入した。

僕「満足した？」

千歌「うん……」

なんとなく元気がない気がする。疲れたのか？それともあのネックレスのことが心残りなのか？

千歌「あ、わたしトイレ行ってくるね。」

僕「わかった、僕ちよつと買い忘れた物があるから買ってくるよ。多分千歌の方が早いと思うから先に車に戻ってる？」

千歌「うん。」

僕は千歌に車のキーを渡してあのネックレスを売っているお店に向かった。

僕「よかった、まだ残ってる。」

在庫はまだあったので店員さんと呼んで購入する旨を伝える。

僕「すいません、このみかんのネックレス下さい。」

店員「はい、ありがとうございます。さっきの彼女さんへのプレゼントですか？」

僕「ええ、まあ……」

本当は彼女じゃなくて幼馴染みなんだけど。でもここは黙っておこう。

店員「おお？何かの記念日とかでしょうか？」

僕「ええ、今日はあの子の誕生日なんです。」

店員「なるほど♪では誕生日に相応しいラッピングを致しましょうか？」

僕「はい、お願いします！」

数分後——。

店員「おまたせしました！彼女さん、よろこんでくれるといいですね♪」

僕「多分よろこんでくれると思います。ありがとうございます！」

思ったよりも時間かかったわ。千歌が待つてるかもしれない。急いで車に戻ろう。あ、もちろんネックレスをカバンに隠すのを忘れずにと。

車に戻ったら千歌がすでに戻っていた。

僕「ゴメン、お待たせ！」

千歌「ううん、わたしもさつき戻ったところだから大丈夫。」

僕「そっか、よかった。遅くなるからそろそろ帰ろうか。」

千歌「うん。」

千歌のやつ、さつきからあまり元気がない気がする。しかも目が若干腫れてるように見える。どうしたんだ？

僕「千歌？さつきから元気がないように見えるけどどうした？」

千歌「ん、なんでもないよ。」

なんでもなきやなんで目が若干腫れてるんだ？

気付いたら僕は千歌の両頬を掴んでいた。

僕「千歌。お前、目が腫れてるじゃん。どうした？どっか痛いのか？」

千歌にそう尋ねると千歌は泣き出した。

千歌「痛いよ…胸が痛いよ！だって祥くん気づいてくれないんだもん！今日ずっと一緒にいてくれて、楽しかったしうれしかった！でも気づいて欲しいことがあったのに気づいてくれないんだもん！」

千歌「今日はわたしの特別な日なのに…！」

そういうことか。誕生日なのに祝おうとする素振りを見せなかった、それが悲しかったんだな。プレゼント、本当は誕生日会で渡すつもりだったけど今ここで渡そう。

僕「今日は千歌の誕生日だろ？こんな大切な日、忘れてるわけないだろ？」

千歌「えっ？」

カバンからネックレスを取り出す。

僕「はい、千歌。誕生日おめでとう。これは僕からのプレゼントだよ。」

千歌「あつ…あつ…（ポロポロ）」

あれ？もしかしてうれしくなかった…？

千歌「あ”り”がどお”ゝ！」

千歌がセンターコンソール越しに抱き着いてきたので優しく頭を撫でる。

千歌「うわああああん!!」

千歌が泣き止むまで10分ぐらいかかった。それまで僕は千歌の頭を優しく撫で続けた。

僕「落ち着いた？」

千歌「うん。」

僕「目がすごい真っ赤だよ？」

千歌「祥くんのせいだよ。」

僕「ゴメンよ。」

千歌「違うよ、うれしかったからなの。ありがとう。さっそく開けてみていい？」

僕「ああ、いいよ。」

千歌がプレゼントを開けてみるとそこからはみかんのネックレスが出てきた。

千歌「これって、さつき見てたやつじゃん。もしかしてこれを買に行ってたの？」

僕「まあな、誕生日プレゼントにいいかなって思ったんだ。」

千歌「えへへ、ありがと♡」

千歌はお礼を言うとおちを向いてしまった。

千歌「ねえ、ネックレスつけて。」

ん？マジかよ…w普段なら断るところだけど今日は千歌の誕生日だしつけるとするか。

僕「わかったよ。ほら、髪上げろ。」

千歌は髪を上げたのでネックレスを付けようとする。

それにしても女の子の首筋なんてそうそう見る機会が無いから色々ヤバイ……自分で髪を上げさせといて言うのもなんだけどあんまり見ると理性が飛びそう。相手は妹的な存在だぞ？そして千歌も千歌で無防備過ぎるだろ。相手が兄的なやつだとそんなもんなのかな？

あんまりこの光景を晒されると本当に理性が飛びそうなので早く付けるとしよう。

……

……

……

あ、首筋に手が触れてもた。

千歌「ん：／／／」

僕「あ、ゴメン！」

千歌「大丈夫、ちよつとくすぐったかっただけ：／／／」

僕「そ、そうか…」

こりや早く付けないと本当に理性が飛びそうだ。

僕「はい、着いたよ。」

千歌「ありがとう。ええつと…」

千歌が助手席のドアミラーを使って確認しようとしてたのでサンバイザーのミラーを出してあげた。

僕「千歌、ミラーならここにもあるよ？」

千歌「ありがとう。えへへ♪」

僕「どう？気に入ってくれた？」

千歌「うん、ありがとう。大事にするね♪」

僕「うん！」

プレゼント、気に入ってくれてよかった。

。

帰りの車内、随分静かだと思っていたら千歌は眠っていた。朝早くから遊んでたし仕方ないか。

千歌「すう…すう…」

十千万まであと5kmあるかないかの所で信号待ちをしている時…

千歌「祥くん…大…好き…」

僕「えっ!？」

突然の千歌の発言に思わずドキつとして千歌の方を見た。

千歌「すう…すう…」

僕「寝言か。」

「どうやら寝言だったようだ。7年間も離れていたのにこんなに慕ってくれてたなんておじさんうれしいよ。」

僕「ありがとう、千歌。」

「つい嬉しくなったので、信号が青に変わるまで千歌の頭を優しく撫でてた。」

_____。

よし、十千万に到着。今日は楽しかったな。あ、まだ誕生日会も残ってるわ。

僕「千歌、着いたよ。」（ユサユサ）

千歌「んー…？」

僕「おはよ。ぐっすり眠ってたんだね。」

千歌「おはよ…寝ちやってゴメンね。」

僕「いいよ、それより早く中に入ろう？」

千歌「うん。祥くん、うちに用でもあるの？」

僕「うん、今日一番大切な用事だ。」

千歌の頭には？マークが出てたけどさあさあと千歌を十千万に誘導する。玄関に入

ると…

パンツ！　パンツ！　パンツ！

曜梨子果南志満美渡「千歌（ちゃん）！お誕生日おめでとうー！」

千歌「えっ？ええっ!?」

千歌は突然の出来事で何が起きているのか分かってなさそうだ。

僕「千歌、改めて誕生日おめでとう。」

曜「サプライズ誕生日会を企画していたであります！」

梨子「千歌ちゃんに喜んでほしくて！」

果南「びっくりした？」

志満 「今日は千歌ちゃんの大好きなもの作ったわよ。」

美渡 「いい友達持ったな！千歌。」

千歌 「み、みんな…ありがとう〜！」

ここでも千歌は泣き出した。でもその表情はうれしさに満ちていた。

。

誕生日会の最中、曜が千歌のネックレスに気づいた。

曜 「あれ？千歌ちゃん、そのネックレスどうしたの？」

千歌 「えへへ、祥くんが誕生日プレゼントで買ってくれたんだ〜♪」

曜 「そっか！いいなあ〜。」

梨子「千歌ちゃん、よく似合ってるわ。」

千歌「えへへ、ありがと。」

なんか曜と梨子ちゃんからなんかめっちゃ視線を感じるんだけど…

僕「曜？梨子ちゃん？」

曜「わたしも…祥くんからのプレゼント、欲しいな…／／／」

梨子「わたしも…／／／」

何かと思ったらプレゼントのおねだりか…千歌だけに買うのもアレだし2人が誕生日のときにも買おうか。

僕「わ、わかったよ…誕生日の時にでも、な…」

曜「約束だよ？」

梨子「絶対だからね？」

僕「ああ。」

こうして曜と梨子ちゃんにも誕生日プレゼントを渡すことを約束した。まあ約束なんかしなくても渡そうとは思ってたけど。

千歌「祥くん♪」

僕「うん？」

千歌は首に着けたネックレスを大事そうに握りだし：

千歌「ありがと…／／／」

僕「うん。」(ニコツ)

千歌「…(大好きだよ…／＼／＼)」

僕「えっ?」

千歌「なんでもない♪」

僕「な、なんだよー…」

最後の一言は聞き取れなかったけど千歌がこんなにもうれしそうにしててなによりです。

桜内梨子誕生日記念

く祥一 Sideく

数日前——。

仕事から帰った後に海岸通りを散歩していたら偶然千歌に会った。

千歌「ねえ祥くん？9月19日って空いてる？」

僕「9月19日？空いてるけど？」

千歌「ホント!?よかった！じゃあさ、その日は梨子ちゃんと出かけてきてよ！」

僕「いいけど？なんかあるの？」

千歌「その日はね、梨子ちゃんの誕生日なんだ！この前、私の誕生日に祥くんが出掛けた時のことを話したら梨子ちゃんも曜ちゃんもすごく羨ましがってさ…だからね…？」

僕とお出かけするのがそんなに羨ましかったのか？嬉しいこと言ってくれるじゃないか。それじゃあ、とことんよろこばせてやるからな。

僕「わかった。出かけてくるよ。どこか行きたがってるところはありそう？」

千歌「さっすが祥くん！祥くんと出かけられるならどこでも喜ぶと思うよ！」

僕「わ、わかった。出かける場所は考えておくよ…」

困った…一番キメづらい回答だ…どこでもいいって言われると峠とかサーキット場に行ってしまうそうだ…さすがに女の子を連れてそこに行くのは考えてないけど。

数時間後——。

スマホ「L O N E ♪」

L O N Eが届いたので誰かと思つて確認してみたら梨子ちゃんからだった。

梨子「あの、祥くん？千歌ちゃんから聞いたんだけど、9月19日に一緒にお出かけしてくれるって本当？」

僕「うん、その日は何も無いし梨子ちゃんさえよければどこか行こうか？」

梨子「やった♪行こう！約束だからね？」

僕「うん！どこか行きたいところはあある？」

梨子「うーん…祥くんにまかせます♪」

マジか…まあ時間はまだあるし考えよう。

僕「わかった。考えておくね！」

さーて、どこがいいかなあ…

次の日――。

「ローイ」
「どうした、しぐにゃん？なんか究極の選択を迫られてるような顔をしてるぞ？」

僕「ローイ、その恥ずかしい呼び方はやめてくれ。実をいうと悩んでるのは本当なんだ。」

仕事の昼休み中に話しかけてきたのは同期のローイ。僕と違いモテるわ彼女も居るわのイケメンだ。

ローイ「なんだ？女の子と出かけたか？」

僕「ああ、実はそうなんだ。」

ローイ「マジで!?!冗談半分で聞いてみたんだけどw」

僕「ああ、マジだ。まさか幼馴染み以外の女の子と出かける日が来るとは思ってたな
かったわ。」

ローイ「んで、どこに行こうとしてるんだ?しぐにやんったら車バカだからまさか峠
を攻めに行こうとか考えてないよな?」

僕「さすがにそれは考えてないわwこの前は真夏だったから幼馴染みを連れてプール
に行けたけど今回はそうもいかないしなあ…」

ローイ「お前、実は意外とモテてるだろ…?」

僕「いやいや、その幼馴染みは半分妹みたいなもんだから。」

ローイ「でもその幼馴染みと7年も離れてからの再会したんだろ？それだけの時間があれば女の子って変わってるもんだぞ？」

僕「確かに、色々変わってたけど…」

ローイ「はあ…こいつわかってねーな…」

僕「？」

ローイ「まあいいや、そのうちわかる日が来るだろ…でだ、女の子と出かける場所のネタだっけ？」

僕「??…うん、どこに行ったら女の子は喜んでくれるかが分からないんだ…」

ローイ「女の子の希望は聞いたのか？」

僕「まかせるってさ…」

ロイー「おう…すぐにゃんにはハードル高いな…」

僕「だろ？どこかい所ないかなあ…」

ロイー「うーん…あ、そういえば事務所に遊園地の割引券があったしそこかいんじやない？」

僕「マジか！確認してみる！ロイー、サンキュー！」

ロイー「おう、がんばれよ！」

僕はさっそく事務所に遊園地の割引券があるかを確認しに行った。

……

……

……

お？あったあった♪チラシ付きの割引券だ。ということで頂いちゃいましょう！
ローイ、マジでサンキューー！

9月19日――。

遊園地の割引券、財布、鍵、ハンカチ持った。よし、忘れ物はなさそうだ。車のガソリンも昨日のうちに満タンにしておいてよかった。さて、待ち合わせ時間に遅れないように梨子ちゃんを迎えに行くか。

……

……

……

梨子ちゃんの家に着。到着してすぐに梨子ちゃんともう1人女性の方が家から出てきた。その女性は梨子ちゃんのお母さんかな？1度車から降りて挨拶しておこう。

梨子「祥くんおはよー！車の音ですぐに祥くんが来たってわかったわ。」

僕「おはよう、梨子ちゃん。それと……」

梨子母「あ、私は梨子の母です。あなたが祥一さんなのね。いつも梨子がお世話になってるわ。」

僕「はじめまして、時雨 祥一です。こちらこそいつも梨子さんにはお世話になっております。」

梨子母「梨子の初めての男の子のお友達、いい人そうで安心したわ。これからも梨子のことよろしくね。」

僕「はい、こちらこそよろしくお願いします。」

梨子母「じゃあ、気をつけて行ってきてね。」

僕「はい、行ってきます。」

梨子「お母さん、行ってきます。」

梨子ちゃんのお母さんとの挨拶を済ませ、僕たちは遊園地に向かうとした。

梨子「ねえ様くん？今日はどこに連れていってくれるの？」

僕「うん、ここの遊園地に行こうと思ってるけどどう？」

ちょうど信号待ちのタイミングだったのでチラシ付きの割引券を梨子ちゃんに渡す。

梨子「いいねえ♪行きたい！」

僕「よかった！」

その後、移動中の車内での会話の内容は僕と千歌、曜との過去のこと、梨子ちゃんの学校のことについての話をした。話をしているうちにあつという間に遊園地に到着した。

梨子「運転おつかれさま♪」

僕「ありがとう。さあ、行こう。」

受付でチケットを買って中に入る。割引券のお陰で通常よりも安く入れた。

僕「まずはどこからまわろうか？」

梨子「そうね…絶叫系がいいな！」

僕「わかった、じゃあアレに乗ろうか。」

僕は高低差が激しいジェットコースターを指さした。

梨子「うん♪」

。

ジェットコースターを乗り終え、降り口の所で写真がモニターに写し出されていたので自分たちを探してみた。

僕「あはは！梨子ちゃんすごい顔してるよ！」

梨子「もぉー！笑わないで〜！」

梨子ちゃんはやっと恥ずかしがってたけどその写真を購入した。梨子ちゃんにも欲しいか聞いてみたけど「恥ずかしいからいらない！」って言われたので一枚だけ購入した。

僕「次はどこにいこうか？」

梨子「うーん、ゴーカートにしない？私、運転したいわ。」

僕「OK！」

この後は梨子ちゃんと話し合ってこのような順番で回るようになった。

ゴーカート

←

おぼけ屋敷

←

メリーゴーランド

←

空中ブランコ

←

観覧車

【ゴーカート】

僕 「梨子ちゃん！アクセルを抜いて！ぶつかる！」

梨子 「いやよ！もう少しで前の車を抜かせそうなのよ！」

僕「速く走るためには（ガンッ！）アクセルを抜くことも（ゴンッ！）重要だあああ
あああああ!!（ガンッ！ガンッ！ガンッ！）」

どうなったかは察してくれ…

梨子ちゃんが免許を取ったら運転を教えなきやダメだと思つた僕であつた…

【おばけ屋敷】

僕「（暗いけど視界は結構いいな…街灯がない夜道よりは見やすいかな。それよりもこの部屋暑い…）」

梨子「ね、ねえ…ちよつと歩くの早いよ…」

僕「あつ、ごめん！慌てなくていいよ！」

梨子「もう…怖いんだからあ…」

さつきから梨子ちゃんは僕の服を掴んでる状態だ。それはいいけど…僕、汗とか大丈夫かな…

オバケ「ゴオー！」

僕「おおっ!？」

梨子「きやあ！（ガシツ！）」

オバケに驚いた梨子ちゃんが不意に抱きついてきた。ヤバい…梨子ちゃんのおっぱいが当たってるんですけど…／＼／＼それでも不思議と下心は湧かなかつた。それよりも自分の汗が梨子ちゃんに嫌な思いをさせてないかを心配してた。

この後、おっぱい屋敷を出るまで梨子ちゃんは抱きついたままだった。よっぱど怖かったんだな。

。

おばけ屋敷を出て、梨子ちゃんが僕から離れたタイミングで次のアトラクションにむかおうとしたら今度は手を握ってきた。

梨子「ねえ…手、繋いでもいい…？」

上目遣いで泣きそうな表情で呟いた。まだ怖いのかな。

僕「うん。」

僕が了承すると梨子ちゃんは安心した表情に変わった。やっぱり怖かったんだ。

手を繋いだ状態で次のアトラクションまで向かっていると1人で大泣きしている小さな男の子と遭遇した。周りの人間は誰も見向きをしないし、放っておけなくなつたので目線を合わせて声を掛けてみた。

僕「ぼく？どうしたの？」

男の子「うう…お母さんと…えつぐ…はぐれちゃったのお！」

僕「そつか。じゃあお母さんに会えるようにしないとね。」

男の子「お母さんに…えつぐ…会えるのお…？」

僕「うん、そのためにはお兄ちゃんについてきて欲しいんだ。」

うわあ…自分で言っておいてなんだけどなんか誘拐犯みたいだわ…

僕「梨子ちゃん、ここの地図見せてもらえる？」

梨子「あ、うん。はい。」

僕「ありがとう。ええつと…迷子センターは…ここか。で、今いるのが…ここだから…」

梨子「祥くん？」

僕「梨子ちゃん、大丈夫だよ。もうわかったから。ぼく、いこう？あ、お兄ちゃんは
時雨 祥一っっていうんだ。」

梨子「お姉ちゃんは桜内 梨子よ。」

男の子「祥一お兄ちゃんに梨子お姉ちゃん。ぼくはゆうやだよ！」

僕「ゆうやくん、いこっか？」

ゆうや「うん！」

僕がゆうやくんの右手を繋いであげると、梨子ちゃんがゆうやくんの左手を繋いであ
げていた。なんかこの光景は幸せな家族のように見えてちよつと照れくさい。そう思
いながら迷子センターまで歩いていると…

ゆうや「ねえ、祥一お兄ちゃんと梨子お姉ちゃんって付き合ってるの？」

梨子祥一「ブツッ！」

ガキンチョに思わぬことを聞かれふたりして吹き出しちゃいましたw

ゆうや「あ、吹き出したw」

僕「突然変なこと聞くからだよ！」

ゆうや「えー。だってお兄ちゃんとお姉ちゃん、さつきまでずっとおててつないでたし、おばけ屋敷から出てきたときなんてお姉ちゃん、お兄ちゃんに抱きついてたじゃん。」

まさかおばけ屋敷から出てきたところを目撃されたとは！梨子ちゃんなんかゆうやくんの手を離して両手で顔を隠しちゃってるし。

ヤバイ、かわいい…

僕「お兄ちゃんとお姉ちゃんをからかっちゃいけません！まあ答えを言ってしまうと僕たちは付き合っていないよ。お友達同士だよ。」

ゆうや「そっかあ…」

梨子「むう…」

あれ、梨子ちゃんが膨れてる。なにか怒らせるようなことしたかな…？

その後、梨子ちゃんは再びゆうやくんの左手を繋いだ所で迷子センターまで歩くことを再開した。

く梨子 Side く

ゆうやくんに変なことを聞かれた挙句におばけ屋敷から出てきたところを目撃されてたなんて…ああ…思い出しただけでも恥ずかしい…／／／
でも祥くんが「付き合っていない」って言ったときはちよつと残念だったなあ…確かに

付き合つてはないけどそこは付き合つてゐることに…

ああ！私つたら何考えてゐるのかしら！／＼／

そんなことを考えてゐるうちに迷子センターに到着した。祥くんが係員さんに事情を説明している間に私とゆうやくんは少し離れた場所で待つた。するとゆうやくんが話しかけてきた。

ゆうや「ねえ、梨子お姉ちゃん？」

梨子「なーに？ゆうやくん。」

ゆうや「梨子お姉ちゃんつて祥一お兄ちゃんのことが好きなの？」

梨子「えっ…／＼あつ…／＼えつと…／＼／

ゆうや「ねえ、そうなの〜？」

この子つたらもう〜！もうバレちゃつてるかもしれないし、言っちゃおう！

梨子「うん、お姉ちゃんは祥一お兄ちゃんのこと好きだよ／＼」

ゆうや「やっぱり。」

梨子「ねえ、もういいでしょ：／／」

ゆうや「うん、それを知ったから満足した。」

ゆうや「僕ね、さっきお姉ちゃんたちと歩いてる時に思ったんだ。」

梨子「？」

ゆうや「お兄ちゃんとお姉ちゃん、何となくパパとママに雰囲気か似てたんだ。2人とも優しいし仲良しだし、これからもずっと一緒に居そうな感じがしたんだ。」

梨子「そ、そうなの？／／」

ゆうや「うん、なんとなくだけどね。」

まさか私が祥くと…／＼／＼いや、子どもが言うことって意外と当たってることとかあるし…でもね…／＼／

ガチャッ

突然扉が開き、20代前半ぐらいのご夫婦が現れた。

ゆうや「パパ！ママ！」

夫婦「ゆうや！」

ゆうや「パパー！ママー！」

ゆうや母「もう！心配したんだから！」

ゆうや父「よかった！よかった！」

どうやらそのご夫婦はゆうやくんのご両親だったみたい。ご両親が無事に見つかってよかったと思っっていたら祥くんが私の隣に戻ってきた。

祥一「無事に会えてよかった。」

梨子「うん。」

祥くんはまるで兄のように優しい笑顔をしていた。

く祥一 Sideく

ゆうやくんのご両親にお礼を言われ、そろそろ迷子センターからお暇しようと思ったところでゆうやくんが声を掛けてきた。

ゆうや「ねえ祥一お兄ちゃん。耳貸して？」

僕「うん？」

ゆうや「梨子お姉ちゃんのこと、大切にしてあげてね。」（ヒソヒソ）

僕「おう、もちろんだ！」

ゆうや「約束だよ？」

僕「ああ、漢同志の約束だ！」

ゆうやくんと僕は熱い指切りをした。

僕「それでは僕たちはそろそろお暇しますので。梨子ちゃん、行こう？」

梨子「あ、うん！」

夫婦「本当にありがとうございました！」

僕 「いいえ。ゆうやくん、もうはぐれるなよ。」

ゆうや 「うん！ありがとう！祥一お兄ちゃんと梨子お姉ちゃん、バイバーイ！」

梨子祥一 「バイバーイ！」

さてと、次のアトラクションに行こうか。時間は…マジか…この時間だとアトラクションは1つしか行けないな。

僕 「もう時間的にあと1つしか回れそうにないね…」

梨子 「そうね。」

僕 「梨子ちゃん、ごめんね。」

梨子 「なんで謝るの？」

僕「だってあの時……」

梨子「私ね、あの時祥くんがゆうやくんに声かけたときやっぱり優しい人だなんて思ってたんだよ？」

僕「なんというか、単に放っておけなかったんだ。」

梨子「やっぱり優しいわよ。出会ってそんなに経ってない頃、祥ちゃんと千歌ちゃんが優しくしてくれてすごくうれしかったのよ。」

僕「ほとんどは千歌がやった事だよ。僕はあんまり気の利いたこと出来た気がしないけど……でもありがと……／＼／＼」

梨子「照れちやつて♪それより最後のアトラクションだけど、観覧車に行きたいな！」

僕「うん、行こっか！」

【観覧車】

僕 「景色がキレイだね。」

梨子 「ええ。」

梨子ちゃんと僕は対面に座って観覧車から外の景色を眺め、あそこはアレかなとかあの辺に何があるのかなとか話していた。

僕 「お？もうすぐ頂上かな？」

梨子 「そうね。…祥くん？」

僕はカバンから事前に用意しておいた梨子ちゃんの誕生日プレゼントを取り出す。

僕 「はい、梨子ちゃん。お誕生日おめでとう。」

梨子「えっ？も、もらつていいの…？」

僕「うん。」

梨子「あ、ありがとう…／＼／＼うふふ♪開けてみてもいい？」

僕「うん、いいよ。」

梨子ちゃんがプレゼントを開けるとそこからは音符のネックレスが出てきた。気に
いってくれるといいけど…

梨子「わあ…♡」

僕「どう？気に入ってくれた？」

梨子「うん！」

梨子ちゃんはそのネックレスを着け、カバンから手鏡を出してネックレスをつけた自分の姿を眺めてはずっと嬉しそうな表情をしていた。

その光景を見てた僕はつい微笑んだ表情で梨子ちゃんをずっと眺めていた。すると対面に座っていた梨子ちゃんが僕の隣に座った。

僕「り、梨子ちゃん？／＼／＼」

梨子「うふふ♪」

梨子ちゃんが嬉しそうな顔をした状態で僕の肩に頭を預けてきたので僕はつい梨子ちゃんの頭を撫でた。

梨子「んっ：／／／」

僕「あっ？ごめん。嫌だった…？」

梨子「ううん、いいの。続けて…？」

僕「わ、わかった。」（ナデナデ）

梨子「えへへ、こうしてもらってると安心する…」

僕「そ、そっか。」

梨子「祥くん？」

僕「うん？」

梨子「…（大好きだよ…♡）」

僕「えっ…？」

梨子「なんでもありません♪」

梨子ちゃんが最後に言ったセリフがすごく気になって聞き直したけど話してくれなかった。でもすごく嬉しそうな顔をしてるので今は梨子ちゃんを撫で続けるとしよう。

黒澤ルビイ誕生日記念

9月20日――。

僕「スイーツビュツフエ？」

ローイ「ああ、ペア招待券があるんだけど行かないか？」

僕「僕はいいけど…彼女と行かなくていいのか？」

ローイ「あいつ、今実家に帰ってるんだ。いとこの結婚式があるんだってよ。」

僕「なるほど、それで僕と行こうかと…」

ローイ「いやいや、男2人でなんか行きたくねーよwお前最近女の子と出掛けるからもらってこないかなって思ったんだよ。」

僕「確かに：男2人でスイーツバイキングは絵面が悪いな：wでもマジで貰っちゃつていいの？」

ローイ「ああ、俺が持つてても紙切れになる運命だろうしな。」

僕「それは勿体ないな：じゃあ貰っちゃつていいか？」

ローイ「おう！行ったらどうだったか教えてな！」

僕「サンキュー♪」

さて、そのスイーツビュッフェはいつどこでやってるのかな？

場所は：あそこのホテルか。それほど遠くないからいいね。日付は：9月21日限定か。って明日じゃねーかよ！wペアだから1人しか誘えねーし。はあ、誰を誘うか悩むな。この際あみだくじで決めるか：？

スマホ「LONE♪」

ん？スマホにLONEが届いた。誰からだろ？

ダイヤ「祥一さん、明日は何か予定ありますか？」

僕「うん、同期から明日限定のスイーツbuffetの招待券をもらったから誰かに声をかけようかと思ってたんだ。ダイヤちゃん、一緒に行くか？」

ダイヤ「でしたらルビイと行ってきてもらえますか？明日、ルビイの誕生日なので。」

僕「マジか!?!なら誘ってみるよ！」

ダイヤ「よろしくお願いします。」

マジか。明日はルビイちゃんの誕生日か。だったらルビイちゃんを誘った方がいいよな。さて、LONE送ってみるか。

僕「ルビィちゃん、明日って空いてる？」

さて、返事は来るかな？ っつて早っ！ もう返事きたよw

ルビィ「うん、空いてるよ。」

僕「スイーツビュツフェの招待券があるんだけど、ルビィちゃん一緒に行かない？」

ルビィ「行く!!」

僕「じゃあ明日13時頃に迎えに行くけどいいかな？」

ルビィ「うん！ 楽しみにしてるね♪」

よかった。喜んでくれてるみたいだ。

9月21日――。

財布、スマホ、ハンカチ、キー、招待券持った。服装は白いシャツに黒のジャケットで行けば問題ないべ？さて、ルビイちゃんを迎えに行くか。

……

……

…

ルビイちゃん家の前に到着すると既にルビイちゃんが外で待っていた。というかダイヤちゃんも一緒にいた。僕は車の窓を開けて話しかけた。

僕「よっ！お待たせ！」

ルビイ「ううん、さつき出たところだから大丈夫だよ。」

ダイヤ「祥一さん、今日はルビイのことよろしくお願いしますね。」

僕「うん。さあ、ルビイちゃん。乗って。」

ルビィ「うん！」

ダイヤ「ルビィ？あんまり食べすぎてはいけませんよ？」

ルビィ「うん。」

ルビィちゃんが車に乗り込み、シートベルトをつけたのを確認して車を走らせる。

ルビィ「〜♪」

僕「ルビィちゃん、今日はいつもよりごきげんだね？」

ルビィ「だってお兄ちゃんとかうしてお出かけするの滅多になかったんだもん。だからすっごく楽しみだったんだ♪」

そういえばそうだったけ？

確かに考えてみたらルビイちゃんと会うことなんて母さんに連れられて黒澤家に行つた時ぐらいだつたな。それぐらいいしかルビイちゃんとは会つてないのにこれだけ懐いてくれるとか……ルビイちゃんまじえんじえー。

ルビイ「うゆ……お兄ちゃんはルビイといて楽しい？」

僕「うん、楽しいよ。」

ルビイ「そっか、えへへ……♪」

実際、ルビイちゃんと一緒にいるのは楽しい。というか僕がなにかしてルビイちゃんが笑ってくれる、それが見れるだけでお兄ちゃんうれいんです。

その後、ルビイちゃんと学校のことやマルちゃんの話をしていくうちに目的地に着した。

ルビイ「運転おつかれさま。」

僕「ありがとう。」

ホテルに入り、受付を済ませてからスイーツビュッフェの会場に入場するともうこれでもかというほどたくさん種類のスイーツが並んでいた。

ルビィ「わあ…♡」

僕「たくさんあるねえ。早速取って食べようか。」

ルビィ「うん！」

ルビィちゃんと僕は早速目の前に並べられたたくさんのおスイーツを取っていく。正直甘いものはそれほど好きではないけどそれでも食欲がそそられてきた。

僕「さてと、まずはこれぐらいいいかな。ルビィちゃ…ん…？随分とつたね…それにしてスイーツポテトだけで何種類もあるんだね。」

ルビィ「いや、どれも美味しそうだしスイートポテトは全種類食べたからついで……」

僕「そっか、ルビィちゃん確かスイートポテト好きだったもんね。まあとりあえず席について食べよう？」

ルビィ「うん！」

僕とルビィちゃんはスイーツを持って席につく。2人席なので僕とルビィちゃんは対面に座った。

2人「いただきます！」

2人でそれぞれとったスイーツを食べ始める。まずはプリンから食べようかな。もぐもぐ……うん、うまい。それほど甘さが主張してなくてこれならたくさん食べれそうだ。

ルビィ「あ、お兄ちゃんのそのプリン美味しそう…」

僕「これか？甘味も絶妙で食感もとろけるような感じでおいしいよ。」

ルビィ「うゆ…ちよつと食べてみたいな…／／／」

僕「ああ、いいよ。」

ルビィ「あゝん。」

え？ルビィさん、マジっすか…

ルビィ「うゆ…お兄ちゃん？」

僕「ほら、あゝん。」

ルビィ「ぱくっ…おいしい…／／／」

僕「だろ？ちよつと病みつきになつちやうかも。」

ルビイ「もつとちようだい：／＼／」

僕「うん、あゝん。」

ルビイ「ばくつ…えへへ…おいしい♡」

このやりとりはプリンがなくなるまで続いた。そのプリン、1口しか食べれてないのはここだけの話だ（・ω・）

まあいいかと思いつつ僕は次のスイーツ、ババロアを食し始めた。うん、これもうまい。このこのスイーツ、マジで病みつきになりそうだわ。そう思いながら食べていると：

ルビイ「うゆ…お兄ちゃん、それもちよつとちようだい：／＼／」

僕「いいよ。ほら、あゝん。」

ルビィ「あ〜ん。もぐもぐ…これもおいしいね…／＼／＼」

このババロアもさっきのプリン同様、僕は一口しか食べれなかった（・ω・）

――。

スイーツbuffエを満足するまで楽しめた2人はホテルを出てからアウトトレットモールに向かうことにした。その車内にて――。

ルビィ「お兄ちゃん、ごめんね。ルビィ、お兄ちゃんのスイーツほとんど食べちゃった…」

僕「いいよ。ルビィちゃんが嬉しそうに食べてた姿を見ただけで満足だよ。」

ルビィ「うゆ…／＼／＼」

ん？照れてるのか？そのとき僕は運転中だったためルビイちゃんの顔を見ることが出来なかった。

アウトレットモールに到着――。

僕「やっぱりここはいつも混んでるな…」

ルビイ「はぐれないように気をつけないと…」

僕「だな。」

ルビイ「あの…お兄ちゃん…？」

僕「ルビイちゃん？」

ルビイ「手…つないでもいい…？」

僕「いいよ、ほら？」

ルビィ「えへへ：／／／」

逸れてしまわないようにルビィちゃんの手を握った。優しくかつしつかりと。その状態でアウトレットモールを回ること数分、ルビィちゃんの目を引くものがあつたようだ。

ルビィ「わあ、これかわいい♡」

そこにはネックレスやイヤリング等、色々なアクセサリーがあつた。こういうのってキャンディーアクセサリーって言うのか？女の子用のはよくわからないや。

店員「このアクセサリー、かわいいですよね。この子に似合うと思いますよ♪」

僕「そうですね、僕もそう思います。」

店員「今日はデートですか？」

僕「まあ、そんなところです。」

ルビィ「どうしよう、どれがいいかな〜♪」

ルビィちゃんはどうやらアクセサリーに夢中になっていて僕と店員さんの会話は聞いていないようだ。

僕「ルビィちゃん。」

ルビィ「なーに、お兄ちゃん？」

僕「気に入ったの1つ、買ってあげる。」

ルビィ「ええ！いいの!?!」

僕「うん、好きなの選んでいいよ。」

ルビィ「やった、ありがとう♪」

店員「おお！彼氏さん、かっこいい♪」

僕「なっ！／＼／＼」

ルビィ「ぴ…」

あ、まずっ！周りに人もたくさんいるしヤバい！こういう時は確か…
僕はジャケットを脱いで畳んだものをルビィちゃんの顔にあてた。

ルビィ「ピギヤアアアアアアア!!」

僕「うっ！」

なんとか僕のジャケットでルビイちゃんの叫び声を抑えられたおかげで周りにはあまり迷惑かからなかった。店員さんは驚いた顔をしてたけど（笑）

……

……

……

僕「すみません、驚かせちゃって。」

ルビイ「すみません……」

店員「あ、いえ！お気になさらず！どうぞ、アクセサリー見ちゃってください（汗）」

ルビイ「あ、はい！」

こういうことがあってもアクセサリーを見ていってと言ってくれる店員さんスゲエっす。

ルビイちゃんが再びアクセサリー選びに夢中になると店員さんが僕に話しかけてき

た。

店員「彼女さん、結構シャイなのですね…」

僕「ええ、まあ…そうっすね…」

そういう会話をしているうちにルビィちゃんの欲しいものが決まったようだ。

ルビィ「ルビィね、これがいい！」

僕「おう！あ、すいませーん。お会計お願いします！」

店員「はい、かしこまりました！えっと、6000円になります。」

僕「はい！」

お会計を済ませ、そろそろ帰らないと遅くなるので車に乗り込んだ。

ルビィ「お兄ちゃん、ごめんね。叫んじやったり高いもの買ってもらっちゃったりして…」

僕「うん、叫んだのはビックリしたけど…ものについてはいいよ。今日はルビィちゃん誕生日なんだし。」

ルビィ「えっ?」

僕「ルビィちゃん、誕生日おめでとう。これは僕からのプレゼントだよ。」

ルビィ「お兄ちゃん…ありがとう♪ルビィ、大事にするね!」

僕「うん!」

その後、帰りの車内ではルビィちゃんは眠っていた。

ルビィ「すう…すう…」

僕「(チラツ) かわいいなあ…」

運転中でしつかりは見えないので一瞬だけルビィちゃんの方を見た。ルビィちゃん
の寝顔を見て思わずそう呟いた。

赤信号で止まった直後…

ルビィ「…祥兄ちゃん…大好き…♡」

僕「えっ!？」

不意の発言にびっくりしてルビィちゃんの方を向いてしまう。

ルビィ「すう…すう…」

僕「寝言か。」

一瞬ドキツとしてしまった。寝言だけどルビイちゃんに「大好き」って言われたので僕はルビイちゃんの頭をなでた。

僕「ありがとう、ルビイちゃん。」

横で眠る天s…もといルビイちゃんの頭を撫でると寝ているのにちよつと嬉しそうな表情に変わっていた。

黒澤ダイヤ誕生日記念

大晦日――。

この次期になると大掃除とか大掃除とか大掃除とかで忙しい。なんか大掃除で年末を感じるなんてアレだなwちなみに僕は掃除が苦手だ(笑)

僕「つてそれはさておき、明日はダイヤちゃんの誕生日だしプレゼントを買いに行かねーと。」

大掃除を無理やり終わらせた僕は沼津まで車を走らせ、ダイヤちゃんへの誕生日プレゼントを買いに行った。なお、プレゼントを買ってからは夕飯時に黒澤家にお邪魔して食事を済ませ、年が明ける時間に間に合うようにダイヤちゃんとお寺に行くという段取りである。

え？年末年始なのに実家に帰らないのかつて？帰らない帰らないwというか親父と母さんが内浦まで出てくるってさw今日は黒澤家に時雨家3人でお泊まりする予定な

のはここだけの話w親父も母さんも僕の家に泊まらないのかって？だって黒澤さんが泊まつてつてよつて言つてくれてるし酔った親父を僕の家まで運ぶのも大変だからね（笑）さて、そういうしているうちに時間になった。そろそろ黒澤家に向かうとしますか。

黒澤家に到着

僕「おつす！ダイヤちゃん。」

ダイヤ「祥一さん、いらっしやい。優海さんと春樹さんはもう既に到着しておりますわ！」

僕「え」つ？マジか…もしかして…うちの親父、もう呑んでる…？」

ダイヤ「ええ、しつかりと！」

マジかよw親父たちがもう到着してるって聞いた瞬間嫌な予感がしてたけどやっぱ
り飲んでやがったかw

まあいいや、とりあえず上がろう…

母「祥一！久しぶりね！」

僕「母さん、久しぶり。それと…」

親父「しよおいちう！久しぶりだなあ！ほら、パパの隣に座って呑め！」

僕「親父、久しぶり。いやいや、僕まだ未成年だから！」

その後、黒澤家のみなさんと時雨家全員で食事をいただいた。会話の内容は主に黒澤
母と母さんの学生時代のことだったり、酔った親父が「祥一は全然彼女を作らない」と
か愚痴り出して、それに母さんが便乗してって感じだった。拳句の果てには黒澤父が
「うちのダイヤはどうだ？ルビィはどうだ？」とか聞いてくるしさwちなみにその時、ダ
イヤちゃんとルビィちゃんはピギってたw

酔ったオツサン共の相手をしているうちにそろそろお寺に向かう時間になった。

僕「ダイヤちゃん、そろそろ行こうか？」

ダイヤ「はい、参りましょう。」

親父「しよおいちい？ろこへ行くんらア？」

僕「近くのお寺、てか親父！呂律が回ってないよ！」

親父「いつもと一緒らア！しっかりレエトしてこい！」

ダイヤ「ピギヤツ！／＼／＼」

僕「いやいや、全然違うから！ダイヤちゃん、行こう！」

ダイヤ「むう…」

僕「ダイヤちゃん？」

ダイヤ「なんでもありません！ほら、行きますわよ！」

ダイヤちゃんは僕の腕を強く握り引つ張つて家を出ようとした。

僕「ちよつ！ダイヤちゃん！痛い痛い！いつてきまーす！」

騒がしいオツサンを振り切った僕たち（というかダイヤちゃんが振り切ったw）はお寺までの道をゆっくりと歩いた。

僕「ダイヤちゃん、ごめんね。うちの親父が変な事言っちゃって。」

ダイヤ「い、いや…べ、別に…き、気にしてませんわ…／／／」

僕「そのわりには声が震えてない？」

ダイヤ「さ、寒さのせいですわ！／＼／＼」

たしかに冬の夜は寒い。僕は黒のチェスターコートと赤いチェツクのマフラーの下に4枚ぐらい着てるからわりと平気だ。ダイヤちゃんはコートはもちろん着ているけどちよつと寒そうだった。まあマフラーは無くてもまだ平気だし、僕はマフラーを外してダイヤちゃんに渡した。

僕「ダイヤちゃん、マフラーだけど僕のでよければ貸そうか？」

ダイヤ「えっ？でもしたら祥一さんが…」

僕「僕なら大丈夫だよ。下に何枚も着てるからね。」

それでもダイヤちゃんは一瞬ためらったけど結局受け取ってくれた。

ダイヤ「では…お借りしますわ…／＼／＼」

マフラーを受け取ってくれたダイヤちゃんは早速巻いていた。赤いチエツクだからダイヤちゃんが着けていても違和感がない。というか僕よりも全然似合ってる。

ダイヤ「しよ、祥一さん…あんまり見られると恥ずかしいですわ…／＼／＼」

僕「あつ、ゴメン！似合ってたからつい…」

ダイヤ「まったく、感心しませんわね／＼ほら、行きますわよ！」

僕「う、うん。」

ダイヤちゃんに怒られてしまったw

………

………

………

さあ、お寺についた。新年まであと数分、甘酒が振舞われてるしいただいちゃいます

か。

僕「ふう、暖かくておいしいなあ。」

ダイヤ「そうですわね。ところで、なんでルビイは誘わなかったのです？あの子、いじめますわよ。」

僕「あー、ルビイちゃんなら平気。ちゃんと理由を話したら納得してくれたから。その理由はじきにわかるよ。」

ダイヤ「？」

僕「お？もうちよつとで年が明けるね？」

ダイヤ「ええ、そうですわね。」

僕「ねえダイヤちゃん？」

ダイヤ「はい？」

僕「年が明けるまでカウントダウンしない？それで年が明けたらあいさつしよ？」

ダイヤ「別に構いませんわよ？」

僕「よし！」

ダイヤ「ふふっ。」

僕「？ダイヤちゃん？」

ダイヤ「祥一さんのそういうちよつと子どもっぽい所、昔と変わりませんわね。」

僕「こ、子どもお？」

確かにダイヤちゃんは僕よりも大人っぽいところはあるけど、でも子どもっぽいつて言われるとそれはそれで傷つくな（泣）

ダイヤ「あ、そろそろカウントしますわよ。」

僕「うん！」

ダイヤ&僕「10、9、8、7、6、5…」

年明けのあいさつの内容は既に決めている。

ダイヤ&僕「4」

一般的な年明けのあいさつをしようとは思っていない。

ダイヤ&僕「3」

年が明けるよりも目の前にいる子の誕生日を祝福したい。

ダイヤ&僕「2」

そう、僕にとっては…

ダイヤ&僕「1…」

こっちの方が大切だから…

ダイヤ&僕「あけましておめでとうございます。（誕生日おめでとう、ダイヤちゃん。）」

ダイヤ「ちよつ、祥一さん！」

僕「いやあ…だって、今日はダイヤちゃんの誕生日じゃん？新年の挨拶もだけど僕にとってはダイヤちゃんの誕生日の方が大切だし…へへへ…」

ダイヤ「…まったくもう、祥一さんつたら…／／／」

そういうわりにはダイヤちゃんは嬉しそうな顔をしていた。

僕「それと、はい。誕生日プレゼントだよ。」

ダイヤ「ありがとうございます…／＼／＼」

僕「どういたしまして♪気にいってくれるといいけど。」

ダイヤ「では早速開けさせていただきますわ。」

ダイヤちゃんはプレゼントの袋を開けた。プレゼントは髪飾りにした。その髪飾りを見たダイヤちゃんは嬉しそうな顔をしながら髪につけていた。

ダイヤ「あの…似合ってますか…／＼／＼」

僕「うん、とても似合ってるよ。」

ダイヤ「うふふ、ありがとうございます。」

その後、ダイヤちゃんと僕はお寺の鐘をついてから来た時と同じ道で帰ろうとした。

ダイヤ「あの…祥一さん…？」

僕「うん？」

ダイヤ「少し、寒く無いですか…？」

マジか！貸せるような服着てたかな!? ええつと…ええつと！

僕「マジ!? 寒い!? ええつと…! 僕のコートでよければ着る?」

ダイヤ「ふふつ。そんなことしなくても…」

ギユツ

ダイヤちゃんが僕の左半身に密着してきた。

僕「だ、ダイヤちゃん!?!?!」

ダイヤ「こうしていれば、暖かいですわ…?!?!」

僕「そ、そだね…?!?!」

コート越しに感じるダイヤちゃんの温もりプラス心拍数が上がったのか寒さは全くと言っていいほど感じなくなった。

ダイヤ「うふふつ、大好きよ。祥一くん…♡」

僕「えっ?」

ダイヤ「なんでもありませんわ♪」

聞き取れなかったというのになぜかご機嫌なダイヤちゃん。その後、黒澤家に戻るま

でダイヤちゃんと密着した状態でいたら、ルビィちゃんに目撃されて新年早々初ピギイを喰らったのであった。

松浦果南誕生日記念

数日前――。

僕「およ?」

仕事から帰宅し、ポストの中身を確認してみたらみとしーの広告が入っていた。どうやら2月10日にうちっちーとのふれあいイベントがあるらしい。

僕「へえー。おつ?今はみとしーにカワウソもいるんだ。」

うーん、久しぶりに行きたくなくなってきたなあ。でも1人で行くのもアレだし、かと言つてローイを誘つて野郎2人で…つてちよつと絵面が悪いわw

：

あつ、2月10日といえばあの子の誕生日じゃん!よし、あの子を誘うべ!

ピツポツパツ

プルルルル…
ガチャツ

果南「はい、もしもし？」

僕「もしもし？果南？僕だけど？」

果南「あつ、祥？どうしたの？」

僕「2月10日だけどみとしーに行かない？その日にうちっちーとのふれあいイベントがあるみたいなんだ。」

果南「おつ？いいねえ♪行きたい！」

僕「じゃあ10時にみとしーの前でいいかな？」

果南「うん。楽しみにしてるね♪」

よし。約束もできたし、誕生日プレゼントを買いに行きますか！

2月10日

財布、スマホ、ハンカチ、キー、プレゼント持った、よし。ちよつと早いけどみとしー
に向かいますか！

……

……

……

やつぱりちよつと早く着いちゃったw

つてマジか!?! 果南がもういるんだけど！果南を見つけた僕は思わず駆け寄った。

僕「果南！ごめん、待った？」

果南「ううん、さつき着いたところだから大丈夫だよ！」

僕「よかった。それにしても、まだ待ち合わせ時間になってないのに既に果南がいてビビったよ。」

果南「だって楽しみだったんだもん！そう言う様だって待ち合わせ時間前に来てるじゃん？」

僕「そりゃあ、僕だって楽しみだったから……。」

果南「あはは。私たち、そういうところちよつと似てるね！さ、中に入る？」

僕「うん！」

僕たちは入場券を購入し、中に入った。みとしーは入場ゲートを通った先に長い下り坂があり、下り坂終盤のところで記念写真を撮ってもらえる。

果南「あ、ほら。私たちの番だよ！」

僕「うん。」

係員「はい。ではこちらに並んでくださーい。」

係員さんが指定した場所に果南と僕は並んだ。流石に集合写真とかではないので直
立で撮ろうとは思わないけどどんな格好で撮るか正直思いつかないwそう思っている
と…

果南「えいっ♪」

僕「!」

果南が僕の腕に抱き着いてきた。あの…その…柔らかいものが当たってるのですが
…w

果南「写真お願いしまーす♪」

係員「はい、じゃあいきまーす！はい、チーズ！」

パシヤツ

思わず僕は恥ずかしくなってあさつての方向を向いてしまった。

係員「はい、では出口付近のこの番号の所に写真を立てておきますのでご購入お願いしまーす♪」

果南「はい、ありがとうございます♪」

僕「あ、ありがとうございます（苦笑）」

果南は係員さんから番号札をもらうとふくれっ面で僕の方を向いた。

果南「なんでそっぽ向いたのー？」

僕「あ、いや…なんか、恥ずかしくなって…／＼それに…」

果南「それに？」

僕「なんというか…柔らかいものも当たってたし…（汗）」

果南「っ！／＼／バカッ！忘れるろ〜！／＼／」

果南はボンツと顔を赤くして僕の頭をポカポカと叩いた。

僕「痛い！果南！痛いよ〜！」

――。

それから気を取り直して館内を回った。イベントはもう既に始まっているらしく、割とすぐにうちつちーと出会えた。

果南「あ！うちっちーだ！うちっちー！」

果南はまるで子どものようにうちっちーの元に駆け寄った。子どもの頃に戻ったみたいで懐かしく、可愛かったので思わず……

パシヤツ

果南「えっ？」

僕「あー、つい（笑）なんか子どもの頃に戻ったみたいでなつかしくて……w」

果南「むうー。じゃあ祥も一緒に撮ろう？」

僕「う、うん。」

係員「あ、でしたら私がシャッターを押しますよ。」

僕「お願いします。」

僕は、係員さんにカメラを起動させたスマホを渡した。果南はうちっちーにハグ、僕はうちっちーと肩に手を回すような格好で写真を撮った。係員さんにお礼を言い、スマホを受け取って写真を確認した。

僕「お？ダイブいい感じに撮れてるね♪」

果南「あはは、ホントだ。後でその写真送ってね。」

僕「うん。」

その後はイルカとかのショーを見に行った。

果南「わあー！すっごいジャンプ！あんな所まで届いたよ！」

僕「すっげえ…」

そして終盤にはトドのテ〇マルくんがかわいらしい芸を見せてくれた。

係員「はーい、アツカンベー！」

テ〇マル「べっ！」

果南「あはは！見た？アツカンベーしてるよ！」

僕「見た！あっはっは、かわいいー！」

イルカやテ〇マルくんを見たあと、食事をしつつ果南とこの後どうしようかを話した。

果南「この後、何か見たいものある？」

僕「うーん……あつ、そうだ。カワウソ見に行かない？今みとしーにいるみたいなんだ。」

果南「いいね！行こう！」

というわけでカワウソを見に行つた。

ハツ…！ちよこちよこと動き回つてめっちゃかわいい…！>ω<、*うおっ！こつち見た。やめて！そんなつぶらな瞳で僕を見ないで！脳ミソ溶けちゃうwあー！こつちに来たよ！ヤバい！モフりたい衝動に狩られちゃう！これ以上見てたらマジでヤバい！

果南「しよ…祥…？」(ジト)

この時、果南は僕のことをジト目で見てたみたいだけど全く気づかなかつたw

—。

その後、みとしーを出て松月に向かい、果南と今晚何をするかを話し合つた。

果南「ねえ、祥？今晚、星を見に行かない？」

僕「うん、いいよ。」

果南「やった！」

という流れで今晚、星を見に行くことになった。

夜——。

星を見に行くポイントまでは車で行くことにした。果南のオススメのスポットまでの道がわからないので果南に道案内をお願いした。

僕「なんか、誰かに道案内をしてもらえるっていいな。」

果南「急にどうしたの？」

僕「いや、普段はナビにしか道案内してもらえてないからさ。横に誰かを乗せても道案内してくれる人なんていないし。」

果南「ふうーん。あ、ほら！あそこだよ！」

どうやら果南のオススメのスポットに到着したようだ。車から降りて空を見上げると、そこには一面の星空が広がっていた。

僕「わあ……」

果南「キレイでしょ？ここね、私のお気に入りのスポットなんだ。」

僕「ああ、キレイだ。」

一面の星空を眺めていると普段、仕事とかの関係で悩んでいることがちつぽけに思えてしまう。それぐらい星空がキレイだった。

さて、そろそろ誕生日プレゼントを渡しますか。

僕「果南。はい、誕生日おめでどう。」

果南「えっ？祥？覚えててくれたの？」

僕「もちろん！大事な幼馴染みの誕生日だしね！」

果南「えへへっ♪ありがとう！さっそく開けてみてもいい？」

僕「うん！」

果南は嬉しそうな表情でプレゼントを開けた。

何を買ったのかって？イルカのネックレスにしましたよ。

どうやら果南は気に入ってくれたらしくさっそく着けていた。

果南「どう？似合う？」

僕「うん、とつても。」

それからまたしばらく、果南と僕は星空をながめていた。天文学に関しては全然わからないので果南から色々教わった。その時の果南の目はとつても楽しそうで、輝いていた。

僕「もう遅いからそろそろ帰ろうか？」

果南「そうだね。あ、でもその前に……………」

僕「うん？」

果南「ちよつと…あつち向いてもらっていい…／＼／＼」

僕「う、うん。」

僕は果南に言われたとおりあっちの方を向いた。すると背後から柔らかな感触が……背後からハグされていることがわかった。

僕「ちよ、果南？／＼／＼」

果南「たまにはいいじゃん……／＼／＼」

僕「……／＼／＼」

果南「あのさ……祥がみとしーでカワウソに夢中になった時、ちよつとさみしかったんだよ……？」

僕「えっ？」

果南「だって、まるで私があることを忘れてるかってぐらい夢中になってたんだもん……」

僕「そ、その…ゴメン…」

果南「じゃあさ…ハグして…?／＼／＼」

僕「えっ?／＼／」

果南「何?嫌なの?」(プク)

僕「いや…嫌ってわけじゃないんだけど…／＼／」

果南「じゃあハグして?／＼／」

僕「う…うん…／＼／」

僕は果南の方を向き、ハグをした。ちよつと…いや、ダイブ恥ずかしかったけど、ずっとこのままハグしていたいと思った。

果南「祥、あたたかい…／＼／＼」

僕「果南も、あたたかい…／＼／＼」

しばらく果南をハグしていると恥ずかしさよりも懐かしさが優ってきたので果南の頭を撫でた。ガキの頃もこうして果南をハグしながら頭を撫でたっけ…たまに僕が果南に頭を撫でてもらったこともあったけど（笑）

果南「なんか久しぶりだね、こういうの。」

僕「だね。」

果南「ねえ、祥？」

僕「うん？」

果南「大好きだよ…♡」

僕「えっ？」

果南「なんでもない♪」

それから果南のハグは少し強くなった。その後10分ぐらいお互いにハグをし合っていたら、果南が眠ってしまった。マジか（汗）

さて、起きないように車の助手席までエスコートしないとな…

国木田花丸誕生日記念

数日前――。

仕事から帰った後、僕はマルちゃんのお寺の方面へ散歩をしていた。道中、マルちゃんと会ったためそのままマルちゃんのお寺まで一緒に歩いた。お寺に着いた時、マルちゃんにあることをたずねられた。

花丸「そういえばルビイちゃんから聞いたんだけど祥一くんって車もってるずら？」

僕「うん、持ってるよ？」

花丸「お祓いとかってちゃんとやってるずら？」

僕「いや、やってないけど…？」

花丸「ダメだよ!!」

僕「うわつと!」

突然マルちゃんに「ダメだよ!!」と叫ばれて思わずビククリしてもうたw

花丸「車は命を乗せるものなんだからちゃんとお祓いしないとだめずら!」

僕「は、はい。すいません(・ω・、;)」

花丸「ということでお祓いやるずら! 祥一くん、いつなら都合がつくずら?」

僕「うーん…直近だと3月4日かなあ…?」

花丸「3月4日…」

僕「?マルちゃん?どうしたの?」

花丸「あ、いや、なんでもないすら！ちよつとじいちゃんに確認してくるすら！」

そう言つてマルちゃんはお寺の中に入っていった。数分後、マルちゃんとマルちゃんのおじいちゃんと思われるお坊さんが出てきた。

花丸「祥一くん、OKすら！」

僕「じゃあ3月4日をお願いします！」

マル祖父「はいよ、君が時雨 祥一くんかな？」

僕「はい、申し遅れました。時雨 祥一です。」

マル祖父「ワシはこの寺の住職で花丸の祖父じゃ。いつも花丸が世話になつとるのお。」

僕「こちらこそ、いつも花丸さんにはお世話になっております。」

マル祖父「ほっほっほ。では3月4日、よろしく頼むよ。」

僕「はい、こちらこそよろしくお願いします。」

マル祖父「それと、ちよつと耳を貸しておくれ？」

僕「?はい。」

マルちゃんのおじいちゃんに耳を貸すように言われたので耳を貸した。

マル祖父「3月4日は花丸の誕生日なんじゃ。あの子、君のことが気に入ってるようじゃからお祓いが終わったあとと一緒に遊んであげてほしいのじゃが…」（ヒソヒソ）

僕「はい、僕でよろしければよろこんで。」（ヒソヒソ）

花丸「ふたりとも、何の話をしてるずら？」

マル祖父「なんでもないぞ。それより花丸、その日はお手伝いをしておくれ。」

花丸「わかつたずら！」

という流れで車のお祓いをする事になった。

3月4日――。

さて、のしも用意したしそろそろ行きますか！

僕は車を走らせ、マルちゃんのお寺に向かった。因みに、のしを書くのに緊張して2
回ぐらい失敗したのは秘密だ（笑）

……

……

……

よし、お寺に到着！車から降りるとマルちゃんがこちらに駆けつけてくれた。

花丸「祥一くん、おはようずら〜。」

僕「おはよう、マルちゃん。」

花丸「こつちずら。じいちゃんは中に入らずら。」

マルちゃんに案内をしてもらい、お寺の中に入った。中に入るとマルちゃんのおじいちゃんももう既に色々と準備をしてくれていた。僕はのしを渡すと最終準備に取り掛かり、お祓いもスムーズに進んだ。

僕「どうもありがとうございます!」

マル祖父「はいよ、これからも安全運転につとめるんじやよ?」

僕「はい!」

マル祖父「そして花丸や、今日はお手伝いはいいから祥一くんとかけておいで？」

花丸「ええっ!?!いいよ!それに祥一くんに悪いずら!」

僕「どうして？」

花丸「だつてオラ、オラとか言つちやうし…」

僕「あはは、僕はそんなこと気にしないよ？」

花丸「それに…その…祥一くんは…オラと出かけるの…いやじゃない…?」

僕「全然!むしろ嬉しいよ♪」

マル祖父「ほら、そういう事じゃから行つておいで。」

花丸「うん、行つてくるずら!祥一くん、よろしくずら!」

僕「よろしくね、マルちゃん♪」

ということでもマルちゃんとお出かけすることに。駐車場に向かい、車のカギを開けてドアを開けた瞬間：

ピッピッ

ガチャ

花丸「しよ、祥一くん！いつの間にカギを開けたぞら!?!」

僕「?ああ。この車、このカギを持ってればドアノブを触るだけでカギが開くんだ。やってみる?」

花丸「うん!」

僕は1度車の鍵を閉めた。

ピッ

そしてマルちゃんに車の鍵を渡した。車の鍵を持ったマルちゃんがドアノブを触つてからのドアを開けようとするとき……

ピッピッ

ガチャ

カギが開き、ドアが開いた。

花丸「み、未来ずらー!!」

初めてスマートキーと言うものを体感したのである。ドアノブを触っただけでカギが開いて「未来ずらー!」って目を輝かせながら言うマルちゃんがかわいくてついほほ笑んでしまった。

その後、車に乗り込み沼津の本屋さんへ向かった。その道中でもマルちゃんはカーナビを見ては「未来ずらー!」って言ってた。こりやあ最近よく聞くアダプティブクルーズコントロールや自動運転とか見せたらどんな反応するか気になりますなw

。

沼津の本屋さん到着

花丸「祥一くん、何か買いたい本とかあるの？」

僕「うん、コレが欲しかったんだ。」

僕が手に取ったのは車関係の本、ハイ○○○ブだ。

花丸「祥一くん、ほんとに車が好きなんだね！」

僕「うん！マルちゃんは何買うの？」

花丸「マルはこれすら！」

マルちゃんは大量の本を台車に乗せていた。

僕「こんなに…？（苦笑）」

花丸「うん！」

僕「すげー…マルちゃんって小説が好きなんだね。」

花丸「うん。祥一くんはあまり小説とか読まないすら？」

僕「うん、あまり読まないんだ。でも何か面白いのがあったら読んでみたいな。」

花丸「ホント!?!ならコレを読むすら！」

マルちゃんが僕に勧めてくれた本は恋愛小説だった。

花丸「コレは年上の男の子と妹みたいな女の子の恋愛小説すら！祥一くん、こういうの疎そうだから読むすら！」

僕「う、うん。読んでみるよ。」

疎そうって言われてしまった…まあ実際疎いけど
2人でお会計を済ませ、車まで戻ろうとした。

僕「マルちゃん、本持とうか？」

花丸「ええ!?!大丈夫だよ!重いし…」

僕「大丈夫だよ!これでも男だからね!」

花丸「じゃあ、お願いするぞら!」

マルちゃんの本を預かり、コインパーキングに止めている車に本を乗せた。この後どうしようかとマルちゃんと話し合い、雑貨屋さんに行くことになった。

花丸「都会ずら〜。」

マルちゃんは目を輝かせながらアクセサリーを見た。

あ、やべ！そういうえばマルちゃんへの誕生日プレゼントまだ買ってなかった…好みもわかってなかったし…ここでマルちゃんが気に入ったのがあれば買ってあげよう。

ちよつとご都合主義だけど許してね。

花丸「わあ…！これ、かわいいずら〜。」

マルちゃんが手に取って見ていたのは白い花の髪飾りだった。

店員「これ、かわいいよね〜♪君に似合うんじゃないかな？」

声を掛けてきたのは20歳くらいの女性の店員さん。結構フレンドリーで話しやすい雰囲気の方だなあ。

店員「ねえねえ、お兄さんはどう思う？似合うんじゃないかな？♪」

僕「ええ、とつても似合うと思いますよ。」

花丸「しよ、祥一くんっ／＼／＼」

店員「うふふっ、じゃあちよつと着けてみようか。」

花丸「ず、ずらく！」

店員さんはマルちゃんを鏡がある所まで連れていき、マルちゃんに髪飾りを着けていた。

………

………

………

ん？あんなにノリノリだった店員さんが急に静かになったぞ？どうしたんだろ？

店員「お兄さんお兄さん。」

店員さんは手招きをして僕を呼んだ。するとそこには髪飾りをつけたマルちゃんが

いた。

花丸「ど、どう…？似合う…？／＼／」

マルちゃんはちよつと恥ずかしそうにもじもじしていた。

ヤバイ…めちやくちやかわいい…

ただでさえかわいいのに髪飾りでかわいさが引き立てられ、さらに恥ずかしそうな顔をされたら…

なんというか…ごちそうさまです！

僕「か、かわいい…」

店員「え、ええ…」

花丸「ずら…／＼／」

この後、マルちゃんにこの髪飾りを買ってあげた。お会計のときに店長さんらしき人

に指摘されたけど、この時僕と店員さんは鼻血を垂らしていたみたい。全く気が付かなかったよ。

—。
帰りの車内

花丸「祥一くん、この髪飾り…結構高かったけど本当に買ってもらってもよかったの…?」

僕「うん、いいよいいよ。」

花丸「でも、なんだか申し訳ないすら…」

僕「いいんだよ、だって今日はマルちゃん誕生日なんでしょ?」

花丸「!?な、なんで知ってるすら!?」

僕「マルちゃんのおじいちゃんから聞いたんだ。だからこれは僕からの誕生日プレゼントだよ！受け取ってくれる？」

花丸「う、うん！祥一くん、ありがとずら！」

僕「どういたしまして♪」

その後、まだ帰るには早い時間だったのでマルちゃんを僕の家へ上げた。そして2人でならんで壁に寄りかかり今日買った本を読んだ。

しばらくすると肩に重みを感じたので見てみるとマルちゃんが眠っていた。

花丸「すう…すう…」

とつても気持ちよさそうに眠ってるなあ。風邪ひくといけないから毛布でも出すか。マルちゃんを起さないように手を伸ばし、毛布をとった。近くにあつてよかった。そしてその毛布をマルちゃんにかけてあげた。

僕「マルちゃん、風邪ひくよ。」

声をかけた瞬間マルちゃんがコテンと倒れ、その拍子に膝枕状態になった。

この光景：なんだかかわいい妹が出来たみたいだなあ。思わず頭を撫でてしまった。

花丸「むにやむにや：祥一くん、大好きずら：」

僕「えっ？」

マルちゃんの寝言に思わずドキつとしちゃった。それだけ慕ってくれてるってことなのかな。じゃなきやここで寝ちやわないか。それだけ慕ってくれてるってこと

うれしくなってマルちゃんが起きるまで頭を撫で続けた。

渡辺曜誕生日記念

数日前

そういや、もうすぐ曜の誕生日だな。曜といえば…船、水泳、制服…かな…？
うーん…誕生日に何をしたら曜はよろこんでくれるかな…？
悩んでいたら電話がかかってきた。

僕「もしもし？」

母「祥一？げんきー？」

僕「母さん、元気してるよ？」

母「そう、よかったわ。あのさー、確か曜ちゃんって船好きだったよね？」

僕「うん、好きだけど？」

母「4月17日に横須賀の海軍で船の展示会があるんだって。あの子、誘ったらよろこぶんじゃない？」

僕「MAJIKKA!でも遠いな…」

母「でもあんたにとつちや内浦から横須賀までなんて休日のドライブ程度の距離でしょ?」

僕「まあ…確かにそうだけど…」

母「ち・な・み・に、その日はお父さんと秋田に行くからうちには誰もいないわよ?」

僕「何故そこでその話が出るし…?」

母「だってあんたが遠いって言うし…それにうちに誰もいなかったらホテル代わり
n
(ry)」

僕「オイ待てそれ以上は言うな。」

母「まあそういうわけだからどうするかはあんたが決めなさい。じゃーね。」

プチツ

プー プー

まったく、母さんのやつ…何考えてんだよ…

でも海軍の船の展示会か…滅多にない機会だから連れていったらよろこんでくれ
るかなあ…

プルルルル

ん？今度は誰だ？

僕「もしもし？」

千歌「もしもし、祥くん？」

僕「千歌？どうしたん？」

千歌「4月17日って曜ちゃんの誕生日なんだけど覚えてる？」

僕「うん、覚えてるよ。」

千歌「さっすが祥くん！でねでね、その日の18時からうちで曜ちゃんのお誕生日会をやるんだけど、祥くんも来てくれる？」

僕「うん、よろこんで！」

千歌「やった！じゃあ、パーティーまで曜ちゃんどこか出かけててね！じゃーねー！」

プチッ

プー
プー

千歌のやつ、何かさりげなく曜を連れ出せって言ったな…w

ま、いつか…連れ出せって言っても…うーん…海軍まで行ってそれから18時には内浦に戻るのか…遠いなあ…でも海軍を早く出れば間に合うか…その分早く内浦を出れば行けるかな…

よし、曜を誘ってみるか！

ピツポツパツ

プルルル

曜「もしもし?」

僕「もしもし、曜?」

曜「あつ、祥くん。どうしたの?」

僕「4月17日だけど横須賀行かない?船の展示会があるみたいなんだ。」

曜「行きたい！でもその日の夜、千歌ちゃんがうちに来てって言うてるんだ…」

一瞬うれしそうな声をしてたけど千歌の家に行く予定があるからかちよつとテンションが下がった声になってしまった。

僕「だったら朝早く出て、3時前には向こうを出よう？そしたら間に合うんじゃない？」

曜「…うん！」

朝早く出て早く帰ろうと提案したら曜の声がまた嬉しそうになった。

僕「じゃあさ、朝5時半頃に曜の家に迎えに行くけどそれでいい？」

曜「うん！楽しみにしてるね！」

こうして曜の誕生日の予定が決まった。さあて、ハードな1日になりそうだけど曜の笑顔が見れるならそれだけでがんばれそうだ。

4月17日

AM 5:00

財布、キー、ハンカチ、スマホ、ETCカード持った。ガソリン満タン、OK！さて、曜を迎えに行きますか！

やっぱり早朝だから道が空いててちよつと…いや、結構早く着いちゃいそうだな。つて思ってたら10分ぐらい早く着いちゃったw

つて曜のやつもう外で待ってる。この時期の早朝はまだ寒いのに…僕が車で近づいたら曜が気づいてくれて笑顔で手を振ってくれた。

曜「祥くん、おっはヨーソロー！」

僕「おはヨーソロー！寒いから家の中で待ってればよかったのに……」

曜「だってすごく楽しみだったんだもん！だから早く出てきちゃったであります
！」

まったく、かわいいやつめ。頭撫でたくなっちゃうやろ〜！

僕「とにかく乗れよ。」

曜「うん♪」

曜を乗せてから沼津ICに向かい、そこから高速に乗った。あまり良くないけど運転中に一瞬曜の方に視線を向けたら少し眠そうにしていた。まあ朝早いし仕方ないか。

僕「曜？眠かったら寝てていいよ。着いたら起こすから。」

曜 「ううん、大丈夫！祥くんが運転してるのに寝ちやうなんて悪いもん。」

僕 「そっか、ありがとう。でも無理しなくてもいいよ？」

曜 「ありがとう！祥くんやさしいね♪」

かわいいなあもう！運転してなかったら頭撫でてるわ！

それから曜は学校で起きていることを話してくれた。主に千歌が色々とやらかしている話w曜と2人して苦笑いしてたけどやっぱり千歌らしくてどこか安心してたのは言わないでおこうw

さあて、到着したぞ！

曜はさつきからずっと落ち着きがなく、到着を今か今かと待ち続けている状態だった。

曜「運転おつかれさま♪さあ！全速前進、ヨーソロー！」

僕「ちよつ、曜！走ったら危ないって！」

中に入って、早速船の展示エリアに向かった。

曜「わあ……！祥くん見て見て！すごおい♪」

僕「ああ、迫力がすごいな！」

曜は船を見てはぴよんぴよんはねて興奮を隠せない状態だった。

僕「曜？写真とってやろうか？」

曜「うん！あ、すいませーん！」

オバちゃん「あら？なにかしら？」

僕「えっ？」

曜「シャツター押してもらってもいいですか？」

オバちゃん「いいわよ！」

曜「ありがとうございます！ほら祥くん、一緒に撮ろう？」

僕「え？僕がシャツター押すんじゃないかって——」

曜「一緒に…撮ろう…？」（ウワメツカイ）

（。 ㇏ *）グハツ!!

こんなん断れないって…

僕「わ、わかったよ…／＼／＼」

曜「えへへっ♪早く早く♪」

曜に腕を引つ張られ、船の前に並んだ。写真を撮るとき、曜は僕の腕に抱きつくような格好になった。

そうなるつまあ…アレですわw言わなくてもわかるよね？w

曜&僕「ありがとうございます。」

オバちゃん「いいえ。ところで、今日はデートかい？」

うおっ？そう見えちゃったかwでも曜からしたら僕みたいなヤツと恋人同士に見えるのは迷惑だろうしここは違うと答えとかないと…

僕「いえ、ちが——」。

曜「はいつ♪そうなんです！」

。(。ん)

ちよつwナニツテルノコノコハw曜も僕もコクつてないやんけw

曜はニシシつて笑いながらそう答えた。なおこの時も曜は僕の腕に抱きついた状態だった。

オバちゃん「あらあら、お熱いわね〜！楽しんでいってね！」

曜「はい♪」

オバちゃんと別れたあと、曜がムスツとした顔でこっちを見た。

曜「祥くんのバカ…」

僕「えっ？」

曜「なんでもない！ほら、次行くよ！」

僕「ちよっ！曜！痛いよ！」

曜はムスツとした表情から笑顔に戻り、僕の腕を引っ張って次の所に向かった。

。

曜「あ、祥くん見てみて！制服だあ！」

曜の視線の先にあったのは海軍の制服と思われるものだった。どうやら試着も出来るみたい。とは言っても服の上から羽織るだけと簡単なスタイルだけ。

曜「えへへー、着ちやおーつと♪」

制服はサイズ違いで何着か用意されていた。曜と僕はそれぞれ違うサイズを選んで試着した。

曜 「似合いますでしょうか!？」

僕 「うん、とつても似合ってるよ。」

曜 「えへへっ、祥くんも似合ってるであります!」

この後、ここでも記念撮影をした。さつきと同じように曜が腕に抱きついた状態で写真を撮ったので「制服だけどヨーソロー!のポーズしなくていいの?」って尋ねたら「あつ!そっか!」と言う流れで2人してヨーソロー!のポーズでも写真を撮った。

結構回ったなあ。

そろそろお腹がすいてきたということで食堂で海軍カレーを食べることにした。

曜 「結構回ったね。」

僕「そうだね、あとは売店でお土産を見てたらしい時間になりそうだね。」

曜「うん。祥くとこれて楽しかったなあ。」

僕「そっか、うれしい事言ってくれるねえ」(ニシシ)

曜「祥くんは楽しかった？」

僕「うん！」

曜「えへへっ♪」

曜と僕はカレーを食べたあとに売店に向かった。すると曜の目を引くものがあったらしくその商品を手に取って見ていた。

曜「これいいなあ…」

曜が手に取っていたのはアンカーのネックレスだった。値段は…高校生のお財布にはちよつとキツイ値段だった。それもその筈、よく見たら素材がチタンだった。これなら金属アレルギーを起こしにくいからまあ安心だね。

曜は値段を見てネックレスを買うのを諦めていた。その後は何事もなかったかのような顔をして僕にこう言った。

曜「ちよつと千歌ちゃん達へのお土産選んでくる。」

僕「わかった、じゃあ10分後にここで待ち合わせでいいか？」

曜「ヨーソロー！」

こうして曜と1度離れた。よし、この隙にさっきのネックレスをチャチャツと買っちゃいますか！もちろんラッピングもしてもらってね！

。

曜「祥くんお待たせ〜。」

僕「おつ、僕もさつき終わったところだよ。」

曜「祥くんもお土産買ったの？」

僕「まあね。さて、じゃあそろそろ千歌の家に向かいますか。」

曜「うん！」

曜と僕は海軍を後にし、車に乗り込んだ。ナビを設定し、渋滞情報も確認した。うん、渋滞してなさそうだね。よかった。

曜「じゃあ千歌ちゃん家に向かって〜、全速前進〜？」

曜&僕「ヨーソロー！」

僕「つとその前に…」

僕はさつき買ったお土産を取り出し、曜に渡した。

僕「曜、はい。お誕生日おめでとう。」

曜「えっ？覚えててくれたの…？」

僕「うん。大切な幼馴染の誕生日だからね。」

曜「祥くん…ありがとう♪早速開けてみてもいい？」

僕「うん！」

曜はお土産のラッピングを剥がし、中身を見てビックリした。

曜「これってあのネックレスじゃん！高かったのいいの!？」

僕「もちろん！そのために買ったんだし。」

曜「ありがと！祥くんだあーい好き♪」

曜は今日1番の笑顔で言ってくれた。その笑顔が見ただけでも買ったかいがあった。曜は早速ネックレスを着け、鏡を見ては嬉しそうな顔をしていた。

――。

ふう。帰りの高速も空いててよかったわ。これなら18時まで余裕で千歌の家に着きそうだね。

なお曜は出発して数分後には眠ってしまった。朝早かったしね、眠くないわけないか。

曜「祥くんおかえりい〜(ご)……にする……?それ……ろに……る?そ……も……ヨ……

ソロ……………?」

。(。ヾ)

隣で眠ってる子はイッタイドンナユメヲミテルノ…?

曜の寝言が途切れ途切れ聞こえてくるけど今聞いたら色々ヤバそう（主に僕の精神的な意味でw）なので聞かなかったことにしよう

(。ヾ) キコエナイキコエナイ

—————。

長距離のドライブを終えて千歌の家に到着した。時間は17:55、間に合った。

僕「曜、着いたよ?」（ユサユサ）

曜「ん…祥くん…?」

僕「おはよう、曜。」

曜「!!ごめん!寝ちやった!」

僕「いいいいいよ、そんなん気にすんなよ。」

曜「ううん、祥くんだって眠い中運転してくれてたのに…」

僕「大丈夫だって!曜はやさしいな。」(ナデナデ)

曜「…//」

ガキの頃のように頭を撫でると曜は照れたような表情をして俯いてしまった。

僕「あ、ごめん!昔の癖でつい…」

曜「いいの…もっとして…//」

僕「えっ？」

曜「なんでもない！ほら！千歌ちゃん待つてるから行こ♪」

僕「うん！」

曜と僕は車を降りて千歌の家に入った。志満さんが出てきて中に入れてくれ居間に入ったら一斉にクラッカーが鳴った。

パンツ！パンツ！

千歌梨子ルビイ花丸美渡志満「曜（ちゃん）（さん）！お誕生日おめでとう！」

曜「えっ？えっ？」

曜は一瞬状況を飲み込めていないようだった。

僕「曜、改めてお誕生日おめでとう。」

千歌「みんなでパーティーの準備してたんだよ！」

梨子「祥くんには日中連れ出してもらってね！」

曜「みんな…ありがとう〜！」

この後めちやくちやパーティーを楽しんだ。千歌たちも曜に誕生日プレゼントを用意していて、曜は終始うれしそうな顔をしていた。

千歌「あれっ？よーちゃん、そのネックレスどうしたの？」

曜「これ？祥くんが買ってくれたんだ〜♪」

梨子「すごく似合ってるわ！」

曜「梨子ちゃん、ありがとう！」

あれ？今更だけどよく見たらみんな僕が誕生日プレゼントであげたものを着けてくれている。こういうのを見れると買ったかいがあるもんですなあ（？▽？）

パーティーが終わり、曜を車で家まで送り届けた。
その帰り際に…

曜「祥くん。」

僕「うん？」

曜「今日はありがとね。とっても楽しかったよ！」

僕「うん。僕も楽しかったよ！」

曜 「ねえ…？また一緒に出かけてくれる…？」（ウワメツカイ）

僕 「…うん、また一緒に出かけような！」

曜 「…うん♪」

曜 はとびきりの笑顔でこたえてくれた。

僕 「それじゃあ、おやすみ！」

曜 「おやすみ！気をつけて帰ってね！」

僕 「ああ！」

曜 「大好きだよ、祥くん♡」

僕 「えっ？」

曜「へへっ、なんでもない！」

曜が最後に小声で言った言葉が気になるけど聞き返しても教えてくれなかった。いつかその言葉…また聞けるかな…そう思いながら家まで車を走らせた。

小原鞠莉誕生日記念

数日前――。

果南のダイビングショップでダイビングを楽しんだ後、浦の星の理事長とバッテリー会
い、話がしたいということで理事長の家にドナドナされた。

って家であつた！高級ホテルかよ！初めて中に入ったけどめっちゃ緊張するわ！

メイドさんと思われる方に飲み物は何がいいかと聞かれたので理事長と同じくコー
ヒーを頼んだ。

僕「ところで理事長さん、話って何でしょうか？」

鞠莉「だから『マリー』よ！祥一！それと、敬語もやめて！」

僕「は、はい。すいません（・ω・、；）」

あまり会ったことのないのに（しかも男）下の名前（いや、愛称か？）で呼べかつ敬

語を禁止するとか警戒心が無すぎずおじさんちよつと心配になります。

僕「マリー、僕に話つてどうしたの？」

鞠莉「イエース、果南やダイヤから聞きましたが、祥一って車が好きなデスカ？」

僕「うん、好きだけど？」

鞠莉「ワタシ、免許を取ったらスポーツカーに乗りたいと思つてマース！」

僕「おお、いいじゃん！どんなスポーツカーに乗りたいの？」

鞠莉「スポーツカーって言つても実はよく分からないのデース。そ・こ・で、祥一ならスポーツカーのこと詳しそうだから相談に乗つてほしいのデース！」

僕「なるほど、僕でよければ相談に乗るよ。」

鞠莉「Thank you♪祥一ならそう言ってくれと思うってたわ♡」

僕、そんなにこの子と話してる気がしないけど…ま、いつか。

鞠莉「まず聞きたいのデスが、祥一はどんな車に乗ってるのデースか？」

僕「スバルのBRZって言う車で2ドアクーペ、駆動方式はFRの車に乗ってるんだ。」

鞠莉「うーん、言われてもよくわからないデース…」

僕「あ、ごめん！まずは車についてある程度説明しなきゃだね。」

とりあえず僕の知ってる範囲で車の基礎的なことを説明した。まずは自分がどういうことをしたくてBRZという車を選んだか、そこから話を広げて駆動方式やどういったスポーツカーがあるかを話した。

鞠莉「うーん、ちよつと難しすぎていまいちピンと来ないわ…」

僕「あつ、ごめん。ちよつと話がマニアック過ぎたね…」

鞠莉「ううん、気にしないで。」

マリーはそう言ってくれているけどいまいちいい説明が出来なくてなんか引つかかるなあ…

僕「うーん…あ、そうだ。今度、6/13だけど走行会に行くんだけど一緒に行く？あそこなら同乗も出来るし、どうかな？」

鞠莉「イエース！行ってみたいわ！」

僕「じゃあその日の朝6時に船着場に迎えに行くけどいいかな？」

鞠莉「イエース！楽しみにしてマース！」

こうしてマリーが走行会に着いてくることが決まった。

。

淡島からでる船を待っていると、果南と再び会った。

果南「そう言えば、鞠莉の話って何だったの？」

僕「ん？クルマのことを聞かれたんだ。将来はスポーツカーに乗りたみたいだよ。」

果南「え」っ!?なんか危なそう…」

僕「なんで？」

果南「だって、あの鞠莉だよ？なんかいつでもアクセルとブレーキを全開に踏んでそう…w」

オイオイ、流石にそりゃあ……

ありそうだなw

マリイとはまだそこまで絡みはないけどなんとなくそんな気がしてきたわ…w

僕「あ、あはは…w」

果南「それで、他にはどんな話してたの？」

僕「とりあえず、スポーツカーをもっと知ってもらうために今度の走行会に一緒に行く約束してきたよ。」

果南「へえー、いつなの？」

僕「6／13」

果南「その日って鞠莉の誕生日だよ？」

僕「えっ、そうなの？」

果南「うん、だから楽しませてあげてね！」

僕「お、おう。がんばるよ。」

当日、マリーが楽しんでくれるといいなあ…

—。

6月13日

AM 6:00

財布、スマホ、持った。あとはヘルメットとグローブを2人ぶん用意したし大丈夫だね。さてと、船着場にマリーを迎えに行くか。

船着場に到着したらすでにマリーは待っていた。

僕「ごめん！おまたせ！」

鞠莉「チャオー☆祥一！そんなに待ってないから大丈夫よ！」

僕「よかった。じゃあ行こうか！」

鞠莉「OK！」

道中、マリーと僕はお互いのことをあまり知らないためちよつと長めの自己紹介的な会話をしながら目的地に向かった。途中からは主に果南やダイヤちゃんの話に変わったけどw

話はずんできた所でサーキット場に到着、受付を済ませてからのドライバーズミーティング、通称ドラミ（某ネコ型ロボットじゃないよw）に参加した。あと、保険に入れば同乗走行もできるということなのでマリーに乗ってみるか聞いてみたら乗るに決まってるかと即答されたのでマリーも保険に入った。

ドラミが終わり、1本目の走行がスタートした。1本目だけドラミを助手席に乗せて走行した。走り自体はまあ悪くは無いかな。車のコンディションもバツチリ、軽くド

リフトもしてみたけど特に問題はなさそう。これなら2本目はもつと踏めると確信した。

僕「どうだった？こういう走りをしたかったから僕はFRの車を選んだんだ。」

鞠莉「なんとというか、Amazingって感じね。いままで体感したことのない世界を感じる事が出来たわ！」

僕「そっか！次も乗るかい？次はもつと攻めるよ！」

鞠莉「Off course！楽しみにしてるわ！」

そして2本目の走行が始まった。さっきよりも攻め込んだけど所々でコーナーのライン取りをミスったりはしたがドリフトも特に大きなミスはせずに無事に走行を終えることが出来た。

3本目の走行までは会場を適当に廻って見ることにした。その時、とある1台のS15シルビアが目があった。

僕「あの車……！」

鞠莉「祥一、どうしたの？」

僕「あの車のリアウインドウに貼ってあるステッカー、僕がお世話になつてるシヨツプのライバルシヨツプなんだ。」

鞠莉「そうなの？」

そのS15を見ていたらオーナーさんと思われる人に声をかけられた。

S15オーナー「こんにちはは、BRZのオーナーさん。あの車だけど、もしかして萩谷さんのところでいじってる車なのかな？」

僕「こんにちはは。はい、あの車は萩谷さんにメンテからチューニングまでお願いして
ます。」

S15オーナー「そっか…オレはその萩谷さんって人のライバル関係にあたる人のところでチューニングをしてもらってるんだ。そういうことなら負けられねえな。おやっさんの顔に泥を塗るなんてことは出来ねえからな。」

僕「なるほど…そういうことなら僕だってコウさんの顔に泥を塗るなんて出来ねえ…こつちだつて負けないよ。」

S15オーナー「おっ？だつたらどつちが速いか勝負だ！」

僕「いいよ、まけないからな！」

こうして僕とS15オーナーさんのシヨップの看板を背負った勝負が始まった。

—。

鞠莉「祥一、勝てるの？」

僕「正直わからない…でも、負けたくないな！」

鞠莉「そう来なくっちゃ！応援するわ！」

僕「ありがとう、マリー！」

3 本目の走行、今日はこれが最後の走行だ。本気で攻めるということで刺さるリスクも高いのでマリーを横には乗せなかった。

1 周目：2 本目よりもいいラインで攻められた。これならタイム更新も期待出来るがS15よりかはまだ遅い。

2 周目：1 周目よりも体感的には速いかももしれない。ただ、そこまで考える余裕が無い。S15よりも速いか遅いかもわからない。

3 周目：最終ラップ。ここで攻めなきゃいつ攻める？2 周目に比べたら体感的には全然速い。これなら勝てる！

…よし、S15を抜かした！あとはこのまま逃げ切るだけだ！

だがしかし、最終コーナーで痛恨のミスをしてしまった。

僕「っ！うわあっ！」

最終コーナー出口で盛大にスピンをしてしまった。原因はオーバースピード。幸いスポンジバリアースレスレで車はぶつけなかったがS15には抜かされてしまった。

このラップが最終ラップなのでピットに戻った。車から降りたらマリーが僕のもとに駆け寄ってきた。

鞠莉「祥一！」

僕「ごめん、負けちった……」

鞠莉「そんなことより怪我は!?!」

僕「ああ、平気だよ。」

鞠莉「よかった…！」

安心したのかマリーは僕を抱きしめた。胸元に湿ったような感触が…もしかして泣いてる…？心配させて申し訳なくなり、マリーの背中に手を回した。マリーが言うには、マリーが見ていた角度からだ僕の手がスポンジバリアーにぶつかったように見えたらしい。

そうこうしていたらS15のオーナーさんが僕のもとに走ってきたのでマリーには離れてもらってそっちの方を向いた。

S15オーナー「大丈夫か!?怪我は!？」

僕「うん、平気だよ。」

S15オーナー「そっか、よかった。」

僕「悪かったな、びっくりさせちゃまって。」

S15オーナー「いや、怪我してないならいいんだ。それにあそこまで燃えたのは初めてだった。ありがとう。」

僕「こちらこそありがとう。次はまけないからな！」

僕とS15のオーナーさんは熱い握手を交わし、この場は解散となった。その後、イベントが終わり、マリーとサーキット場の売店に行った。

僕「今日の記念に何か買っていこうよ。」

鞠莉「OK！ Let's go！」

売店の中を色々見ていたら、マリーはある車の模型を買おうとしていた。

鞠莉「祥一！私はこれを買いたいマース！」

僕「これって…BRZの模型？」

鞠莉「イエース！」

僕「ほー、てつきりそっちの方に並んでるポルシェとかにするかと思ってたよ。」

鞠莉「だって今日、祥一のBRZに乗せてもらえて楽しかったから…」

僕「そっか、そう言ってもらえて嬉しいよ。」

その後、マリーの模型のお会計を済ませて車に戻った。

鞠莉「祥一？車の模型、買ってもらえてもよかったのデスカ？」

僕「うん、今日はマリーの誕生日なのに気の利いたこと出来なかったどころか心配ま
でかけちゃったしね。」

鞠莉「…！なんでマリーの誕生日を知ってるの？」

僕「この前、果南が教えてくれたんだ。だからコレは僕からのプレゼント、受け取ってくれるかな？」

鞠莉「祥一：Thank you. 大切にするわ。」

その後、マリーを船着場まで送っていった。

鞠莉「祥一、今日はThank youデー！」

僕「こちらこそありがとう。たのしかったよ。」

鞠莉「じゃあ、気をつけて帰ってね？」

僕「うん、またね。」

鞠莉「あ、祥一！ちょっと待つでーす！」

僕「う、うん？」

鞠莉「Close your eyes。」

僕「？」

とりあえずマリーが言う通り目を閉じた。

鞠莉「∴Shoichi, I love you。」

チュツ

マリーがなにか呟いてから、頬になにか柔らかい感触を感じた。残念ながら人生初の感触だったので何の感触かはわからなかった。

鞠莉「祥一、目開けていいわよ？」

僕は目を開けるとさつきよりも近い距離にマリーがいた。

鞠莉「それでは See you again! また遊びに連れて行ってね♪」

マリーは駆け足で船に乗って淡島に帰って行った。それにしてもさつきマリーはなんて言ってたんだろう…あとあの感触はなんだったんだろう…しばらく考えたけどなにも思いつかなかった。

津島善子誕生日記念

7月10日

僕「あれ？LONEが来てる？ヨハネからだ。なにになに？」

ヨハネ『リトルデーモン、7/13 1000に我がジャッジメントルームに参れ。全てのリトルデーモンを代表し、我と闇の儀式を行おうぞ…』

∴。えつとつまりは

『リトルデーモン、7/13の10:00に私の部屋に来て。全てのリトルデーモンを代表して儀式に付き合って。』

ってことか。

儀式…？なんの儀式やるんだ？

まあいいや。その日は暇だし、ヨハネさえよければ行こうかな。

僕『j a .』

とりあえずドイツ語で返信してみた。さて、ヨハネはどんな反応してるかな〜w
と思っていたらルビイちゃんからもL O N E が来た。

ルビイ『7 / 13 ってお兄ちゃんも善子ちゃんの家に行くの?』

僕『行くよー。ルビイちゃんも行くの?』

ルビイ『うん、ルビイと花丸ちゃんも行くよ!』

僕『そつか。人を集めて儀式ってなにやるのかな…?』

ルビイ『多分生放送をやるんじゃないかな?その日、善子ちゃんの誕生日だし。』

僕『そうなんだ。じゃあ、お祝いしないとな!』

ルビィ『うん!』

こうしてヨハネの誕生日を祝うことになった。

7月13日

さて、この時間に出れば約束の時間には間に合うべ？そろそろ行くか。

この日の格好はドクロの指輪を片手に1個ずつ、ドクロのペンダント、十字架のノンホールピアス、黒いマスクといういかにもって感じの格好を試してみた。うわ、いかにもV系バンドを意識してる感全開だなwこれでTPOにあってればいいけど…

さて、ヨハネのマンションに着いた。えーっとヨハネの家は何号室だ?…あった、ここだ!

ピンポーン

ヨハネ「ハイ!」

ガチャ

僕「よっ！こんにちは！」

ヨハネ「来たわね。さあ、上がって！ルビイとずら丸はもう来てるわ！」

僕「うん、おじやまします。」

ヨハネの部屋に通された。そこには既にルビイちゃんとマルちゃんも来ており、リトルデーモンの衣装と思われる格好をしていた。

ルビイ「あ、お兄ちゃん！」

花丸「こんにちはわすらく。」

僕「こんにちはは、その格好で来たのかい？」

ルビイ「いや、さすがにこの格好では…」

花丸「祥一くん、その格好はどうしたずら？」

僕「あー、こうした方がリトルデーモンらしくなるかなって思っ…あはは…」

まあそんな反応するわなw普段は今日みたいな格好しないし。

ヨハネ「ルビイとずら丸はこのマスクをつけてちようだい。」

ルビイ&花丸「わかった(ずら)。」

おお、ヨハネのセンスが光ってるマスクだな。このマスクなら顔全部隠れるしまあ安心だね。

ヨハネ「祥一は、このまま出てもらうわ！」

僕「オレは顔出しかよ！w」

ヨハネ「大丈夫よ！黒いマスクで下半分は隠れてるし！」

僕「上半分が隠れてない！」

そう言うとヨハネは僕の顔上半分を見てこういった。

ヨハネ「だ、大丈夫よ。祥一、顔、いい方だし：／／／」

僕「そりやどうも：」

ヨハネに顔いい方って言われてしばらく照れて固まってしまった。

花丸「ほら、そろそろ始まる時間ずらよ！」

ヨハネ「あっ！いけない！準備するわよ！」

マルちゃんの声のおかげで我に返り、生放送の準備に入った。最初はヨハネが一人

で出て、その後僕たちの紹介をして本編に入るといふ流れだ。

なおこの放送中はルビィちゃんは「Ruby」、マルちゃんは「Flower」、僕は「Signum」と名乗ることとなった。

ルビィちゃんのHN、まんますぎるけど大丈夫か？

と思ったけど本人は大丈夫なようなので生放送がスタートした。

ヨハネ「はあい、リトルデーモン。今日はヨハネのために集まってくれたリトルデーモンを3人紹介するわ。さあ、こちらにいらっしやい、リトルデーモン。」

ヨハネの号令がかかったのでリトルデーモン3人はカメラが映る範囲に入った。

ルビィ「は、初めまして！リトルデーモンのRubyでしゅ！よろしくおねがいしましゅ！」

ルビィちゃんのあいさつにコメントが届いた。

Rubyちゃんかわいいー♡

おちついて！

Rubyちゃんのリトルデーモンになりてーw
次はマルちゃんの自己紹介

花丸「初めまして！オラ、Flowerずら！」

マルちゃんのあいさつに対するコメントは：

方言っ娘？

ずら

かわいいよー！

次は僕、男が出て大丈夫なのかコレ：

僕「我の名はSignum。我らと共に墮天するがいい。」

オレにもコメントが来たぞwどれどれ：

ヨハネの彼氏？

イケボなのに拗らせてるwww

ウホツ♂

…
ウホツて…w一応言っておくけどオレ、ノンケだからなw
こうして生放送が始まった。

…

…

…

あれから生放送は順調に進み、終盤へとさしかかった。

ヨハネ「それではみなさん、今日来てくれたリトルデーモンに大きな拍手を。」

すると8888888888888888等のコメントが画面一面に広がった。

ヨハネ「ではみなさん、またお会いしましょう！さらば！」

ここで生放送が終了した。

僕「…。みんな、おつかれさま！」

花丸「おつかれさまずら！」

ルビイ「おつかれさま！」

ヨハネ「おつかれさま！みんなのおかげで生放送は大成功よ！」

こうして生放送のゲスト出演は無事に成功した。

――。

生放送が終わってから、ルビイちゃんとマルちゃんはこの後家の用事があるので帰ることになった。

ヨハネ「ルビイ、ずら丸。今日はありがとね。」

ルビイ「ルビイこそ、ありがとう。楽しかったよ。」

花丸「マルもたのしかったぞら！」

ヨハネ「そう、よかった。じゃあ、気をつけて帰ってね！」

ルビイ&花丸「バイバーイ！」

ルビイちゃんとマルちゃんを見送ったヨハネと僕はヨハネの部屋に戻った。

ヨハネ「祥一も、今日はありがとね。」

僕「こちらこそありがとう！楽しかったよ。」

ヨハネ「そう、わたしも祥一が生放送に付き合ってくれて楽しかったわ。」

僕「うん。あ、それと…はい、コレ。誕生日おめでとう。」

ヨハネ「えっ？ありがとうございます。なんでヨハネの誕生日知ってるの？」

僕「実は数日前にルビィちゃんが教えてくれたんだ。」

ヨハネ「そうだったのね…ありがとうございます！祥一！」

ヨハネは早速プレゼントを開けた。中身は十字架のネックレスにした。

ヨハネ「ありがとうございます、祥一！大切にするわ！」

—————。

さて、そろそろ暗くなるし僕も帰ろうかね。

僕「じゃあそろそろ僕も帰るね。」

ヨハネ「ええ、今日は本当にありがとうね！」

僕「うん、また誘ってね！」

そう言つて僕はヨハネの家を出た。その数秒後にヨハネが遠くから僕に叫んだので振り返つた。

ヨハネ「祥一！」

僕「うん？」

ヨハネ「…大好き！」

僕「えっ？」

ヨハネは顔を少し赤く染めながら自分の家に戻つていった。

誕生日記念ストーリー 2

高海千歌誕生日記念 2

千歌 19歳

祥一 21歳

僕「志満ねえ、ただいまー！仕入れ終わったよ！」

志満「おかえりー！ありがと、祥くん。」

美渡「祥くん！帰ってきて早々で悪いけど業者までシート取りに行ってきてくれる？手配ミスで数が足りないんだ。」

僕「わかった！行ってくるね！」

今、僕は十千万で住み込みで働かせてもらっている。きつかけは僕が起こした交通事

故。そう、西伊豆スカイラインで刺さったのだ。幸い単独事故だったのと、一緒にコウさんも走っていたのですぐに救急車を呼んでもらえたし車も引き上げられた。怪我の程度は大したことなくて1週間入院する程度ですんだ。親父と母さんは僕が刺さったと聞いて神奈川から飛んできてくれた。最初は心配してたけど僕の様子を見て安心した後、呆れられた。話を聞くと親父も若い頃に僕と同じような場所で同じような刺さり方、怪我の程度まで同じような感じだったらしい。その後、親父と母さんは仕事があるということで神奈川に戻っていった。

親父と母さん達は何事も無かったかのようにすんだけどAqoursのみんなはもうもいかず、病室に入った瞬間に泣かれた。果南やマリーは海外、ダイヤちゃんも東京から飛んできてくれた。正直、事故つて車が壊れたことよりもAqoursのみんなを泣かせたことのほうがショックだったよ。

その後、僕が入院している間にAqoursのみんなで話し合っていたらしく、僕がまた夜な夜な峠を攻めに行かないように見張る意味を込めて僕を十千万で住み込みで働かせようと言う結果になったようだ。そのことを千歌の両親、志満ねえ、美渡ねえ、親父と母さんに話したらみんな揃って賛成してくれたみたい。もちろん、1番は本人の意思を尊重するって条件付きだね。正直、最初は断ろうかと思ってた。理由は一人暮らしに慣れて見張られることに少し抵抗があったということ（懲りずにまた峠を攻めるつも

りでいた)。そしていくら幼なじみ、志満ねえと美渡ねえも僕を弟のように見てくれていてもさすがにそこまで迷惑をかけられないと思っただから。そう言ったら主に後者のことで志満ねえと美渡ねえにめっちゃ怒られた。更には千歌にもめっちゃ泣かれた。確かに血縁関係はないけどそれでも弟のように可愛がっていた、兄のように慕っていた僕にそう思われたことが悲しかったようだ。それを聞いた瞬間、僕はものすごく悪いことをした気分になったのと、千歌たちがここまで思ってくれていることがうれしくて十千万に住み込みで働くことを決意した。

さて、過去の話をしているうちにシーツを確保出来たから我が家に帰りますかね！

因みにだけどBRZは修理して今もバリバリ現役だ。仕事では使わないけど千歌とのデートのときに活躍してくれている。

あ、千歌とは今は恋人同士になってます。十千万に住まわして貰ってから1ヶ月ぐらいの頃に僕から告白しました。断られたらそのショックで夜逃げするかと思っただけどOKしてくれてよかったですよ。

十千万で働き始めてから1ヶ月後の夜
三津浜にて

僕「ふう…こうしてポケーツと夜の海を眺めるのもいいよな…」

千歌「あれっ？祥くん、ここにいたの？」

僕「千歌。うん、こうして何も考えずに海を眺めるのもいいなーって思ってたんだ。」

千歌「そっか。」

千歌が僕が座っている隣に座ってこつちを見た瞬間、刺さった時についた傷跡に優しく触れた。

千歌「やっぱりあとが残っちゃったね…」

僕「まあ仕方ないさ。僕の自業自得だし。」

千歌は傷跡を見つめながらつぶやき始めた。

千歌「私ね、なんでかわかんないんだけどあの事故のあと、祥くんがどこかに行ってしまうんじゃないかって心配だったの…」

僕「千歌？」

千歌「あの後、もしかしたら祥くんが神奈川に帰っちゃうんじゃないか。神奈川に帰らなくてもまた事故してもう二度と会えなくなっちゃうんじゃないかって心配だった！」

僕「千歌…」

千歌は泣いていた。そう言えば刺さったあとの僕と親父、母さんとのやりとりは A q o u r s のみんなは見えてないんだっけ。なんとなくだけど、僕が神奈川に連れ戻されるって思ったのかな。

それか連れ戻されなくても最初は懲りずにまた峠を攻めるつもりでいたし、千歌の言う通り次刺さったら今度こそ死んでしまうかもしれない。千歌はそれを心配してたのだろう。

僕は千歌を抱きしめた。

千歌「ふえっ？しよ、祥くん？／＼／＼」

僕「千歌、僕はいなくならないよ。今だつてこうしてここにいるし、これからも内浦こいにいるよ。」

千歌「祥くん…」

僕「…ありがとう、千歌。僕を十千万に迎え入れてくれて。」

千歌は無言で僕の背中に手をまわした。この時に僕は告白する決心をした。

僕「千歌。俺、千歌のことが好きだ。幼馴染とか妹的な存在とかじゃなくて一人の女

の子として好きだ。」

千歌「……！！／／／ほ、ホントなの……？／／／」

僕「ホントだよ。自分でもコントロール出来ないぐらいにな。」

千歌「祥くん……」

僕「正直僕みたいな車バカとは釣り合うとかは考えたことない、嫌なら断ってくれてもいいとも思ってる。でも——！！」

話してる最中に千歌の口で僕の口を塞がれた。

千歌「……ツぷはあ！」

僕「ち、千歌！／／／」

千歌「えへへ、やっと言ってくれた／＼／」

僕「千歌?／＼／」

千歌「今のが私の返事／＼／私もずっと祥くんのが好きだった／＼／」

僕「千歌:／＼／ありがとう／＼／」

お互いしばらく抱きあっていた。こうして千歌と僕は恋人になった。なおこの一部始終を志満ねえと美渡ねえはコッソリ見ていたらしく、十千万に戻った瞬間祝福されてめっちゃ恥ずかしかったw

。。
今現在

僕「美渡ねえ、ただいまー!シート取ってきたよー!」

美渡 「おかえりー！サンキュー、祥くん！」

もうすっかり暗くなっちゃったな…さて、次にやることは…？

志満 「祥くん、今日はもう終わりでいいわよ？」

僕 「えっ？まだやることいっぱい残ってるのに？」

美渡 「バーカ、明日は千歌の誕生日だろ？」

僕 「そうだけど…」

志満 「今晚、千歌ちゃんと星でも見に行ってみたら？千歌ちゃん、きつとよろこぶわよ。」

僕 「志満ねえ、美渡ねえ…ありがとう。」

その後、千歌も仕事を終えたので一緒に晩ご飯を食べた。その時に、この後ドライブに出かけようって誘ったらうんって言うてくれたので星を見に行くことにした。

千歌「ねえ祥くん、峠なんか走ってるけどどこに行こうとしてるの？」

僕「いい所（ニシシ）」

千歌「むう…」

出かけたはいいものの行き先を教えなかったからか千歌はほつぺたを膨らましてしまった。やつべえ…そのほつぺたをつつきたい…でも運転中だから我慢我慢と。

千歌「祥くん、前よりも運転が優しくなったね。」

僕「そうか？まあ今は大切な子に乗せてるからそうしてるだけだよ？」

千歌「不意にはズルい…／＼／＼」

僕「えっ？」

千歌「なんでもないっ！／＼／＼」

僕「？お、もうすぐ着くよ！」

車を駐車場に止め、降りて空を見上げるとそこにはキレイな星空が一面に広がっていた。

千歌「わあ…♡」

千歌はキラキラした目で星空を眺め、僕はその横にならんだ。その時、予め8／10：00に設定しておいたスマホのアラームのバイブがなった。

僕「千歌、誕生日おめでとう。」

千歌「祥くん？」

僕「俺さ、千歌の誕生日はここで一緒に星を眺めながら迎えたって思ってたんだ。それで千歌が喜んでくれたら嬉しいなって思ってた。」

千歌「祥くん…ありがとう！とっても嬉しいよ！」

喜んでくれてよかった。これで「いやだった」とか言われてたら泣いてただろうなw
そしてお互いに抱き合い、キスをした。

僕「千歌、大好きだよ。」

千歌「私も祥くんのこと、大好きだよ♡」

この後、しばらく僕たちは抱き合っていた。もう絶対にこの子の前からいなくならな

い、いなくなるようなことはしない。俺はこの子が大切だから。

H a p p y B i r t h d a y , D e a r C h i k a .

桜内梨子誕生日記念2

9 / 18 夜

梨子 20歳

祥一 22歳

僕「あーつかれた…でも帰ってから企画書の続き作らなきゃ…」

今日も21時まで残業だった。ココ最近残業続きで体力的にもちよつとキツイな…オマケに帰ったら企画書も書かなきゃいけないし…その企画書、納期は明日だし。しようがない、モン○ター○ナジーでもキメとくか。

さて、家に帰りついたはいいけどご飯を買って帰るの忘れてた。せっかくコンビニに寄って飲み物は買ったのに…もうめんどくさいから飲み物だけでいいや。

家のドアを開けると部屋の明かりがついていた。あれっ？電気消し忘れたかな？

あーあ、電気代がもったいないな…そう思いながら部屋に入ると…

梨子「あ、祥くんおかえり！」

僕「梨子！ただいま、来てたんだ。」

梨子「うん、最近何だか祥くんの帰りが遅いみたいだからちよつと心配して来てみたの。」

僕「そっか、ありがとう。」

梨子「それで祥くん、晩ご飯は？」

ぐうぐう……

僕「えと……買ってくるの忘れた……／＼／＼」

梨子「もう、お腹すいてるのに何も食べようとしないで、またそんな飲み物に頼ろうとして……本当に体壊すわよ！」

僕「ごめん。」

梨子が僕から飲み物を取り上げ、冷蔵庫にしまった。

梨子「もう、冷蔵庫にもほとんど何も入ってないじゃない……今材料買ってきてご飯作ってあげるから部屋で待ってて。」

僕「いや、一緒に行くよ。」

梨子「もう、祥くんは仕事で疲れてるんだから家で待ってなさい！いいわね！」

返事をする間もなく梨子は僕の車を運転して食材の買い出しに向かっていた。

さて、せつかく家で待ってろって言ってくれてるから梨子に甘えて企画書でも進めようか。

あ、梨子とは今恋人としてお付き合いさせてもらってます。

東京でのあるピアノ発表会当日

僕「桜内さん、ありがとうございます。梨子さんのピアノ発表会に僕なんか招待してもらえてよかったですか？」

梨子母「いいのよ、いや、祥一さんだからこそ来て欲しかったのよ。あの子、『祥くんに発表会に来てもらいたい』ってずっと言ってたのよ。」

僕「梨子ちゃん…そうだったんですね。」

梨子母「あ、そろそろ始まるわよ。」

開始のブザーが鳴り響くと、会場は一斉に静まりかえった。すると梨子ちゃんがステージ袖からピアノに向かって歩き、客席に向かって一礼をしてからピアノの席についた。梨子ちゃんの動き自体は落ち着いた感じではあったが表情を見るとやはり多少の緊張は隠せていなかった。

♪
 曲が始まってから少し経ったら、梨子ちゃん表情は緊張よりも楽しさの方が勝ってきた。
 ♪

ピアノ発表会のプログラムが全て終わりホテルまでの帰路、梨子ちゃんと僕は2人で歩いていた。結果、梨子ちゃんは無事に賞を取れた。ピアノ発表会后、梨子ちゃんは僕の姿を見た瞬間僕に飛びついてきた。その光景を見た梨子ちゃんのお母さんと言うと「おじやま虫はとつとと消えま〜っす♪」って言って逃げるように先にホテルに戻ってしまったw

ちなみに僕は梨子ちゃんに飛びつかれてから歩き始めるまで思考回路がほぼ止まっていたw

僕「梨子ちゃん、入賞おめでとう♪」

梨子「ありがとう、正直不安だったけど祥くんが見ててくれていると思っただら落ち着いて演奏出来たわ。」

僕「そっか、それはよかったよ。」

それからしばらくはお互いに無言でホテルに向かって歩いた。その数分後、梨子ちゃんは僕の腕をしがみつくような感じで握った。僕が梨子ちゃんの方を見ると梨子ちゃんが口を開いた。

梨子「ねえ、ちょっと遠回りして行かない？／＼／＼」

僕「？うん。／＼／」

僕が了承すると梨子ちゃんが横に並びながらも僕をリードした。お恥ずかしながら東京の地理は全然分からないしね。向かった先は少し広めの公園、子供たちが元氣よく遊んでる中母親がそろそろ帰るように言ってる光景が目に入った。近くのベンチが空いていたので2人で並んでそこに座った。すると梨子ちゃんが僕の体に密着するよう

に横に並び、僕の左手を両手で握った。はたから見たらあ○みちゃんと細○さんの逆バージョンに見えるかもね。

つてええええ!?!オレ、今梨子ちゃんに密着されてるよ!w

僕「り、梨子ちゃん?／／／」

梨子「祥くん、ピアノ聞きに来てくれてありがとね…」

僕「梨子ちゃん…こちらこそ招待してくれてありがとう。」

僕がそう答えると梨子ちゃんは僕の顔をじっと見て口を開いた。

梨子「わたし、祥くんのごことが大好きです!一人の男の子として／／／」

僕「!!／／／」

梨子「あの日、出会った日から…こんなわたしにも優しくしてくれて、応援してくれ

て、笑顔を向けてくれて…うれしかったです！」

…

こんなわたしとか言って…そういう子にはちよつとお仕置きを…

梨子「だからわたしと…」

デコ…ピーン！

梨子「痛っ！もう、人が真剣に話してる時に何するの!？」

僕「だって『こんなわたし』とか言ってるから。」

梨子「えっ？」

僕「つたく、僕は梨子ちゃんだからずっと応援してきたし、梨子ちゃんと一緒に居れたから笑顔でいられたんだよ？」

梨子「祥くん？／＼／＼」

僕は梨子ちゃんの両頬を優しくつまんで伸び縮みを繰り返した。

僕「うりうり〜！」

梨子「ひゃ〜め〜へ〜（や〜め〜て〜）」

うん、満足した！

梨子ちゃんの両頬から手を離れた。

僕「ありがとう、気持ち伝えてくれて。僕も梨子ちゃんのことを好きだよ／＼／＼だから僕の方こそ付き合ってください／＼／＼」

僕が返事をするとう梨子ちゃんは僕の胸に抱きつき、泣き出した。僕は梨子ちゃんの背中に手を回し、梨子ちゃんが泣き止むまで梨子ちゃんの頭を撫でた。

今現在

つとまあこんな感じで僕と梨子は付き合い始めたんですわ。梨子が泣き止んだ後、『梨子ちゃん』って呼んだら頬を膨らまして『呼び捨てじゃなきゃダメ』って言うのですぐに呼び捨てに変えました。

ガチャ

梨子「祥くんただいま。」

僕「おかえり、梨子。」

梨子は帰ってきてすぐにキッチンに向かい、エプロンを着て料理を始めた。本当はその姿をずっと眺めていたいけど今は企画書を書かないと…

……

梨子が作ってくれたカレーを頬張っていると梨子は嬉しそうな顔をしながらこつちをみてカレーを食べていた。なんだか照れくさいけど嫌じゃない。いや、出来れば逆の立場がいいですw

……

……

……

食事が終わったあと、僕は再び企画書を書き始めた。梨子はと言うと食器の後片付けを僕の代わりにやってくれ、その後は僕の横にずっと座っていた。

……

……

……

さて、メールを送信つと。

企画書、やっと終わったわー……

今は何時だろ……？うわっ、午前3時かよっ！もういい加減寝ないと明日の仕事死ぬな

……

梨子はっと…座ったまま寝てる…悪いことしちゃったな…布団敷いて寝かせてあげればよかった。

僕は布団を敷いて梨子をそこに寝かせた。さて、僕ももう寝るかな。

9月19日

AM 7:00

ん…んんん…ん、もう朝か…さて、着替えて仕事に行かなくちゃ…そう思っていた矢先に…

♪

ん？電話？誰だろ？…課長？どうしたんだろ、こんな朝早くに？とりあえず出な
きや。

僕「はい、時雨です。」

課長「もしもし、おはよう時雨。」

僕「おはようございます、課長。なにかあったのですか？」

課長「企画書見たよ。よくあそこまで書いてくれたな。手直しもほとんど必要なさそうだ。」

僕「ありがとうございます。」

課長「後は俺が上手くやっておくから時雨は今日は休め。ここん所残業続きだったしな。」

僕「えっ？でも…」

課長「バーカ、こういう好意はちゃんと受け取っておけ。それに、今日はお前の彼女の誕生日だろ？」

僕「えっ、なんで知ってるんですか!？」

課長「お前、この前の飲み会で相当ノロケてて、彼女のことめっちゃ俺に語ってたじゃないかw」

僕「えっ、マジですか？／＼／」

課長「ああ、マジだwおかげで終電を逃しそうになったわw」

僕「その節はすいません。」

課長「まあ、とにかくだ、お前は今日は休暇だ！じゃあな！」

∴電話切られたw

せつたください、課長のご好意に甘えて今日は仕事を休みますか！

梨子「ん…？んん…おはよう、祥くん。そろそろ仕事に行く時間なんじゃないの？」

僕「梨子、おはよう。今日の仕事なんだけど、実は企画書が出来たからあとはいくつかに任せて今日は休んでいいって課長が言ってくれたんだ。」

梨子「そうなの？」

僕「うん。だからさ、今日は出かけようか？」

梨子「……うん！」

こうして急遽、梨子とデートすることが決まった。梨子はお出かける準備を始めたので僕はしばらく朝のニュースを見て待っていた。

梨子「祥くんお待たせ！」

僕「よし、じゃあ行こうか！……とその前に」

僕は梨子の顔をジッと見つめお祝いの言葉を言った。

僕「梨子、お誕生日おめでとう。」

梨子「…！覚えててくれたの？」

僕「もちろん、大切な彼女の誕生日なんだからね！」

梨子「祥くん…ありがとう！」

その後、車に乗り込むまで梨子は僕の腕に抱きついた状態でした。

僕「梨子、大好きだよ。」

梨子「わたしも、祥くんのこと大好きだよ♡」

H a p p y B i r t h d a y , D e a r R i k o .

黒澤ルビイ誕生日記念2

くルビイ Side

祥一 22歳

ルビイ 19歳

ルビイ「く♪」

ルビイは今、祥くんの家に来ています。約束の時間、祥くんが帰ってくる時間には早いけど待ちきれずに祥くんのお家に来ちゃいました。

今、ルビイは祥くんとは恋人同士になってます。祥くんってば最初はルビイの気持ちに気づいてくれなかったんですよ？

。。

昨年の初夏

ルビィは最近、なんだかおかしいのです。なんとというか、最近お兄ちゃんのことを見ると胸がキューッてなるのです。でもお兄ちゃんルビィのことを見ても、いつもと変わりなく何だかちよつと負けた気分になってます。

今日はお姉ちゃんに用事があつてお兄ちゃんが家に来ています。もうそろそろ終わる頃だけど：お姉ちゃんとお兄ちゃんは何を話してるんだろう？お姉ちゃんとお兄ちゃんがいる部屋の扉の前に立っていたら2人が出てきました。

祥一「あ、ルビィちゃん。おじやましてるね。」

ルビィ「お兄ちゃんいらっしやい！もう帰っちゃうの？」

祥一「うん、そろそろ帰らないと遅くなっちゃうからね。」

ルビィ「じゃあルビィが外までお見送りするね！」

祥一「おつ、ありがとう。じゃあダイヤちゃん、またね！」

ダイヤ「お気をつけて。ルビイ、お願いしますわ。」

うう…なんだかわかんないけどお兄ちゃんと二人つきりつて思うだけで何だか緊張してきた…お兄ちゃんは…いつもと変わらない感じだし…なんだか変だよお…

祥一「ルビイちゃん？」

ルビイ「は、はい！」

祥一「ルビイちゃん、どうしたの？何だかいつもより元気がない気がするけど？」

ルビイ「な、なんでもないよ！」

祥一「…そう？なにか悩みとかあるなら、僕でよかつたらなんでも言ってるね？」

うう…お兄ちゃん…何もわかってないよお…

祥一「それにしても、ココ最近暑くなってきたねえ…もうすぐ夏だねえ。」

ルビィ「そ、そうだね。」

お兄ちゃん、夏はなにかするのかな？どこか行くのかな？

祥一「ルビィちゃん、ここでいいよ。」

ルビィ「うん、じゃあおやすみ！気をつけて帰ってね！」

祥一「おやすみ。」

お兄ちゃんが帰ったあとルビィは部屋で考えていた。

お兄ちゃん、夏は何をするんだろう。どこかに出かけるのかな？ルビィも誘ってくれないかな？

—聞かせてよ あなたの夏のプランを どこか行くなら 誘って—

気がついたら予定を聞く練習をしていた。

後日

お兄ちゃんが実家からお菓子をもらったというのでおすそ分けをしにうちまで来てくれた。今日もお兄ちゃんが帰る時にルビイが外までお見送りをした。

今ならお兄ちゃんと二人つきり…

—練習したの さあ声掛けなきや こんなやり取り 無理よあせるわ—

祥一「ルビイちゃん？どうしたの？」

ルビイ「え、えと…なんか最近暑いからちよつとブーツとしちやつて…」

祥一「大丈夫？ココ最近はホント暑いよね。水分だけじゃなくてちゃんと塩分も取ら

ないとバテちゃうよ……」

うう……また今日も言えなかった……今度はいつお兄ちゃんに会えるか分からないのに……

——想像だけは 大胆なわたし 見てるだけでは 始まらないと わかってるけど
あと一歩勇気 ください——

ルビィ「あの！」

祥一「ルビィちゃん？」

ルビィ「夏はどこかに出かけるの？」

祥一「夏？うーん……群馬の赤城山までドライブにでも行ってみようかと思ってるけど？」

ルビィ「ル、ルビィも一緒に…行き…たいな…／＼／＼」

祥一「?うん、いいよ。」

ルビィ「やった!」

こうして夏はお兄ちゃんとドライブに行くことになった。

。

その日の夜

なんだろう、最近お兄ちゃんといるとなんか変…前まではそんなことなかったのに。
何、何なの…?

コンコン

ダイヤ「ルビィ、入りますわよ。」

ガチャ

ルビィ「お姉ちゃん…」

ダイヤ「ルビィ、少しお話しませんか？」

ルビィ「う、うん。」

お姉ちゃんとルビィはベッドに並んで座った。

ダイヤ「ルビィ、最近どうしたのですか？祥一さんとお会いするとすごく緊張してるように見えますが…」

お姉ちゃんがたずねてきた。お姉ちゃんならこの気持ちがあるのかかわかるかな？

—なんだろう…この気持ち…？ ルビィに、ルビィに教えて!!—

ルビィ「それが：分からないの：前まではそんなことなかったのにお兄ちゃんと一緒に居るとなんだか緊張しちゃうの。でも嫌な感じじゃないの。それに、お兄ちゃんが嬉しそうにしてるとルビィも嬉しくなるし、辛そうにしてると隣にいてあげたいって気持ちになるの。」

ダイヤ「ふふっ、ルビィ。その気持ちはね：」

お姉ちゃんはルビィにその気持ちの正体を教えてくれた。最初は恥ずかしくなつて枕に顔を埋めてしまったけどなんかすつきりした。ルビィ、1人の男の子としてお兄ちゃんのことを好きなんだ！

ドライブ当日

今日はお兄ちゃんとドライブに出かけてます。お兄ちゃんと二人つきりで同じ空間にいると思うとドキドキしちゃうよお：それなのにお兄ちゃんはいつもと変わらない感じだし：ルビィ、女の子として見られてないのかな：ルビィの気持ちに気づいて欲し

いな…

—LOVE! 胸にキラキラ光ってる 恋にあこがれる おさえきれない熱さ LOVE! それはあなたのせいだと思ってるのよ 気がついてほしいのに ああ…
まだ言えない!!—

出発してから数時間、目的地に到着したので車から降りて歩きはじめた。

祥一「ついたついたー! やっぱり山の上だからちよつと涼しいね!」

ルビィ「そうだね、と言うよりちよつと寒いかも…」

祥一「寒い?じゃあ…ほら、これ着る?」

お兄ちゃんは自分が来ていたパーカーを差し出してくれた。

ルビィ「ありがとう…でもお兄ちゃんは寒くないの?」

祥一「大丈夫大丈夫！どっちかと言うと暑がりな方だから！」

お兄ちゃんがさつきまで着てたパーカー、ほんのりあたたかくてなんだかいいです。
？なんだかお兄ちゃんの顔がちよつと赤い…？

ルビイ「お兄ちゃん？どうしたの？」

祥一「あ、いや。やつぱり僕の服だと大きすぎるなって思つて…袖も長いからなんか萌え袖みたいでかわいいって思つちやつて…」

お兄ちゃん、ひよつとして照れてる？ルビイに対して？

祥一「あ、あはは。何言つてんだろ…！ごめん、忘れて！」

お兄ちゃん、動揺してる。急に抱きついたらどんな反応するかな？

ルビィ「…えいつ!」(ギユツ)

祥一「る、ルビィちゃん!?! / / /」

ルビィ「えへへ、お兄ちゃんがルビィのことかわいいつて言ってくれたことがうれしくてつい。」

祥一「実際かわいいし。ホント、僕みたいな男が隣を歩いてもいいのかって思うぐらいね。」

お兄ちゃんなんか…? いや、ルビィはお兄ちゃんだからこそ隣を歩いて欲しいの!

ルビィ「お兄ちゃんだからこそ、一緒に歩いて欲しいの…」

祥一「…えっ?」

ルビィ「ルビィ、お兄ちゃんが隣にいて欲しいの!」

祥一「！」

ルビイちゃん「いつからか分からないけど、お兄ちゃんのこと一人の男の子として好きなの！」

あ、つい勢いでいっちゃった！どうしよう！お兄ちゃん、固まっちゃったし。もしフルれたらもうお兄ちゃんとは今まで通りみたいには会えなくなっちゃう…：そんなのイヤだよ！

祥一「ありがとう、ルビイちゃん。実は僕もルビイちゃんのが好きだったんだよ。今日も実は平常心を保つためにずっと頭の中で素数を数えてたんだ。」

ルビイ「…ホントなの？」

祥一「ホントだよ。だから僕の方こそ、付き合ってください！」

ルビィ「…はい！」

こうしてルビィたちは付き合うことになりました。この後、ルビィが「お兄ちゃん」って言ったら付き合ってるんだから呼び方を変えて欲しいって言われて祥くんって呼ぶようになりました。そして祥くんも嬉しそうなかおで「ルビィ」って呼んでくれて、とつてもうれしかったです！

今現在

く祥一 Sideく

さて、今日はルビィの誕生日ということで、家で二人きりでパーティをしようと企画してたのだ。ルビィの好きな食べ物、ケーキもおいものケーキを買ってきたしあとは家に帰ってルビィが来るのを待つだけって。

あれっ？家に入ったらルビィがいる。時間はまだ余裕なのに。

僕「ただいま、ルビィ。どうしたの、まだ時間には早いのに」

ルビィ「おかえり、祥くん！なんだか待ちきれなくて…少しでも祥くんと長く一緒にいたかったから…」

僕「そつか…／＼／＼まあまだ準備とかで時間かかるからもう少しゆつくりしてて？」

ルビィ「じゃあ一緒に準備する！」

僕「いいよ、ゆつくりしてて？」

ルビィ「少しでも長く隣にいたいんだもん…ダメ…？」

僕「…！／＼／＼」

結局一緒に準備することになりました。ああ、やっぱりルビィが隣にいてくれるって最高だな。それだけで十分幸せだ。

ルビィ「祥くんどうしたの？」

僕「ルビィが隣にいてくれるのが嬉しいだけだよ。」

ルビィ「ルビィも、祥くんが隣にいてくれてうれしい。」

ルビィも隣にいてくれるだけでうれしいって思ってくれて僕もうれしくてこう言わずにはいられなくなった。

僕「ルビィ、大好きだよ。」

ルビィ「ルビィも、大好き！」

H a p p y
B i r t h d a y ,
D e a r
R u b y .

黒澤ダイヤ誕生日記念2

ダイヤ24歳

祥一25歳

大晦日

ダイヤ「んもう！ここ、まだ汚いじゃありませんか！」

僕「えー、そこ拭いたんだけど。」

ダイヤ「全然キレイになってませんわよ！ほら、ここは私が掃除しておきますから祥一さんはそつちを掃除してください。」

今日は大晦日、ダイヤは僕の部屋の掃除を手伝いに来てくれてい。というのも僕は掃除が苦手でその出来に見かねて来ては手伝ってくれている。付き合ってからずっとそ

う。申し訳ないとは思いつつも実はその時間がだんだんと好きになってきているのは
秘密だw

ダイヤ「部屋はだいたい片付きましたわね。あとは私がやっておきますから祥一さんは洗車してきてください。」

僕「ありがとう、ダイヤ。」

さて、洗車しないと…

さっきもチラツと言ったけどダイヤとはお付き合いさせてもらっています。その時のきっかけ以来いい所を見せること出来てないけど仲良くしてもらってるの…かな…
?

数年前のとある日

仕事帰り、僕はローイを沼津駅まで送ってから家に帰ろうとしていた。

ローイ「しぐにゃん、おつかれ！送ってくれてありがとね！」

僕「おつかれ！気をつけてな！」

車を出そうとしたところで少し離れたところにダイヤちゃんがいるのを確認した。ん？誰かと一緒にいるのか？果南やマリーじゃない。男？それも2人。ダイヤちゃん、困ってる…というか凄い嫌がってる！

ダイヤちゃんの横に車を止め降りたらダイヤちゃんがこつちに気づいた。

ダイヤ「祥一さん！」

僕「ダイヤちゃん、ごめん。まった？」

ダイヤ「祥一さん！遅刻ですわよ！」

僕「ごめんごめん！さ、いこつか。」

ダイヤ「はい！」

ダイヤちゃんが車に乗り込もうとすると男が声をかけてきた。

男1「なんだテメエ？」

男2「この子はこれから俺らと遊ぶんだよ！」

僕「あのさ、俺、この子の彼氏なんだけど？」

男1&2「なにっ!!」

男達は目を丸くして驚いた。まあ俺みたいなイケメンとは言えないヤツが黒髪美人のダイヤちゃんの彼氏とか抜かしたら驚くよね？

男1「お、お前がか…？」

男2 「に、似合わねー…」

僕 「うっせw」

男達があ然としているうちにダイヤちゃんは車に乗り込んだ。

僕 「とにかく、この子は俺んだから！じゃあな！」

僕も車に乗り込み、ソツコーで施錠してその場から走り去った。

もちろん内心はすごく怖かった。でも無視は出来なかった。たとえ返り討ちにあつてもだ。まあでとなんとかダイヤちゃんも自分も無事に逃げられるようにがんばった。

それに俺、イケメンじゃなくてよかったwあの男達もあ然としてたけどこの顔でダイヤちゃんと付き合うとか似合わないにも程があるわwでもイケメンじゃないことに初めて感謝したわw

ある程度の場所まで車を走らせ、信号待ちをしている時にシフトノブから左手を離そ

うとした時にふと手の甲に温かさを感じた。見てみるとダイヤちゃんが手を乗せ、震えていた。怖かったんだろう。

僕「ダイヤちゃん。もう大丈夫だよ。」

ダイヤ「っ……っ……っ……！怖かったですわー！」

僕「ちよっ！ダイヤちゃん！運転中！運転中！」

ダイヤちゃんがコンソール越しに泣きついてきたので僕は咄嗟に車を端に寄せて止めた。

その後ダイヤちゃんが落ち着くまで胸を貸してから、ダイヤちゃんを家まで送った。

数日後

今日は、こないだのお礼と言うことでダイヤちゃんが手料理を振る舞いにうちに来て

くれた。ダイヤちゃんが料理中に僕がキッチンに入ろうとしたら「ぶつぶーですわ」って怒られたので大人しく部屋で待っていたら、料理が出来上がったようのでテーブルに持ってきてくれた。

作ってくれた料理は沼津の海でとれたアジのフライだった。沼津のアジフライ、おいしいよね！

ダイヤ「さあ、召し上がれ。」

僕「いただきます！」

うん、うまい！外はサクサク、中はふわふわでアジ自体の味もおいしいからソースがなくてもお箸が進むね！

ダイヤ「ど、どうですか…？」

僕「うん、とってもおいしいよ！」

ダイヤ「ホッ、よかったですわ〜。」

その後、ダイヤちゃんも一緒に食べたけど僕はと言うとアジフライに夢中になりすぎて食べている間一言も喋らなかつたw

僕「ごちそうさまでした！」

ダイヤ「おそまつさまですわ！」

アジフライでお腹を満たしたあとは部屋でゆっくりとした時間を過ごした。

ダイヤ「祥一さん？」

僕「なに？ダイヤちゃん。」

ダイヤ「あの時、あの2人に言った…その…／／わ、私の彼氏ってことについてなのですが…／／／」

えっ？あれっ？俺そんなこと言ったっけ？あの時咄嗟だったからなんて言ったかは

……

……

……

あ、確かに言ったわ！いくらなんでもあの発言はダメだろw自分で言っというの
もただけどなんだか寒気がしてきたわ。

僕「あの時はゴメン…咄嗟だったから…僕の彼氏とか嫌だったよね…？」

ダイヤ「そんなこと…ありませんわ…」

えっ？うそ？今そんなことないって言ったよね!?

ダイヤ「あの時、自分も怖かったと思うのにそれでも私を逃がそうとしてくださって
嬉しかったですわ…／／／」

僕「実はビビってたの、バレてたのか…」

ダイヤ「丸分かりでしたわよ。冷や汗かいてたじゃありませんか。」

僕「うっ…」

内心ビビってたのバレてたとかちよつと恥ずかしいんだけど…w

ダイヤ「でもありがとうございます。その後に優しくしてくれたことも嬉しかったですわ。」

僕「お、おう…／／／」

ダイヤちゃんの優しい微笑みを向けてくれちよつとドキツとしてしまったw

ダイヤ「その…ここからが本題なのですが…／／／祥一さん…あの…その…わ、私のほ、本当のか、彼氏になっていただけじゃないでしょうか…？／／／」

僕「……！／＼……ありがとう、ダイヤちゃん。気持ち嬉しいし僕もダイヤちゃんのが好きだよ。でも、僕でいいの……？自信ないよ……」

ダイヤ「私は祥一さんがいいのです……祥一さんは私じゃダメ……ですか……？」

僕「ううん、ダイヤちゃんが僕の彼女になってくれたら嬉しい……」

ダイヤ「それじゃ……！」

僕「はい、色々と迷惑をかけると思いますが、よろしく願います。」

今現在

んとまあ、こんな感じでダイヤと僕は付き合うようになったんですわ。付き合い始めてから僕はダイヤを呼び捨てにするようになったけどダイヤは相変わらずさん付けで

呼んでるんだよなあ…でもたまーにくん付けで呼ぶからそこに実は萌えてるなんて恥ずかしくて言えませんw

さて、洗車が終わったしダイヤちゃんの方も終わってたら年越しの準備しなきゃね！年越しはダイヤと一緒にうちでする予定だし。

僕「ダイヤヤー？こっちは終わったけどそっちはどう？」

ダイヤ「こっちも終わりましたわ。」

僕「ありがとう、ダイヤ。毎年毎年掃除手伝って貰ってごめんね。」

ダイヤ「いえ、私…実はこの時間が好きなんですから…」

僕「えっ？」

ダイヤ「なんでもありませんわ！ほら、年越しの準備をしますわよ！」

ここからはダイヤと一緒に年越しそばを食べ、年末のTV番組をみながらのんびりと過ごした。

僕「あ、もうすぐ年が明けるね？」

ダイヤ「ふふつ、また一緒にカウントしますか？」

僕「うん！」

ダイヤ「あ、もうすぐ10秒前ですわよ？」

ダイヤ&僕「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1…」

ダイヤ&僕「あけましておめでとうございます。（誕生日おめでとう、ダイヤ。）」

ダイヤ「相変わらず、そこはぶれませんわね。」

僕「当たり前だよ、大切な子の誕生日なんだから。」

ダイヤ「もう…でもありがとう…」

僕はダイヤを優しく抱き寄せ、呟いた。

僕「大好きだよ、ダイヤ。」

ダイヤ「私も好きよ、祥一くん。」

H a p p y B i r t h d a y ,
D e a r D i a .

松浦果南誕生日記念2

果南 22歳

祥一 23歳

僕「…」

果南「えへへ♪」

今僕は座椅子に座ってポケットとテレビを見ている。と言いたいところだが僕の足の間に果南が収まっており、僕の上半身が背もたれみたいな感じ…人間座椅子つて言えば想像しやすいかな？そんな感じになってます。（+あすなる抱き）

今日は僕の大切な彼女、果南の誕生日である。僕は昔つから、彼女になる前からこの子の存在には救われています。僕もこの子にとっての救いになれていればいいな…

。

く祥一と果南が小学生の頃く

僕はその日、親友と喧嘩をした。理由は些細なこと、そいつがおやつポテトチップスを僕よりも多く食べたつてことだった。それで怒った僕は思ってもいないことを言つてしまい、それに怒った親友が殴つてきたため殴り合いの喧嘩にまであつた。その喧嘩は、お互いの顔面が傷だらけになるまで続いた。その後僕は帰宅し、傷の手当をしてから果南の家にみかんのおすそ分けに行つた。

果南「ちよつと祥一!?その傷どうしたの!?!」

僕「ああ…ちよつと色々あつてさ…」

果南に心配はかけたくないし、流石に喧嘩したなんて恥ずかしくて言えないので適当に誤魔化した。

果南「お友達と喧嘩でもした?」

僕「うっ…！」

果南「その反応は…凶星だね。」

誤魔化せないと思った僕は親友と喧嘩したことがらを話した。

果南「これは祥も悪いよ？」

僕「わかってる。なんであんなこと言っちゃったんだろうな…本当はそんなこと思っ
てないのに…」

その時、自分が言ってしまったことに段々と罪悪感が湧いてきてつい泣きそうになっ
てしまった。その時…

ギョッ

果南が僕をハグしてくれた。

果南「そう思えるなら大丈夫。きっと仲直り出来るよ。明日、親友に会ったらちゃん

と謝る事!ねっ?」

僕「うっ…えぐっ……………」

僕は我慢出来ずに果南の胸の中で泣き出してしまった。

それから次の日の朝…

学校の正門をくぐった所で喧嘩した親友と遭遇した。やることはもちろん、昨日のこ
とを謝ること。

でもさ、親友も僕も顔面絆創膏だらけ。ぶつちやけ似合わない。なんというか、すご
く情けない顔してる。ごめん、我慢できないや。

親友& a m p ; 僕「ぶっ…あははははははは!!」

お互いにお互いの顔を見て爆笑してしまった。

その後、きちんと謝ることが出来た& a m p ; 親友も謝ってくれて無事に仲直りする
ことができた。

大人になつてからも果南には救われていたり：w

今日、会社ですごく嫌なことがあつた。確かにアレは僕が悪いんだけどさ、だからと
いってあそこまで言われる筋合いはないと思うんだ。イライラしながらも帰宅、回覧板
が届いていたので果南の家に届けに向かつた。

果南の家に到着、回覧板を果南に渡して帰ろうとしたところで果南に声をかけられ
た。

果南「祥？なにかあつた？何となく元気が無いように見えるけど…」

果南つて昔つからそういう所に鋭くて、嫌なことがあつた後に会つとすぐにバレちゃ
うんだよな。僕は果南に会社での出来事を話した。

僕「僕、この仕事向いてないのかな…」

そう話すと、果南は僕をハグした。

僕「ちよつ、果南／＼／」

果南「私、祥の仕事のことは分からないけど、祥は頑張ってると思うよ。祥が辛いときはこうしてハグしてあげるからさ、もう少しだけ頑張ってみよ？ねっ？」

情けないことに、いい年こいて僕は果南の胸の中で泣いてしまった。
数分後…

僕「ごめん、果南…かっこ悪いところ見せて／＼／」

果南「大丈夫大丈夫、また辛くなったらおいで？」

そうやって果南はたわわな果実をポンポンと叩いた。

僕「果南…あのさ僕、男だけどいいのか…？」

果南「？」

僕「なんて言うかその…よくよく考えたら刺激が強いつていうかその…／／／
こういう時なんと言ったらいいか分からず言葉に詰まってしまったところで…

果南「祥だったら…いいよ。」

僕「えっ？」

果南「だから、祥だったらいいって言ってんじゃん！」

僕「！」

果南は僕の胸に飛び込むようにハグしてきた。

果南「実は前から祥のこと、1人の男の子として好きだったんだよ…」

僕「えっ？そうだったのか…」

果南「小さい頃から私が落ち込んでいる時、こうしてハグしてくれたよね？その時からずっとだよ！」

僕が落ち込んでいる時、果南はいつもハグをしてくれた。果南がハグをしてくれれば安心するし、泣くことも我慢しなくていいんだよって言ってくれてるみたいで…ああ、こういう時なんて言ったらいいかわかんない！ただ、ハッキリと言えることは僕は落ち込んだ時はいつも果南が救ってくれて！僕だってそんな果南が大好きだったことだよ！

そんな果南が大好きで、果南が落ち込んでいる時は僕が果南をハグしていたんだ。それで果南が元気になってくれればうれしいから！

僕「果南、今まで気づけなくてゴメンね。僕だって落ち込んでいる時に果南がハグしてくれた時から好きだったんだよ。」

果南「そうだったの？」

僕「うん、果南がハグしてくれたから僕…だから果南…これからずっと、僕のそばにいてください。」

こうして果南と僕は恋人同士になった。

。。
今現在

ピンポーン

僕「あ、宅急便かな？」

果南「何か買ったの？」

僕「うん、ちょっと取ってくる。一旦いいか？」

果南「うん。」

果南は一旦人間座椅子から降り、僕は玄関に向かおうとすると…

ギョツ

後ろから果南にハグされた。

果南「早く出なよ？」

僕「この状態で？」

果南「この状態で。」

マジかと思いつつも宅急便の人を待たせるのも悪いので後ろから果南にハグされた状態（電車ごっこ状態？）で出てみた。それを見た宅急便のお兄さん、めっちゃ苦笑い

してたぞw

果南「何買ったの？」

僕「それはだな…コレだっ！」

箱を開封すると中からは果南の誕生日ケーキが出てきた。

僕「果南、お誕生日おめでとう！」

果南「祥…ありがとう！」

それから2人でケーキを食べ、食べ終わったら再び人間座椅子の状態に戻った。

僕「果南、大好きだよ。」

果南「祥、大好きだよ♡」

H
a
p
p
y

B
i
r
t
h
d
a
y,

D
e
a
r

K
a
n
a
n.

国木田花丸誕生日記念2

花丸 19歳

祥一 22歳

花丸「……………」

僕「……………」

今、僕は花丸と一緒に図書館に来ては読書タイム中である。前までは読書はほとんどしなかったのに今となつてはすっかりハマつてしまい、最低でも週一で図書館に行かないと精神的に死んじやうレベルにまでなつてしまった。きっかけは花丸と恋人としてお付き合いを始めたこと。今となつては読書の楽しさを教えてくれた花丸に感謝している。

一年半ぐらい前。

仕事のあと、気分転換として散歩に出かけてみた。コースはいつもの、マルちゃんの
お寺を経由するコースで行こうかw今日はマルちゃんいるかな？

お、いるみたいね。マルちゃんが僕に気づいて手を振ってくれた。

花丸「あ、祥一くん、こんにちはずら！」

僕「マルちゃん、こんにちは。」

しばらくマルちゃんと世間話をしてしていると、マルちゃんが本の話をしてくれた。

花丸「あ、そうだ。祥一くんに読んでもらいたい本があるずら。」

僕「読んでもらいたい本？」

花丸「うん、ちょっと取ってくるから待ってて欲しいずら！」

マルちゃんはお寺の中に戻り、しばらくすると本を持って戻ってきた。

花丸「この本なんだけど、読んでみて欲しいぞら。」

マルちゃんは本を1冊僕に渡してくれた。ブックカバーがされており、パツと見はなんの本かわからなかった。

僕「これってどんな本なの？」

花丸「読んでみてからのお楽しみぞら！読んで終わったら感想を聞かせて欲しいぞら
…」

僕「わ、わかった。帰ったら読んでみるね。」

マルちゃんから本を受け取った僕は時間も時間なので家に帰った。帰る時、マルちゃんの顔が心無しか少し赤かったのは気のせいかしらね？

散歩から帰宅後

僕「さてさて、早速マルちゃんが貸してくれた本でも読んでみますかね。どんな本なんだろ？」

マルちゃんが貸してくれた本は恋愛小説だった。内容はこうだ。

主人公の女の子は田舎生まれで田舎育ち、大人しくて引っ込み思案な性格でたまに方言が出るような子。それ故に小学校の頃はいじめられていた。なので主人公は方言が出ない喋り方を練習したがなかなかうまくいかなかった。

高校に入学した主人公は近所に引越してきたお兄さんに出会う。そのお兄さんは都会に住んでいたけど都会の生活が嫌になって主人公が住む田舎に引越してきたそう。お兄さんは優しい性格で、方言が出ちゃう主人公にも普通に接してくれていた。それどころか、方言が出る喋り方を無理に直す必要はないと思うと言ってくれた。

それがきっかけで主人公はお兄さんに恋心を抱くようになる。でも主人公はどこか自信を持ってず、そんな自分を変えようと思えば高校で新しい部活をスタートする。最初は

なかなか上手く出来ずに凹んでいたけど、部活の先輩やお兄さんが応援してくれたおかげで上手く出来るようになった。それで自信がついた主人公はついにお兄さんに告白、主人公とお兄さんは恋人同士になってハッピーエンドとなる。

という感じの内容だった。

この手の小説は全然読まないのだが、読んでみると案外面白く終盤では思わず感動で泣いてしまった。

後日

僕はマルちゃんのお寺まで散歩と小説を返しに行った。

僕「マルちゃん、ありがとう。この本、おもしろかったよ。」

花丸「どういたしましてー！」

僕「主人公の女の子、すごく頑張ったんだね。最後の方で泣いちゃったよ。」

花丸「本当ずら？そう言ってもらえてうれしいずら！」

マルちゃんはそう言うのと、少し顔を赤くしあっちの方を向いて話し始めた。

花丸「実は主人公の女の子、マルと少し境遇が似てるずら……」

僕「えっ？」

花丸「実を言うとマルも小学生の頃はこの喋り方が原因でいじめられていたずら。」

僕「そうなんだ……」

花丸「小学生の頃は辛かったけど、中学生になってルビイちゃんと出会えて、高校生になって新しいこと……スクールアイドルを初めて、そして優しいお兄さんの祥一くんと出会えたずら。祥一くんもマルが『オラ』とか言っちゃうのを気にしないって言ってくれたよね？それがとっても嬉しかったずら……／／／」

僕「マルちゃん…」

マルちゃんはこつちを向き直して僕の目を真剣に見つめた。

花丸「だからマル、祥一くんのごことが大好きです。マルを祥一くんの彼女にして下さい！」

マルちゃんからの告白…

思えば今までマルちゃんのお寺のコースを散歩をしに行くとき、いつも今日はマルちゃんいるかなっていつも考えてた。自分でも気づかないうちにマルちゃんの顔が見たい、マルちゃんとお話したい、マルちゃんと一緒にいたいって思うようになっていた。僕は気づかないうちにマルちゃんのごことが好きになってたんだな…

僕「マルちゃん、ありがとう。僕もマルちゃんが彼女になってくれたらうれしい。だから、僕のことをマルちゃんの彼氏にして下さい。」

今現在

んとまあ、こんな感じで僕らは付き合い始めたんですね。僕が返事をした直後に花丸のおばあちゃんが登場してめちゃくちゃ恥ずかしかったのはここだけの話。

お、そろそろいい時間だしレストランにでも向かいましょかね。今日は花丸にお腹いっぱい食べてもらって、ケーキもサプライズで用意してるからね。

レストランにて

僕「花丸？いっぱい食べたか？」

花丸「うん、どれもとてもおいしかったぞら！」

僕「それじゃ、そろそろデザートと致しますか。」

花丸「ずら〜？」

僕は店員さん呼んでケーキを出してもらおうようお願いをした。

店員「お待たせしました。」

僕「ありがとうございます。」

店員さんがテーブルにケーキを置いて、ロウソクに火をつけてくれた。その後、ハッピーバースデーの歌を歌い花丸がロウソクの火を消した。

僕「花丸、誕生日おめでとう。」

花丸「ありがとずら〜！」

この後、花丸は喜んでケーキを食べ始めた。本当、この子はおいしそうに食べるよな。見てるこつちも幸せになるよ。

僕「花丸、大好きだよ。」

花丸「マルも祥一くんのこと、大好きずら！」

H a p p y B i r t h d a y , D e a r H a n a m a r u .

渡辺曜誕生日記念2

曜 19歳

祥一 21歳

僕「さて、ハンバーグとケーキの材料も買ったし、家に帰って曜の誕生日会の準備で
もしますかね！」

今日は僕の彼女、曜の誕生日である。最初は一緒にどこかに出かけようかと思ったけど「その日は祥一とずーっと2人つきりでいたい」って言われたのでうちで過ごすことになった。今はとても仲良く過ごせるとは思うけど付き合い始める前は曜の早とちりとはいえめちやくちや泣かせちやつたんだよなあ…

曜と祥一が付き合い始める前

く祥一 Sideく

果南「曜のことが好き？」

僕「うん、もちろん幼なじみとしてじゃなくて一人の女の子としてなんだ。」

果南「そっか、それで祥は何がしたいの？」

僕「曜に告白…と一緒にプレゼントを渡したいと思うんだ。でも女の子ってこういう時どんなものを貰ったら嬉しいのかわからなくて…」

果南「なるほどねー。それで私に相談したいと…」

僕「おしえてください！果南先生!!」

果南「うむ！しかたない！では祥一くんに教えてしんぜよう！」

この後、果南は色々と教えてくれたがどうも僕の理解が追いつかない状態が多々発生

した。

僕「ごめん、せっかく教えてくれてるのに…」

果南「まあ様はこういうの昔から苦手だもんね。」

僕「面目ない。」

果南「はあ…わかったよ。プレゼントを買いに行くの付き合っただけよ。」

僕「マジで！ありがとう、果南！」

果南「ただし、私はちよつとアドバイスするだけ。決めるのは様だからね？」

僕「うん！」

。

数日後

沼津にて

果南「それで、祥は曜に何をプレゼントしたいと思ってるの？」

僕「うん、出来れば普段から身につけるようなもの。例えば…財布かキーケースとか
どうかな…？」

果南「へえー、祥にしてはなかなかいい選択じゃん。」

僕「さんきゅ、あとは曜がどんなデザインが一番喜びそうかなー。」

果南「そうだね、まずは色々見て回ろうか！」

こうしてしばらく財布やキーケースを見て回った。

〈曜 Side〉

今日は千歌ちゃん、梨子ちゃんと一緒に沼津に遊びに来ています！とあるシヨツピングモールの中を歩いていると…

千歌「あれ、あそこにいるのって果南ちゃんと…祥くん？」

梨子「本当だ。2人で何してるのかな？」

祥くと果南ちゃんが2人つきり？なんで？2人共いい顔してるし距離も近い。祥くんって果南ちゃんのが好きだったの？

………

………

………

そう…だよね…果南ちゃん…スタイルいいし…髪も綺麗だし…やっぱり私なんて…祥くんにとって妹みたいな存在…だったの…かな…

曜「ツ!!」

千歌「よ、よーちゃん!?」

千歌ちゃんが呼び止めようとしたけど、私は構わず堪えきれない涙を流しながらその場から逃げるように走り去った。

く祥一 Side く

僕「果南、ありがとな。多分僕一人だとアレを選べなかつたと思うよ。」

果南「私はちよつと口を出したただけだよ?ちゃんと祥が自分で選んだんだし、曜はきつと喜んでくれるよ。自信もつて!」

僕「果南、ありがとう!」

さて、あとは曜と会う約束をしなきゃ。

く 曜 Side く

あそこからのぐらい走ったんだろう。気付いたら狩野川の河川敷にいた。

千歌「よーちゃん!!」

梨子「どうしたの急に、泣き出して!」

千歌ちゃんと梨子ちゃん、私のこと心配して追いかけてきてくれたんだ…千歌ちゃんと梨子ちゃんにならこの気持ち、話してもいい…よね…?

曜「私、ずっとね…祥くんのが好きだったの…もちろん1人の男の子として。でもね、自信がなくてどうしても気持ちを伝えるっていう次の1歩が踏み出せなかったの。それに、祥くんは私のことを幼なじみとか妹みたいな存在ってしか思ってたの。なって思っちゃうと勇気を出すどころか悲しくなっちゃって…そう思ってた時にあの光景を見て思ったの。祥くんは果南ちゃんが好きなんだって。だってあんなに嬉しそうなお顔をしてたんだよ? あんな顔、きつと果南ちゃんの前でしか出来ないよ!」

あの現実が受け入れられなくて、祥くんに気持ちを伝える勇気が持てなくて、ただただ悔しくて涙が止まらない。

千歌「そんなふうに思ってたんだ。」

曜「え？」

梨子「あれ、話そっか？」

千歌「そうだね、祥くんには恥ずかしいから絶対内緒だよ！って言われたけど。」

曜「え？」

祥くん、千歌ちゃんと梨子ちゃんに私の事何か話してたの？

梨子「祥くん、前に話してたんだよ。『曜の笑顔にはいつも救われてる。』って。」

千歌「それにね『曜が隣にいてくれるだけで落ち着くし、安心するんだ。』」

梨子『単純に一緒にいたいというよりももうずっと一緒にいたい。僕、曜のことが…
やっぱここじゃ言わない！』つて。スゴく照れくさそうにいつて、なんだか聞いている
こつちが恥ずかしくなつちやつたなあ。』

え？うそ？祥くん、私のことそう思ってたの？

曜「じゃあなんで祥くんは今日、果南ちゃんと一緒にいたの…？」

梨子「それは、本人に聞いてみないと…ね？」

千歌「よーちゃん！勇気だして！」

曜「…うん！」

千歌ちゃん、梨子ちゃんが励ましてくれて思った！祥くんに気持ちを伝えよう！
そう思った直後にスマホがなった。L O N E？誰からだろ？

曜「LINE？祥くんからだ？なにになに…？」

祥一『急にゴメン。今晚、びゅうおに來れないかな？話したいことがあるんだ。』

曜「!!」

梨子「どうしたの？曜ちゃん？」

曜「こ、これ。」

祥くんからのメッセージを千歌ちゃんと梨子ちゃんに見せた。

千歌「コレは…チャンスだよ！よーちゃん！」

梨子「コレは…間違いないわね！」

曜「えっ？そうかな？勘違いとかじゃないかな？」

梨子「曜ちゃん、がんばって！」

千歌「よーちゃんならきつと大丈夫だよ！」

曜「…うん！」

私はすぐに祥くんに返事をし、約束の時間よりも早めにびゅうおに向かった。

く祥一 Sideく

僕「…よし！」

約束の時間までは少し時間があつたので沼津駅周辺のカフェでコーヒーを飲んでい

た。やはり告白まえの緊張だからか、ハイペースでコーヒーが進んだ。時間は…うん、今ここを出れば約束の15分ぐらい前にはびゅうおに着くだろう。お勘定を済ませ、びゅうおまで愛車を走らせた。

さてと、びゅうおに到着つと。時間は…うん、読み通り約束の15分まえには着いたな。つてあれっ？もう曜がいる！約束の時間間違えたか？…いや、あつてる。よかつた、時間間違えて遅刻したかと思つたわ。

僕「曜！」

曜「あ、祥くん！」

僕「ごめん、まった？」

曜「いや、さつき着いたところだよ。」

僕「そっか、よかつた。」

曜「それで祥くん、話ってなに？」

…そう言えば告白ってどうやってやればいいんだ…？wやつべ！どうすればいいんだ！

…あーもう！こうなったら行き当たりばったりでやるしかねえ！漢を見せろ！時雨！

僕「あ、うん。実は曜に渡したい物があるんだ。受け取ってくれ。」

曜「コレって、プレゼント？」

僕「ああ、受け取って貰えるかな？」

曜「いいの!?ありがとう!でもどうして?誕生日とかじゃないのに。」

僕「ここからが本題だ。聞いて欲しい…」

曜「う、うん…」

ここまで来たらもうあとには戻れない。ちゃんと伝えよう。じゃなきや後悔するし、色々と相談に乗ってくれた果南にも申し訳ない。さあ、行け！時雨！僕は曜へと視線を向け直し、口を開いた。

僕「僕は、曜のことが大好きです。これから先、ずっと僕の隣に居てください。」

とうとう言ってしまった。もう後には戻れない。この先に待ってるのはハッピーエンドかバッドエンドの2択のみだ。どうなるかは曜の返答次第。曜は今どんな顔をしているだろうか。見ると曜は泣いていた。

曜「…いよ…」

僕「えっ？」

曜「遅いよ!!」

曜はタツクルの勢いで僕の胸へと飛び込んだ。

曜「もう! ずっと祥くんが私の気持ちに気づいてくれるのまっけたんだよ! 今までずーっとアピールしてたのに全く気づいてくれなくて!」

祥「…」

曜「気づいてくれないからやっぱり私って妹的な存在でしかないのかなって思ってた!」

僕「ごめん。」

曜「でも今日、そうじゃないってことがわかった。それどころか祥くんも私のことが好きってことも知れた。だから今、とってもうれいよ。」

僕「曜…。」

曜「だから私の方こそ、よろしくね：／／／」

こうして無事にカップルになった。

この後、後ろから千歌と梨子ちゃんが登場してビックリしたのはここだけの話w
どうやら果南に曜へのプレゼントを選ぶ相談をしている所を3人に目撃されたり、その光景を見た曜が果南と僕が付き合っていると勘違いして泣き出したりした話を聞いて更にビックリしたりと今日だけで数年分の刺激を受けた気がした。

今現在

さあ〜て、家に帰りついたし料理の下ごしらえでもやりますか！そう思っていた矢先に家のインターホンがなったので出てみた。

僕「曜！」

曜「えへへ、早いけど来ちゃった／＼／＼」

僕「ま、まあ入んなよ。」

曜「おじゃましまーす！」

曜は家にかかるやいなや、買い物袋の中身を確認しだした。うーん、サプライズでケーキも自作して見ようかと思ったけどこりゃサプライズ失敗やな。

曜「ほほう、コレはハンバーグとケーキの材料でありますな！」

僕「ご名答。やっぱりバレちゃったか。」

曜「曜ちゃんは祥くんの考えることはお見通しなんだぞー？」

言われちゃった。ホント、昔っから曜はそういうところ鋭いんだよなwもうバレちゃっ

たし、曜と一緒に料理するのでしょうか！曜もヤル気満々だしw

曜「なんかこうして一緒に料理していると、夫婦みたいだね。」

僕「ねー。いつか絶対に、夫婦になろうよ。」

曜「祥くん…」

その直後、頬につんとした刺激が来た。

曜「チュツ♡」

僕「よ、曜／＼」

曜「えへへ、約束だからね♡」

僕「うん！」

お料理中だったけど我慢出来なくなってしまう、お互いにハグをした。

僕「曜、大好きだよ。」

曜「私も、祥くんのこと大好きだよ♡」

H a p p y B i r t h d a y , D e a r Y o u .

番外ストーリー

千歌と曜との出会い

とある日の夜、帰宅したら一通の郵便が届いていた。

僕「郵便？親父からだ。」

中身は手紙と一枚の写真が入っていた。

親父『祥一！どうだ？内浦の生活は満喫しているか？どうせお前のことだから大きくなつた千歌ちゃんと曜ちゃんを見て鼻の下伸ばしてるんだろ？w w w』

僕「うっせ！wバカオヤジw w w」

思わず手紙に向かってどついてしまったw

親父『それはまあさておき、この前家を掃除していたら懐かしい写真を見つけたんだ。お前がもつとけ!』

僕「手紙はこれで終わりか…まったく、なんつー手紙だよ…んで、写真つてのはどんな写真だ? あつ、これは…」

写真に写っていたのは幼い頃の千歌と曜と僕だった。後ろには親父の当時の愛車、黒の180SXが写っている。この写真を撮ったのは千歌、曜と初めて出会った日というのは今でもハッキリと覚えている。

僕「懐かしいなあ。写真立てに入れて飾っておくか。」

後日——。

千歌から今から3人で家に行っていいかとLONEが来たのでいいよって返したら5分も経たないうちにやってきた。

千歌「祥くーん！」

曜「ヨーソロー！」

梨子「こんにちは！」

僕「3人ともいらっしやい。今日はどうしたんだい？」

千歌「今日は3人で宿題をやるうかと思つて…部屋貸してほしいんだけどいいかな…？」

僕「いいよ、今日はこっちの部屋使ってもらえる？」

千歌「ありがと！祥くん♪」

今日は前に貸した部屋ではなくリビング兼寢室の部屋を貸した。というのも前に貸した部屋には荷物が置かれている状態だからである。

千歌たちはお礼を言つて部屋に入った。僕はその後、千歌たちに出す用のお茶の用意を始めた。

く千歌 Side く

祥くんに部屋を借りた私たちはテーブルを囲んで座つた。ふと部屋を見渡すと懐かしい写真が目に入った。

千歌「あつ？この写真つて。」

曜「なにになに？あつ？これは…」

梨子「なにになに？あつ？この写真に写つてるのつて千歌ちゃんと曜ちゃんと祥くん？」

千歌「うん。これね、初めて祥くんと出会つた日に撮つた写真なんだ。」

梨子「そうなんだ。この頃の祥くん、かわいいく〜！」

く祥一 Side く

さて、お茶の用意ができたし3人の所に持っていくか。

僕「3人とも、お茶でいい？」

3人「うん」

テーブルにお茶を置いて部屋を出ようとしたところで千歌に呼び止められた。

千歌「ねえ祥くん？この写真って…」

僕「この写真？ああ、この前オヤジから送られてきたんだ。このときのこと覚えてる？」

千歌「うん。もちろん、忘れるわけないよ。」

僕「そっか。懐かしいよね。」

梨子「ねえ。この時って何かあったの？」

千歌「写真のわたし、膝に絆創膏貼ってるでしょ？これ、祥くんが貼ってくれたんだ。」

僕「そんなところまで覚えてるのか。」

千歌「うん。だって、私にとって大切な思い出なんだもん……」

単に放っておけなかっただけだったけど……なんか照れくさいな。ちよつとあの頃の話をしたくなってきたしテーブルも丁度一人分のスペースが空いているのでちよいとおじやましますか。

僕「よっこらせと。ちよつと昔話してもいいかな？」

梨子「うん！聞きたい！」

ようちか「私も！」

。

祥一 5歳

ようちか 3歳

く千歌 Sideく

曜「千歌ちゃん、まずいよ。やめようよお。」

千歌「大丈夫だよ。今日こそこの車のライトがどうなってるか見るんだから！」

曜「見つかったら怒られるよ。」

今わたしは近所の家にとまっている車のライトがどうなっているのかを見ようとしているの。その車は普段はライトが見えないのだけれどこの前の夜に見かけた時はライトが見えるようになっていたんだよね。その光景をもう一度見たいわたしはその車が止まっている隙を見てライトのヒミツを見てみようとしているの。

ガチャ

その時、その車が止まっている家のドアが開き出した。

曜「千歌ちゃん！」

千歌「逃げるよ！曜ちゃん！」

その時、わたしと曜ちゃんは見つかったら怒られると思って走って逃げようとした。

く祥一 Sideく

僕は何がきつかけかは忘れたけど車が好きだ。多分父ちゃんの影響だろう。運転？勿論したいさ。でも5歳だから運転は出来ない。ペダルに足が届かないし、それに免許

というものがないと運転出来ない。なので僕はラジコンで気分だけでも運転するのを楽しんでいる。

僕「さーて、今日もインプレッサ（ラジコン）でドライブだよ」

ガチャ

ラジコンを走らせるために外に出たらみかん色の髪の女の子とグレーの髪の女の子が走っていた。女の子たちが行ったらラジコンを走らせようかと思っていたらみかん色の髪の女の子が盛大に転び、泣きだした。あまりにも大泣きしたので思わず駆け寄った。

みかん「う、うわぁーん！」

僕「ちよ、大丈夫!？」

みかん「痛いよー!!」

僕「ちよつと見せて!…うわつ、痛そ〜…」

みかん「うわぁーん!」

みかん色の髪の子は膝を擦りむいていた。その子は泣き止む気配もないし、放っておくことが出来なかったためその子を家で手当しようと思った。絆創膏とキズぐすり、たしか救急箱にあつたよな…?

僕「ねえ、うちにおいで。僕が手当してあげるよ。」

みかん「グスツ…う、うん…グスツ…」

僕がみかん色の髪の子の手を取ってうちに連れていこうとするとグレーの髪の女の子がこつちにやってきた。

グレー「千歌ちゃん!!」

僕「ん？君はこの子のお友達かい？」

グレー「う、うん。」

僕「だったら君もおいでよ。これからこの子の手当するから。」

グレー「う、うん…」

僕は2人の女の子を家に上げ、みかん色の髪の子の手当てをしてあげた。

僕「はい、おしまい。これでもう大丈夫だよ。」

みかん「ありがとう。」

グレー「ありがとう。」

父「祥一？いるか？おつ？新しいお友達か？」

みかん色の髪の毛の女の子の手当てが終わったタイミングで父ちゃんがやってきた。

僕「父ちゃん、家の前で転んでたから手当してあげたんだ。」

父「そっか！えらいぞ、流石父ちゃんの息子だ！」

そう言つて父ちゃんは僕の頭をわしやわしやと撫でた。

僕「へへっ♪」

みかん「あ、あのっ！ごめんなさい！」

僕&父「へ？」

突然みかん色の髪の毛の女の子が謝ってきたけど僕と父ちゃんは何のことかわからな
かった。

みかん「わたし、この家の車のライトが気になって、どうにか開けようとしてたの。でも開かなかった。さつき転んでたのもこの子が家から出てきた時で、見つかったら怒られると思って逃げようとして走ったからなの。」

グレー「千歌ちゃん……」

なるほど。それで家の前を走ってたんだ。確かにあのライトは気になるよね。僕もずっと見てるけど未だにライトが開く瞬間を見るのにワクワクするもん。

父「……なーんだ、そんなことか。」(ニシシ)

女の子2人「えっ?」

父「あのライトはな、リトラクタブル・ヘッドライトって言ってライトを点ける時だけ出すライトなんだ。まあなかなか見かけないから気になっても仕方ないさ。おいで！見せてあげるよ！」

父ちゃんは女の子2人にリトラクタブルの開閉を見せてあげてた。2人とも目を輝かせて見てたからか父ちゃんはドヤ顔だったWその後、なぜか車を背景に2人の女の子と僕で写真を撮ろうという流れになった。

女の子2人「ありがとう！おじさんと…えつと…？」

僕「あ、僕は時雨 祥一！5歳だよ！」

みかん「わたしは高海 千歌！3歳！」

グレー「わたしは渡辺 曜！千歌ちゃんと同じで3歳！」

僕「千歌ちゃんと曜ちゃん、よろしく！写真出来たら渡すよ！」

千歌「うん！よろしくね！祥兄ちゃん！」

曜「よろしくね！祥一お兄ちゃん！」

今現在。

梨子「へえー、そんな事があつたんだ。」

僕「うん、あれからよく一緒に遊ぶようになったんだ。」

千歌「家も近かったしね。」

曜「わたしはよく千歌ちゃんの家に遊びに行つてたからその時によく遊んでたんだ。」

僕「ホント、懐かしいなあ。そういう僕のこと『祥くん』って呼ぶようになったのは何時からだっけ？」

千歌「うーん、私たちが小学校に入る前だったかなあ…？」

僕「そっか、なんで呼び方変えたんだい？」

曜「ええっ！／＼／＼ええつと…／＼／＼」

千歌「そ、それは…／＼／＼」

僕「それは？」

梨子「祥くん…？」（ジト）

僕「え、ええ…？」

なんで梨子ちゃんにジト目で見られてるんだ？（泣）

曜「あ、アレだよ！／＼／＼何となく「お兄ちゃん」って呼ぶのが恥ずかしくなったんだよ！／＼／＼」

千歌「そ、そうだよ！／＼／＼じゃあ聞くけどなんで祥くんは私たちを呼び捨てで呼ぶようにしたの？／＼／＼出会った頃はちゃん付けだったのに！／＼／＼」

僕「それは…ちょうどその頃、親友が出来た頃だったんだ。そいつとはお互いに下の名前で呼び捨てで呼んでた仲でな、それでふと思つたんだ。千歌と曜、それに果南のこともそいつと同じぐらい…いや、そいつ以上に一緒にいたいと思う子なんじゃないかって。そう思つてたら意図せず呼び捨てにしちゃつてたつて所かな…／＼／＼」

うわ…なんか軽い告白みたいなこと言つちやつた！引かれると思つていたら千歌と曜が顔を真っ赤にして軽くパニック状態になつていた。

千歌「い…い…い…一緒にいたい…／＼／＼」

曜「あ…あわわわわ…／＼／＼」

そのまま千歌と曜は部屋の端に寄せてある畳んだ布団に顔を埋めてしまった。僕の

においが付いてて恥ずかしいからあんまりやらないで／＼／
つて、それは置いといてやべえ…完全にやっちまった…パニックになるぐらい引かれ
てしまったようだ。しばらく立ち直れないかも。千歌と曜が落ち着いたら謝ろう。そ
う思っていると…

梨子「祥くんつて、意外とアレね。」

僕「アレ？」

梨子「アレはアレよ。あと、千歌ちゃんと曜ちゃんは引いてないからね。」

つてなんで思ってることがバレてるんだ!?!もしや梨子ちゃんつてエスパー?

数分後

千歌と曜が落ち着いたらしく顔を上げたのでさっきのことを謝ろうとした。

僕「千歌、曜？その…さっきは変な事言っでごめんね。」

千歌「う、ううん、大丈夫だよ／＼／」

曜「ちよつとビックリしただけだから／＼／」

僕「そつか。えつと…その…呼び方だけど、もし呼び捨てが嫌だったらちゃん付けに戻すけど…」

ようちか「いや、呼び捨てがいい!!」

僕「お、おう…(汗)」

曜「だって一緒にいたいって思ってもらえてすごくうれしいんだもん…／＼／」

僕「えっ？」

曜 「えへへ、なんでもないよーだ！／＼／＼」

なんでもないって言うわりには嬉しそうな顔をしてる曜。まあ本人達が呼び捨てがいいっていうなら今後も呼び捨てで呼ぼう。

クリスマスパーティー

12月24日――。

今日はなんの日？ふっふー♪

はい、そんなネタを知ってる僕はいくつでしょう？18歳でございますw今日はクリスマス・イブでございますがいつもどおり仕事に行き、いつもどおり仕事から帰ってきました。別にいつもと変わらない日常でございます。そう考えたら毎日がクリスマス・イブですね。

僕「つてそんなことを考えてたらマジで悲しくなってくるからやめよ…」

そんなこんなで帰宅。沼津にいとあつちこつちカップルだらけで悲しくなってるのでまっすぐ帰ってきた。と言っても誰もいない自分の家に帰ってもそれはそれで寂しい。

僕「あーあ…なんかアレだし、西伊豆スカイラインにでも流しに行こうかなあ…」

そう一人で呟いて家を出て車のエンジンを始動した。うん、心地いい音だけどなんか違う。やっぱりボクサーエンジンだから不等長のエキマニは入れたいかな。あの音で僕はスバル車に憧れたからね。

そんなことを考えていたら見覚えのある女の子が歩いてきた。千歌と果南だ。2人は僕に気づいたようで駆け寄ってきたので窓を開けた。

僕「あれ？千歌と果南？」

千歌「あ、祥くん？これからお出かけ？」

僕「うん、ちよつとね。」

果南「どこに？」

僕「西伊豆スカイライン。」

果南「何しに？」

僕「攻めに。」

果南「一人で？」

僕「うん。一緒に行くか？」

果南「行かない。」

僕「ちえー。残念。」

千歌「つてそうじゃなくてー！」

千歌が大きい声を出したので思わずビツクリしてしまった。

千歌「もう果南ちゃん！なんでここに来たのか忘れてるでしょ！」

果南「忘れてないよおー。」

千歌と果南のやり取りにアタマの上には？マークを浮かべていたら千歌にあることを訪ねられた。

千歌「祥くんって今晚ひま？」

僕「うん、悲しくなるぐらい暇だよ。だから走りに行こうとしてたんだ。」

千歌「だったらうちでクリスマスパーティーやらない？」

……

……

……

＼（ω）／ウオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アーツツツツツツツツツツツツツツツ!!

マジか!クリスマス・イブに幼馴染(しかも美少女)とクリスマスパーティとか!オレ超リア充じゃん!内浦に帰ってきてよかったー!

：おっと、やべえ。喜びのあまりキャラが崩壊しそうになったわwちゃんと返事しないとアカンw

僕「行く!」

千歌「やった!じゃあ千歌の家に行つづー♪」

千歌はそう言って運転席のドアを開け、僕の右腕を引っ張って連れていこうとした。

僕「ちよ、まって!まだ車のエンジン切ってないく!」

—。

千歌に右肩、果南に左肩を抱えられた状態で十千万に到着。あのー…自分で歩けるん

でその、連行スタイルで連れ出すのやめてくれませんかね…

千歌「曜ちゃん！梨子ちゃん！祥くん連れてきたよー！」

曜「よ、ヨーソロー…（笑）」

梨子「こ、こんにちは…（笑）」

曜と梨子ちゃんは連行スタイルを見て苦笑していた。

僕「こ、こんちわ…千歌と果南、そろそろ離してくれ…」

ちかなん「あ…うん。」

千歌と果南は案外すぐに解放してくれた。なお、連行スタイルの間、ずっと腕に2人の柔らかいものが当たっていたなんて言えない。

志満「あら、祥くん。いらっしやい。」

美渡「おつ、祥くんやつと来たか！」

僕「志満さん、美渡さん。おじやましています。」

志満「ちょうど良かった。祥くん、ちよつとてつだつて。」

僕「はい。」

僕は志満さんのお手伝いをしにキッチンに入った。そこに並べられた料理はどれもおいしそうだ。その時、僕のお腹の虫が鳴いてしまった。

僕「あつ…失礼…／＼／＼」

志満「あら、祥くん腹ぺこさんなのね♪でももうちよつと我慢してね。」

僕「うう…わかってるよお…」

志満「じゃあ祥くん、お料理にいい感じに飾り付けしちやって。どう飾るかは祥くんに任せるわ。」

僕「はい。」

Oh…地味にハードルが高い…こういう時は下手に飾ろうとせずに落ち着いた感じに飾ってみるとしますか。

………

………

…

うーん、まあこんなもんか。素人の飾り付けのセンスなんて目も当てられたものではない。なんかこんなの見られたら千歌たちに笑われそうだな。

志満「まあ、祥くん。なかなかいいじゃない！」

僕「それでもないよ。こういうのあんまり得意じゃないから変に飾らないように作っただけだもん。」

志満「それがいいのよ。もっと自信もって！」

僕「へへ、ありがとう。」

その後、ダイニングにお料理を並べ全員集合したのを確認したところで美渡さんが飲み物を配ってくれた。

美渡「そんじゃみんな、飲み物は持つてるかー？うん、持つてるな！じゃあ、メリークリスマスで乾杯しよう！メリークリスマス！」

志満千歌曜梨子果南僕「メリークリスマス！」

乾杯したと同時に僕はコップの飲み物を飲み干してしまった。中身はカルピスソーダかな？うまい。

僕「クー！美渡さん、おかわり！」

美渡「はいよ！祥くん飲むねえ！（ニヤニヤ）」

みんなで過ごすクリスマス・イブはとても楽しい。神奈川に行く前もよく千歌の家でクリスマスパーティーをやったっけ。なんだかあの頃に戻ったみたいで懐かしい。

……

……

……

あれ？なんか体が熱くなってきた……？それになんか頭がボーツとしてきたぞ？なんか飲み物貰うか。

僕「美渡ねく、おかわりちよーだい。」

美渡「はいよ！祥くんどうした？呼び方が昔に戻ってるぞ？（笑）」

僕「えー？そんなことないぞお？」

美渡「…げっ!？」

僕「美渡ねく、どうしたの？」

美渡「さつきからみんなに飲ませてるの、全部サワー系だった…」

志満&僕「ええっ!!」

僕「み、美渡ねく…なんかよく見たらみんなの様子おかしいぞ…?」

僕がそう言ったら志満ねくがみんなの様子をうかがっていた。

志満「…全員酔ってるわ…」

美渡「マジか、やっべえ…!」

僕「と、とにかく次からはジュースやお茶にしよう！」

僕と志満ね、美渡ねが3人で飲み物の話をしていたら4人が絡み始めてきた。

千歌「祥く〜ん？」

曜「ねえ、3人で何話してるのお〜？」

梨子「私たちもまぜてよお〜？」

果南「仲間はずれはいやだよお〜。」

僕「いや、べ、別に仲間はずれにしたつもりは——ツ!!」

果南「えーい！ハグしてやる〜！」

…数年ぶりに果南にハグされた。確か最後にハグをしたのは僕が神奈川に行く前だったつけ。その時とは違い色々柔らかいものがあるわけでした…

果南「えっへへ、祥の匂い安心する〜♪」

ハグしながら匂いを嗅ぐのやめてくれ〜！恥ずかしい…いや、それ以上に理性が飛んじやうから！

僕「か、果南？そろそろ離れてもらってもいい…？その…なんだ…？柔ら——。」

果南「や！たまにはお兄ちゃんに甘えたい！」

(…；；。口。)…グハツ!!

果南、その呼び方はズルいよ。

不意に幼い頃の呼ばれ方をした僕は一瞬で折れてしまった。

僕「まったく、果南は甘えん坊だなあ。よしよし。」(ナデナデ)

果南「えへへ♪」

果南をハグ&撫でているとようちかりこにすごい視線を浴びせられた。なんか千歌が震えてるんだが…

千歌「もう！果南ちゃんばっかりズルい！交代！千歌も祥くんになでもらいたい
！」

千歌は僕から果南を引き離したと思っただら勢いよくハグしてきた。

千歌「えっへへ♪」（スリスリ）

あまりの出来事に呆然としてしまった。

千歌「むう…祥くん。千歌にもなでなでしてよお。」

千歌が頬をふくらませてしまった。ヤバい…かわいい…そのかわいさに折れてしまった。

僕「つたく。千歌も甘えん坊だなあ。よしよし。」（ナデナデ）

千歌「えへへ、祥くんいい匂い。なんだか安心する〜♪」

千歌、そんな無防備なこと言っちゃいけません！僕じゃなかったら襲われちゃうぞ！内心、千歌にツツコミをいれながら撫でていたら今度は曜が千歌を引き離し、タツクルかという勢いでハグしてきた。

曜「もう！果南ちゃんと千歌ちゃんばかりズルい！わたしも撫でて！」

あの、えと…マツはどこからツツコメばよろしいのでしょうか？もう軽く混乱しかけてるんですけど…

そう考えながら呆然としていると…

曜「わたしにはなでなでしてくれないの……？」（ウルウル）

（。？。ゴフツ）

その表情はズルいよ……

今にも撫でないと泣きそうな曜の表情に折れてしまった。

僕「まったく、曜も甘えん坊だなあ。よしよし。」（ナデナデ）

曜「えへへ♪祥くんのここ、安心するなあ♪」

なんとというか、安心してもらえるのは嬉しいけど言う相手によつては速攻で襲われちゃうからそんなことを言っちゃダメよ！

千歌と同じように内心ツツコミをいれながら撫でていると曜が頬を僕の胸にすりすりしてきた。ホンツトかわいいなあ。

すると今度は梨子ちゃんが無言のまま僕と曜を引き離した。無言故に怖い。無言の圧力つてやつですね。

そして梨子ちゃんは無言で僕の胸に顔を埋めた。

僕「あ、あの…：梨子ちゃん…？」

梨子「3人だけズルい…：私だって甘えられるお兄ちゃんが欲しい…：／／／」

・・・(。D)

まさかの梨子ちゃんまで？ようちかなんなら小さい頃、よく一緒にいたから甘えたくなるってのは分かるけど出会って1年も経ってない梨子ちゃんまで甘えたくなくなっちゃったの？しかもお兄ちゃんって…：僕そんなに信頼されてるの!?

梨子「祥兄ちゃん、なでなでしてえ〜」

梨子ちゃんが蕩けそうな声でなでなでを要求してきた。もうやめて！祥一くんの理性はゼロよ！

落ち着け！落ち着け、俺！

梨子「もうう！いつまで待たせるの！」(プク)

梨子ちゃんが膨れてしまった。ヤバイ……めっちゃかわいい。そのほっぺをつつきたい……

梨子「なでなでしてくれるまで離さないからね！」

もう……梨子ちゃんかわいすぎ……

梨子ちゃんにかなり強めのハグをされてるが故、崩壊寸前の理性を保ちながら僕は梨子ちゃんをなでた。

僕「まったく、梨子ちゃんも甘えん坊だったとはね。よしよし。」（ナデナデ）

梨子「……………／／／」

梨子ちゃんは無言で僕の胸に顔をうめてしまった。

梨子ちゃんが満足するまで撫でているつもりでいたら梨子ちゃんのが急に弱くなった。もう満足したのかな？と思って梨子ちゃんの様子をうかがったら眠ってし

まっていた。

僕「…寝てる。」

志満「あらあら…」

横から志満ねく登場。

どうやら志満ねくも美渡ねくもさつきのやりとりを傍観していたらしいw美渡ねくはめつちやニヤニヤしてたとか。そんなことするなら今度はワイが大酒飲んで甘え倒してやるからなツ!!

志満「このまま寝かせてあげよう?美渡く、空いてるお部屋に布団5枚敷いてあげて?」

美渡「わかった。」

志満「そしたら祥くん、みんなを運んであげて?」

僕「うん。」

美渡ねくが布団を敷きに行った部屋に僕は梨子ちゃんを抱えて運んだ。俗にいうお姫様抱っこつてやつですねwその時に気づいたんだけど、ようちかなんも眠ってしまっていた。

部屋に入るともう既に何人か分の布団が敷かれていた。さすが美渡ねく、仕事が早えつすw

残ったようちかなんを運び終わる頃には全員分の布団が敷かれていた。

あれ？布団が1枚多い気がするけど……？まあ後で志満ねくと美渡ねくに聞いてみるか。

僕「4人とも運び終わったよ。」

志満「ありがとう、おつかれさま。」

僕「あ、そうだ美渡ねく。布団、1枚多かったよ？」

美渡「あ、その布団ね、祥くんの分だよ？」

・・・(。D。)

あれ？僕の方？ちよつと待ってちよつと待っておねえさあ〜ん？同室は色々とマズイ訳であります：

僕「ちよつ、美渡ね〜！さすがに同室はまずいよ！」

美渡「大丈夫だって！あの子たちは気にしないよ〜！多分！」

僕「多分って言った！今、多分って言ったよな!？」

美渡「気のせいだよ、気のせいw」

志満「そうよ、気のせいよ〜♪」

いやいや、バツチリ聞いたからね！それに、僕が今日泊まるって初耳なんですけどw

美渡「まあまあ、夜は長いんだしゆっくり飲もうよ。」

志満「そうそう、久しぶりにお姉ちゃんとお話ししましょ？」

僕「むうー。僕まだ18だから酒はダメだからな？」

結局流れで僕も泊まることになった。その後、深夜2時頃までお姉ちゃん2人と飲み続け、4人がいる部屋で眠った。

翌朝——。

僕「う、ううん……」

なんだか寝足りないけど目が覚めた。時刻は午前7時。この時期はお布団から出たくなるのはよくあることだ。でも昨日のことで何となく気まずい。でもそれ以上にちよつと幼児化して甘えん坊になってかわいかったなあ。さつさと布団から出て居

間に向かうとするか。そう思いながら布団から出ようとするとき……

千歌「祥兄ちゃん、行かないで……」

僕「えっ？」

千歌「Zzzz……」

不意に千歌にお兄ちゃん呼びされてビックリしたら単なる寝言だった。「行かないで」ってもしかして僕がいなくなった時の夢でも見てるのかな……？ やっぱあの時黙っていなくなってしまうことで幼馴染を想像以上に傷つけてしまったようだ。ちゃんと謝っているとはいえその心の傷は癒えないのかもしれない。もう、この子達の悲しむようなことはしたくない。

僕「もう、勝手にいなくならないよ……」

僕は千歌にその声をかけながら頭をなでた。それから居間に向かった。

それにしてもかわいい寝顔だったなあ……
居間には既に志満さんと美渡さんがいた。ていうか美渡さん、昨日あんなに飲んでたのにもう酔いが覚めたのかw

志満「祥くん、おはよう。」

美渡「おはよう。」

僕「志満さん、美渡さん、おはよう。」

美渡「あれ〜？呼び方が元に戻ってるぞ（笑）」

僕「あ、あれは、その…なんだ？多分酔った勢いってやつだよ／＼／」

志満「そうなの？お姉ちゃん、昨日の呼び方が嬉しかったなあ〜。」

美渡「そうそう。昨日の祥くんはちよつとかわいかったなあー。（ニヤニヤ）」

志満さん、そのちよつと悲しそうな目はヤメテ！そして美渡さんはニヤニヤすんなW
僕「恥ずかしいからもうやらない／＼／＼」

そう言つてかるくそつぽを向いたら志満さんと美渡さんがヒソヒソ話をし始めた。

美渡「これは、またお酒を飲ませるしかありませんな。」（ヒソヒソ）

志満「未成年にお酒を飲ませちゃダメよ。」（ヒソヒソ）

なんか物騒な事言つてませんか？なんだか怖くなってきたよ（（。∩。；））
美渡さんの物騒な発言にビビっていたら4人がリビングに入ってきた。

りこようちかなん「おはよー（ございます）。」

志満美渡僕「おはよー。」

りこようちかなん「あっ／＼／」

4人は僕の顔を見た瞬間顔を赤くしてしまった。

千歌「あ、あの…祥くん…？昨日はその…／＼／」

あー。この子達、昨日の記憶が残ってますなw

酔った勢いで甘えからの、酔いが覚めたら恥ずかしがる…かわいいなあもう☆

僕「えとー…4人ともかわいかったよ」(メソラシ)

4人とも耳まで赤面して俯いてしまった。

目を逸らした時に偶然視界に入った志満さんと美渡さんはめっちゃニヤニヤしながら見て僕も恥ずかしくなってしまうのであった。